

329.16
Si458



0018145-000

329.16-Si458s

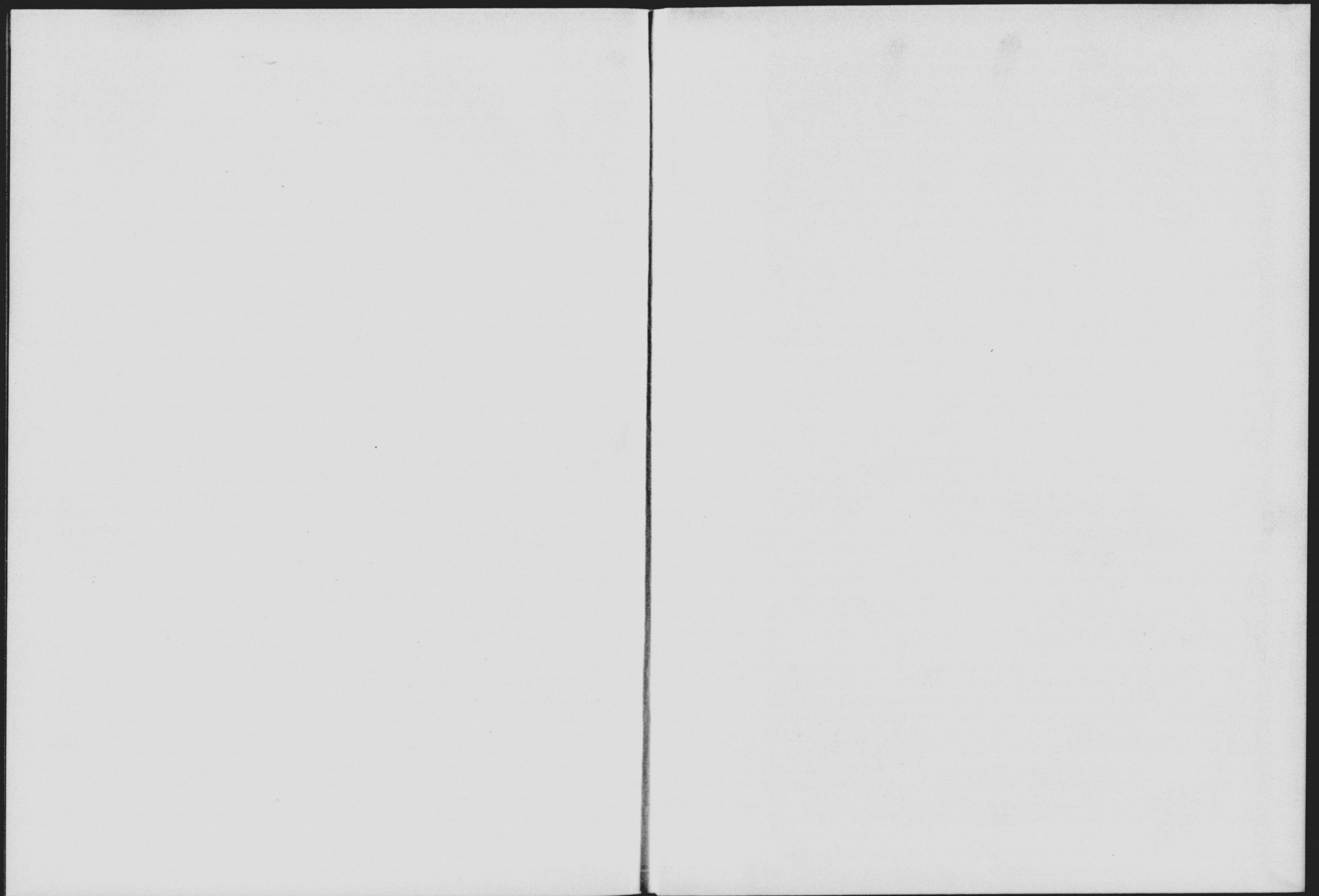
支那国治外法権ニ関スル委員会
ノ報告書

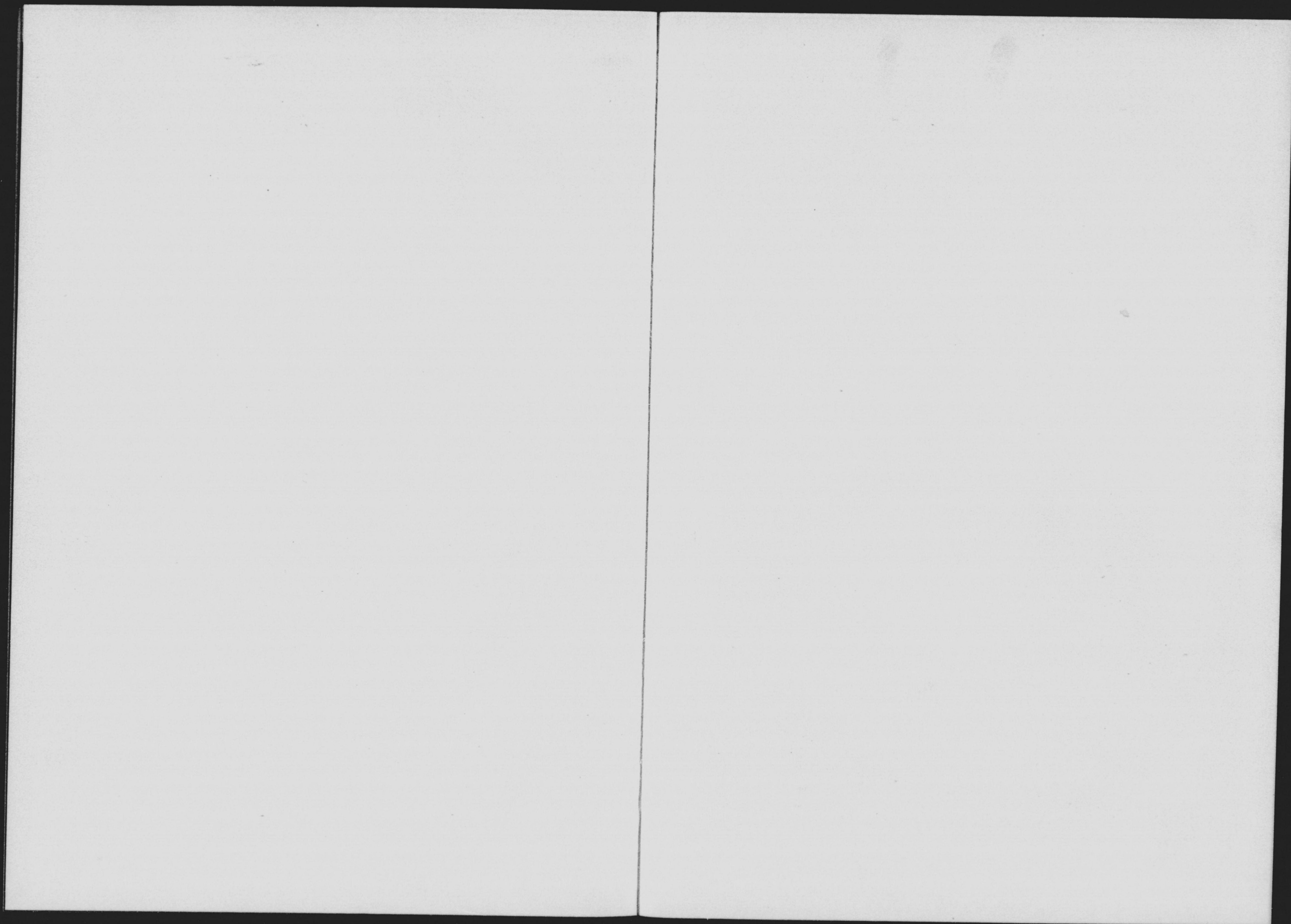
外務省・訳

外務省

1927

ACJ





9V105

昭和二年一月

支那國治外法權關スル委員會報告書

東京都千代田區丸の内二丁目十二番館六号四二室
芳澤中國記念事業財團
電話(28)四一〇八番

外務省

支那國ニ於ケル治外法權ニ關スル委員會ノ經過概要

支那國ニ於ケル治外法權ニ關スル委員會ノ報告書ノ要領

支那國ニ於ケル治外法權ニ關スル委員會ノ報告書(譯文)

支那國ニ於ケル治外法權ニ關スル委員會ノ經過概要

254

254
260
(11)

支那國ニ於ケル治外法權ニ關スル委員會

治外法權關係
支那國ニ於ケル治外法權ニ關スル委員會ハ大正十年(千九百二十一年)華盛頓會議ニ於テ採

擇セラレタル支那國ニ於ケル治外法權ニ關スル決議ニ基キ同會議終了後三箇月内ニ招集セラル
ヘキ筈ナリシモ支那國政情ノ結果數次其ノ開催ヲ延期シ來リ漸ク大正十四年ニ至リ支那國關稅
ニ關スル特別會議ト前後シテ北京ニ招集スルコトトナリ大正十五年一月十二日其ノ開會式ヲ舉
行スルニ至レルモノナリ。

委員會ハ其ノ任務遂行ノ順序トシテ先ツ支那國ノ法規及裁判制度並治外法權實施ノ現狀ニ付
事實上ノ調査ヲ行ヒタリ。治外法權實施ノ現狀ニ關シテハ各國ヨリ其ノ治外法權制度ノ概略ヲ
覺書ニ記述シテ委員會ニ提出スル處アリ支那國委員モ亦兩度ニ互リ覺書ヲ提出シテ各國ノ提出
セシ覺書ニ對シ批評ヲ試ミシモ支那國ノ法規及裁判制度ニ關シテハ各國委員ニ於テ刑事法規、
民事法規、商事法規、裁判組織ニ關スル法規、外支混合事件ノ審理ニ關スル法規及其ノ他ノ諸法

規ノ順序ヲ以テ其ノ内容ヲ調査シ支那國委員之カ説明ノ任ニ當リタリ。而シテ委員會ハ次テ治
外法權制度及支那國一般司法制度適用ノ實際ヲ知ルカ爲ニ其ノ全員ヲ以テ北京所在ノ審判廳、
檢察廳及監獄ノ視察ヲ爲シ且旅行班ヲシテ五月十日ヨリ六月十五日ニ至ル間ニ於テ漢口、九江、
南昌、南京、上海、青島、奉天、吉林、哈爾濱、天津ノ順序ヲ以テ其ノ地ノ審判廳、檢察廳及
監獄並特別會審衙門ヲ視察セシメタリ。

委員會ハ前記ノ方法ニ依リ治外法權制度及支那國一般司法制度ノ調査ヲ行ヒタル後之ヲ基礎
トシテ委員會ヨリ關係國ニ提出スヘキ報告書ノ作成ニ從事シ日、英、米、佛及蘭ノ五國委員起
草委員ト爲リ七月二十三日ヨリ約三箇月間之カ起草ニ從事シタリ。委員會ハ大正十五年九月十
六日ヲ以テ報告書ノ作成ヲ了シ之ニ署名セリ。委員會ハ一月十二日開會式ヲ舉ケテヨリ約九箇
月ノ間總會ヲ開クコト二十三回、各種小委員會ヲ開クコト六十餘回ニシテ其ノ任務ヲ完了シタ
ルモノトス。

支那國ニ於テハ
三國ニ於テハ
委員會

一、概説

報告書ハ緒言ノ外四部ヨリ成リ大正十五年(千九百二十六年)九月十六日北京ニ於テ日(佐分
利)英(スキナー、ターナー)米(ストローン)佛(ツーサン)伊(ロツシー)白(ヴァン、
クツツエム)蘭(アンデエリーノ)丁(チーリツツ)瑞典(レージョンフード)西(アカル、イ、
マリ)葡(ヴァンキ)及支(王寵惠)ノ各關係國委員及其ノ代理ノ署名セルモノナリ。
報告書ニ於テハ委員會カ華府會議ニ於テ採擇セラレタル支那國ニ於ケル治外法權ニ關スル決議
ニ基ツキ北京ニ開催セラレタル次第及其ノ開會式以後ノ活動ヲ略説シタル後其ノ内容ヲ四部ニ
分チ第一部ニ於テハ治外法權實施ノ現状、第二部ニ於テハ支那國ノ法規並裁判及監獄ノ制度、
第三部ニ於テハ支那國ニ於ケル司法運用手續ヲ敘シ第四部ニ於テハ支那國司法制度及治外法權ニ

255

關スル委員會ノ勸告ヲ掲記シタリ。

四

報告書ノ内容ニ關聯シ支那國委員ハ報告書署名ノ際留保ヲ爲シ「報告書ニ署名スルモ報告書第一部、第二部及第三部ニ掲クル記述ノ全部ヲ同委員ニ於テ確認スルモノト看做スヘカラサル」旨ヲ附記シタルカ別ニ報告書ノ勸告ノ部分即チ第四部ニ付テモ一ノ覺書ヲ委員會ニ提出シ(イ)委員會カ治外法權ノ即時撤廢ヲ尙早ト爲シタルハ支那國上下ノ司法改革運動並ニ治外法權撤去ノ意氣ヲ沮喪セシムルモノナルモ(ロ)支那國政府ハ銳意勸告ニ掲ケラレタル支那國司法制度ノ改善ヲ實行スヘキニ依リハ(ハ)列國ハ右實行完了ノ通知ヲ受ケタル後直ニ治外法權撤廢ノ商議ニ着手スヘクニ其ノ以前ニ於テモ勸告中ニ掲クル治外法權實施ノ現狀ニ對スル改善策ヲ實行シ以テ支那國官民ノ期待ニ副ハレ度シトノ趣旨ヲ聲明セリ。

委員會ノ報告書ハ華府會議ニ依レハ必スシモ關係國政府ヲ拘束スルモノニ非サルモ專門的研究トシテ有力ナル參考資料ト爲スヘキモノタリ。帝國政府ハ合衆國政府ト打合ノ上十一月二十九

日ヲ以テ報告書ノ全文ヲ公表セリ。報告書各部ノ内容ヲ左ニ摘録ス。

二、報告第一部、治外法權實施ノ現狀

治外法權實施ノ現狀ニ付テハ節ヲ五ニ分チ、(一)「沿革」ニ於テ千八百四十三年以後治外法權ニ關シ締結セラレシ外國及支那國間ノ條約ヲ基礎トシ、治外法權ノ起源、發達及最近獨、塊、露國ニ依リ行ハレタル治外法權拋棄ノ經緯ヲ略說シ、(二)「淵源」ニ於テ治外法權カ條約、地方的取極及關係國ニ依リテ承認セラレタル慣行ヲ以テ淵源トスルコト竝此ノ淵源ニ基キ治外法權行使ノ實際的方面ハ之ヲ治外法權國人民カ民事ノ被告タル場合ト治外法權國人民カ原告又ハ被害者タル場合トニ分チテ之ヲ觀察スルヲ便トスルコトヲ述ヘ、(三)「外國裁判所」ニ於テ所謂治外法權國人民カ被告ノ場合ニ於テ民事又ハ刑事ノ事件ヲ審判スヘキ治外法權國通常裁判所及領事裁判所ニ關シ其ノ管轄、上訴手續、適用法及監獄ノ實際ヲ記述シ、(四)「支那國裁判所」ニ於テ治外法權國人民ヲ原告又ハ被害者トシ支那人ヲ被告又ハ被告人トスル民事又ハ刑事ノ事件ヲ管轄

五

256

スヘキ支那國ノ裁判所ニ付治外法權國ハ最惠國條款ヲ援用シテ英帝國又ハ亞米利加合衆國ト支那國トノ條約ノ豫定セルカ如キ所謂會審ノ制度ニ依ルモノ多キコトヲ述ヘ次テ所謂會審制度ノ内容ヲ管轄及手續、上訴、適用法規及監獄ノ順序ニ依リ一般ノ場合ト上海、厦門及漢口ノ特設會審衙門ニ於ケル場合トニ分チテ詳細ニ説明シ、(五)「考察」ニ於テ治外法權ニ固有又ハ隨伴スル各種ノ缺陷若ハ短所又ハ濫用ノ問題ニ言及シ、順次ニ、(イ)治外法權カ支那國ノ司法權ニ對スル制限ナルコト、(ロ)裁判所及適用法ノ多數相對立スルコト、(ハ)治外法權國ノ支那國ニ在ル第一審法廷ノ數ノ十分ナラサルコト、(ニ)治外法權國裁判所ノ職員ノ能力及訓練カ十分ナラサルコト、(ホ)治外法權國ノ第二審法廷ノ支那國領土外ニ在ルヲ常トスルハ支那人ニ取リテ不便ナルコト、(ヘ)治外法權國人民カ實際ニ於テ支那國ノ交通、租稅又ハ其ノ他ノ法規ノ適用ヲ免除セラレツツアル爲時ニ不當ナル結果ヲ發生スルコト、(ト)支那人ニ付生スル國籍ノ牴觸ハ治外法權ノ存在ノ爲更ニ複雑ナル困難ヲ齎ラスニ至リタルコト、(チ)治外法權國カ支那人ニ對シ不當ナル治外

法權ノ保護ヲ與ヘツツアルハ濫用ト認メラルヘキコト、(リ)犯罪人引渡ニ關スル取極ノ存セサルコト、(ヌ)外國人住居ノ不可侵權カ犯罪人ノ庇護ニ濫用セララルコト、(ル)支那國ニ在リテハ外國人ハ旅行、通商及居住ニ付幾多ノ制限ヲ加ヘラレツツアルコト、(ヲ)支那國ニ在ル裁判所相互間ニ司法上ノ相互援助ノ慣行十分ニ行ハレサルコト、(ワ)外國人辯護士ノ支那國裁判所出廷カ許可セラレ居ラサルコトヲ擧ケテ之ニ必要ナル解説ヲ附ス。

三、報告第二部、支那國ノ法規並裁判及監獄ノ制度

支那國ノ法規並裁判及監獄ノ制度ニ付テハ節ヲ分チテ五トシ、(一)「法典編纂事業」ノ節ニ於テハ「修訂法律館」ナル前清時代設定ノ法典編纂所カ多數ノ法規ヲ立案シテ成績顯著ナルモノアリシ次第ヲ敘シ、(二)「憲法」ノ節ニ於テハ更ニ五項ヲ分チテ先ツ中華民國以來今日迄ニ存在シタル臨時約法、袁世凱ノ修正約法及千九百二十三年ノ中華民國憲法ノ各箇ニ付短評ヲ加ヘ、次ニ段祺瑞執政就任以來憲法ノ存否不明ト爲リタルコトヲ記シ、進ムテ憲法ト現行法規トノ關係ニ及

ヒ現行法規ハ憲法ノ豫定スル議會ヲ通過シタルモノ稀ニシテ其ノ大多數ハ大總統又ハ其ノ下ニ屬スル行政各部ノ長官ノ制定公布セル所ニ係リ而モ其ノ效力ノ源泉カ如何ナル憲法ノ規定ニ存スルカ判然セスト爲シ、(三)「法規」ノ節ニ於テハ更ニ五ノ項ヲ分チ現行ノ支那國法規ニ付其ノ内容ヲ檢討シ、(イ)「刑事關係諸法規」ニ於テ暫行新刑律以下各種ノ刑事實體法規、刑事訴訟法規及司法警察法規ノ内容中特ニ注意スヘキモノニ付解説ヲ加ヘ、(ロ)「民事關係法規」ニ於テ民法々典ノ欠缺スルコト及大清律令カ現行民事法規ノ欠缺ヲ補ウテ今ニ其ノ效力ヲ有スルモ其ノ有效部分ノ必スシモ分明ナラサルコトヲ敘シ、次テ大審院判例カ民法ノ重要ナル淵源ヲ爲スコト及其ノ一判例カ慣習法及條理ヲ以テ成文法ニ次ク民法ノ淵源ナリト決定シ竝條理ノ内容ヲ爲スモノハ實際ニ於テ法規ノ草案ナルヲ普通トスルコトヲ叙シ、更ニ進ンテ民法典ノ補充規定又ハ特別ト認メラルヘキ特別ノ民事實體諸法規及民事訴訟法規ニ付其ノ特異ナル規定ヲ摘記シ、(ハ)「商事關係法規」ニ於テ商法典ノ一部タル商人通例及公司條令以下ノ商事諸法規ニ付重要ナ

ル規定ヲ解説シ、(ニ)「雜法規」ニ於テ戒嚴法、國籍法、鑛業法、土地收用法及自治諸法規等ニ付規定ノ大意ヲ説明シ、(ホ)「法規ニ關スル考察」ニ於テ法規ノ形式及内容ニ對シ加ヘ得ヘキ非難トシテ、法規ノ效力ニ關スル原則的規定ノ欠缺、法規制定方式ノ不確實及必要ナル法規ノ欠缺等ヲ舉ケ簡單ニ其ノ理由ヲ説明シ、(四)「裁判制度」ノ節ニ於テ、(イ)「裁判所ニ關スル概説」、(ロ)「司法行政」、(ハ)「新式裁判所」即チ審判衙門、(ニ)「過渡的法院」即チ縣司法公署及新疆司法囑備處、(ホ)「縣知事法院」、(ヘ)「特別裁判所」即チ東三省特別區域法院、(ト)「軍法會議」、(チ)「行政裁判所」即チ平政院、(リ)「警察法院」、(ヌ)「司法官ノ考試及任用」、(ル)「司法官ノ官等及俸給」、(ヲ)「司法官ノ懲戒」、(ワ)「律師」、(カ)「訴訟費用」ノ各項ニ付解説ヲ與ヘ、(三)「裁判制度ニ關スル考察」ニ於テ行政官憲ヲ司法權ノ一部ニ關與セシムルコト、新式裁判所カ互ニ其ノ上級又ハ下級ノ分廷ヲ兼ヌルコト、縣知事法院ノ管轄權過大ニシテ其ノ訴訟審理手續ノ粗略ナルコト、縣司法公署ノ訴訟手續ノ粗略ナルコト、軍法會議カ一般人ノ訴訟ニ關與スルコト、警察

258
上

法廷ノ訴訟ニ上訴ノ制度ヲ缺クコト及行政裁判所ノ活動ノ顯著ナラサルコトヲ以テ其ノ主要ナルモノト爲シ、(五)「監獄」ノ節ニ於テ、(イ)「概説」、(ロ)「監獄行政及司獄官」、(ハ)「監獄及在監者ニ關スル法規」、(ニ)「監獄職員ニ關スル法規」ノ各項ニ付解説シ、(ホ)「監獄制度ニ關スル考察」ニ於テ新式ノ監獄及看守所等ニ關スル限リ制度上之ニ對シテ加フヘキ非難ナキモ其ノ數未タ少ナキヲ遺憾トスト爲セリ。

四、報告第三部、司法運用手續

司法運用手續ニ付テハ節ヲ八ニ分チ、(一)「緒言」ノ節ニ於テ先ツ打續ク内亂ノ結果中央政府ノ權威失墜シ地方各省ノ權力増大シ且千九百二十四年ノ秋ヨリ千九百二十六年ノ春ニ至ル間中央ノ行政權力ハ軍憲ヨリ擁立セラレタル臨時政府ノ下ニ置カレタリト爲シ、次テ支那國ノ立法府タル議會ハ其ノ組織確立セス過去ニ於テ成立セルモノハ概ネ短命ニシテ立法ニ關與スル所尠ク立法ハ必然的ニ變動窮ナキ大總統、司法總長及其ノ他ノ行政機關ノ手ニ委セラレタリトシ、(二)「軍

憲ノ司法權干涉」ノ節ニ於テ軍憲ノ司法權干涉ハ戒嚴法ノ適用、或ハ審判廳カ財政上ノ支持ヲ軍憲ニ仰クノ事實、又或ハ軍人、其ノ知己又ハ軍憲ト特殊關係アル商人等カ犯罪ヲ行フモ審判廳ニ於テ處罰ハ勿論民事賠償ヲモ命シ得サルノ實例ニ見ルヲ得ト爲シ、其ノ實例トシテ委員會ノ開催後北京又ハ其ノ附近等ニ起レル十一箇ノ軍憲ノ不當裁判ヲ引照シ、(三)「其ノ他ノ司法權干涉」ノ節ニ於テ(イ)縣知事法廷及特別會審衙門ノ外國人ヲ原告トスル訴訟事件ノ審理ニ於テ行政官憲カ屢々知事ニ指令ヲ發シ、(ロ)最近廣東及其ノ近接地域ニ於テ罷業者カ普通法廷ニ反抗シ自ラ裁判所ヲ設立シ罷業反抗者ノ審問ヲ行ヒ、(ハ)千九百二十五年ノ夏楊子江流域ニ於テ排外熱熾烈ニシテ外國人ノ身體及財産ヲ脅スコト甚シカリシニ拘ハラス司法官憲カ之ニ何等手ヲ下スコトヲ得サリシハ共ニ或ル意味ニ於ケル司法權干涉ナリトシ、(四)「法規ト其ノ適用」ノ節ニ於テ(イ)支那國ノ法規ハ全國的、普遍的ニ適用セラレス、委員會ノ研究セル法規モ中央政府カ法律ナリト宣シタルモノナルモ支那國全土ニ互リ一般的ニ適用セラルヤ疑ハシ、(ロ)保釋ニ關スル規定

ハ大體當ヲ得タルモ司法官ハ實際ノ運用ニ當リ狹量ナル態度ヲ執リ保釋ハ例外トシテ許可セラ
 ルルニ過キス、^(ハ)暫行新刑律及刑事訴訟條例ニ於テ被告其ノ他ニ對スル拷問ヲ禁止スルニ拘ハ
 ラス自白強要ノ爲軍憲、縣知事及警察官憲ニ於テハ屢々拷問又ハ其ノ他ノ苛酷ノ取扱ヲ爲スノ
 事實アリ又死刑ハ暫行新刑律ノ定ムル所カ絞殺ナルニ拘ハラス軍憲カ戒嚴法又ハ其ノ強制命令
 ニ依リ死刑ヲ宣告スル場合ニハ銃殺又ハ斬首ノ方法ヲ行フヲ通例トスト爲シ、^(五)裁判制度ト其
 ノ運用」ノ節ニ於テ^(イ)現在支那國ニハ新式裁判所百三十九アルモ第一審裁判所ハ僅ニ九十一ニ
 シテ人口四百四十萬人ニ對シ一箇ノ割合ナリ。交通ノ不完全ナル事情ヲ考慮ニ容ルルトキハ其
 ノ領域及人口ニ比シ甚タ不十分ニシテ訴訟ノ大部分ハ縣知事法廷ニ依リテ行ハル而モ縣知事法
 廷モ亦人口三十萬人ニ對シテ一箇ノ割合ニシテ未タ多シト爲サス、^(ロ)新式裁判所ノ司法官ノ數
 モ僅少ニシテ千二百九十三名ニ過キササルノミナラス地方審判廳及其ノ分廷等ニ於テハ正式ノ合
 議廷ヲ構成スルニ足ラサル一名又ハ二名ノ判事ヲ置クニ過キササルモノアリ、^(ハ)司法官任用ニ關

259

スル規定ハ適當ニ適用セララルモノノ如ク又委員ト接觸シタル司法官ハ十分ノ訓練ヲ經タル人
 人ニシテ海外殊ニ日本留學生多シ、^(ニ)司法官ノ給與ハ他ノ同程度ノ職業ニ比シ必スシモ十分ナ
 リト認め難シ、^(ホ)過去數年間中央政府ノ官吏ニ對スル俸給支拂カ澁滯勝ナル事情ハ周知ノコト
 ニシテ現ニ本委員會開會中ニモ司法官カ俸給支拂要求ノ爲ニ罷業ヲ行ハムトセルコトアリ斯ノ
 如キ不安定ノ狀態ハ司法官ヲシテ其ノ體面ヲ維持シ得サラシメ延テ優秀ナル官吏ノ就職ヲ阻止
 スルニ至ラシムル虞アリ、^(ヘ)縣知事法廷ハ尙改良ノ餘地多ク支那國中央政府ニ於テモ之ヲ自認
 シ屢々訓令ヲ發シテ之カ改善ヲ策シツツアリ、^(ト)警察法廷ニ於ケル裁判モ亦遺憾ノ點尠カラス
 又警察法廷カ司法部ノ管轄ニ屬セス内務部ノ所屬ナルハ注意ニ値ス、^(チ)軍憲ハ自ラ軍事法廷ヲ
 有シ之ニ依リ事件ノ審理ヲ秘密裡ニ行ヒ辯護士ノ出廷モ上訴ノ權利ヲモ之ヲ認ムルコトナキハ
 不當ナリト論シ、^(六)「監獄制度及其ノ適用」ノ節ニ於テ支那國ニハ新式監獄七十四及舊式監獄
 千六百二十二箇アリ又外ニ看守所、拘留所及軍事監獄各地ニ散在ス、而シテ旅行班ノ視察シタル

新式監獄ハ満足ナル狀況ニ在ルカ如キモ新式監獄及看守所ハ收容人員ノ過剰ナルモノナキニ非
ス、又監獄職員ノ俸給及監獄維持費カ規則的ニ支拂ハレサルコトアルカ如シト爲シ、(七)「警察
制度」ノ節ニ於テ警察カ微罪犯ヲモ拘禁シ若ハ勝手ニ長期間ノ拘留ヲ爲スコトアリ又其ノ取調
若ハ拘留ヲ行フニ際シ人ニ依リ取扱ヲ區別スル場合アルコトヲ不可トシ、(八)「司法制度ニ對ス
ル各種ノ不平」ノ節ニ於テ司法ノ運用ニ關シ上記ノ外審理ノ遲滯、判決執行ノ困難及法律上正
當ノ權能ナクシテ濫ニ私人ノ住宅ニ侵入スルコト等ニ關シ種々ノ不平ヲ聞キタルカ斯ノ如キ苦
情ハ必スシモ無稽ト認メ難キモノアリト爲セリ。

一四

五、報告第四部、勸告

勸告ハ治外法權撤廢ノ能否、條件、時期及方法ニ關スル委員會ノ建議ヲ掲クルモノニシテ前文
以下五項ニ分タル。勸告ニ於テハ治外法權撤廢ノ前提トシテ支那國政府ノ執ルヘキ其ノ司法制
度改善ニ關スル簡條ニ關スル建議ヲ爲シ右改善全部ノ實施ヲ待チテ初メテ關係各國ハ其ノ治外

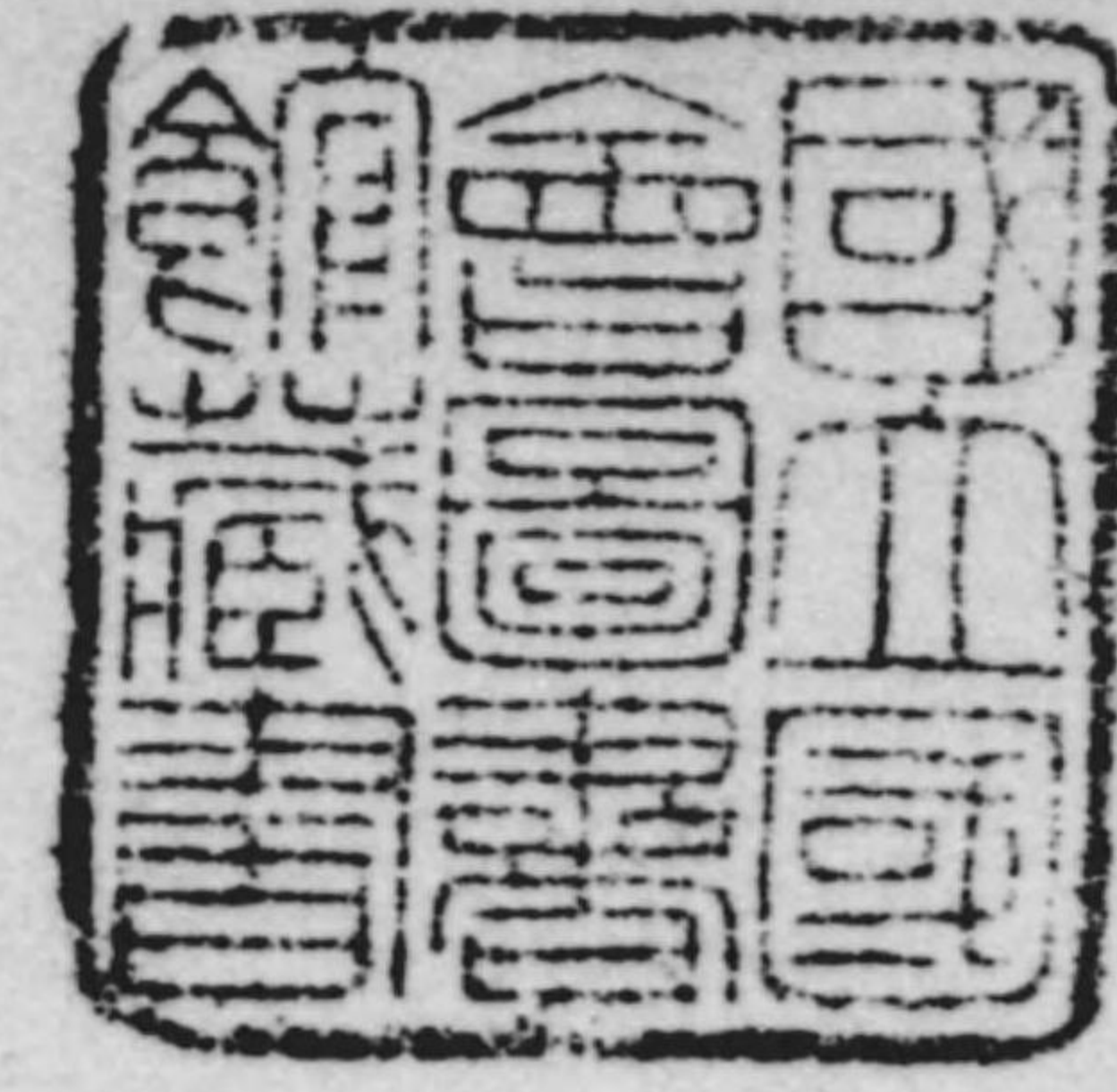
法權ヲ撤廢スヘク又右全部ノ實施ナクモ其ノ主要項目ノ實施ヲ見タル上ハ支那國ノ希望スル限
リ地域的、部分的又ハ其ノ他ノ方法ニ依ル漸進的ナル治外法權ノ撤廢ヲ商議スルヲ妨ケス。但
シ何レノ場合ヲ問ハス治外法權ノ撤廢セラレタル地域ハ外國人ノ居住、貿易ニ開放セラルヘキ
モノナリトノ意見ヲ述ヘ更ニ治外法權撤廢ニ至ル迄ノ措置トシテ各國ハ其ノ治外法權實施ノ現
狀ニモ改善ヲ加フヘキモノナリトテ支那國法規ノ適用、會審制度ノ改善、司法上ノ協力其ノ他
數項ノ事項ヲ提言セルモノトス。

一五

260

支那國ニ於ケル治外法權ニ關スル委員會ノ報告書(譯文)

329.16
Si 458A



514009

凡 例

- 一、讀者ノ便宜ニ供セムカ爲支那國ニ於ケル治外法權ニ關スル委員會ノ報告書譯文ノ前置トシテ
 - (一)右委員會ノ經過及(二)右報告書ノ要綱ヲ摘記シタリ
- 二、報告書譯文ハ成ル可ク原文ニ忠實ナラムコトヲ期シタルモ文意不明又ハ晦澁ニ陥ル虞アル箇所ハ自由ナル翻譯ヲ爲シタリ



三、支那ニ於ケル治外法權ニ關スル委員會ノ報告書

目次

緒言	一頁
第一部 支那國ニ於ケル治外法權實施ノ現状	一〇
一、沿革略記	一〇
二、淵源	一三
三、外國裁判所	一四
(一) 概説	一四
(二) 管轄	一五
(三) 上訴	一七
(四) 適用法規	一八
(五) 監獄設備	一九

(六)	外國裁判所ノ概要ニ關スル各國ノ覺書	一九
四、	支那國裁判所	二一
(一)	概説	二一
(二)	管轄及訴訟手續	二二
(三)	上訴	二三
(四)	適用法規	二三
(五)	監獄設備	三三
五、	治外法權實施ノ現狀ニ關スル考察	三四
(一)	支那國裁判權行使ノ自由ニ對スル制限	三四
(二)	裁判所ノ對立及法規ノ不同	三四
(三)	裁判所ノ隔在	三五
(四)	外國裁判所職員ノ才能及素養	三七
(五)	上訴ノ手續	三八
(六)	外國人ニ對スル支那國法規ノ適用免除	三八

(七)	支那人血統ノ者ノ國籍ニ關スル法ノ牴觸	三九
(八)	支那人ニ對スル不當保護	四〇
(九)	犯罪人引渡取極ノ欠缺	四一
(十)	外國人居宅ノ不可侵	四一
(十一)	旅行、營業及居住ニ對スル制限	四二
(十二)	裁判所間ノ司法上ノ協力	四三
(十三)	辯護士	四三
(十四)	在支外國人及商館數	四四
附 錄		
第一	治外法權國及其ノ關係條約條項一覽表	四八
第二	千九百十三年十月十日ノ支那國大統領ノ宣言	五三
第三	外國裁判所ノ概要ニ關スル各國ノ覺書	五三
(1)	亞米利加合衆國	五三
(2)	白耳義國	六一

	(3)	英帝國	六四
	(4)	丁抹國	六八
	(5)	佛蘭西國	七二
	(6)	伊太利國	八〇
	(7)	日本國	八九
	(8)	和蘭國	九四
	(9)	諾威國	九九
	(10)	葡萄牙國	一〇一
	(11)	西班牙國	一〇五
	(12)	瑞典國	一〇八
第二部		支那國ノ法規並裁判及監獄ノ制度	一一六
一、法典編纂事業			一一六
二、憲法			一一七
(一) 臨時約法			一一八

	(二)	修正約法	一一九
	(三)	千九百二十三年ノ憲法	一二〇
	(四)	千九百二十四年十月以後ノ憲法ノ狀態	一二一
	(五)	憲法ト法律トノ關係	一二三
三、法規			一二三
(一) 刑事事件ニ關スル諸法規			一二四
(1) 暫行新刑律			一二四
(2) 違警罰法			一二五
(3) 嗎啡治罪法			一二六
(4) 陸軍刑事條例及海軍刑事條例			一二六
(5) 懲治盜匪法			一二七
(6) 其ノ他ノ刑事法規			一二八
(7) 刑事訴訟條例			一三二
(8) 陸海軍刑事訴訟條例			一三四

(9)	縣知事審理訴訟暫行章程	一三五
(10)	檢察廳調度司法警察章程	一三七
(二)	民事事件ニ關スル諸法規	一三九
(1)	大清律令中ノ民事規定	一四〇
(2)	大理院判例	一四一
(3)	革命以後公布セラレタル單行ノ諸法規	一四三
(1)	民事實體法	一四三
(イ)	民事訴訟條例	一四三
(ロ)	縣知事審理訴訟暫行章程	一四五
(ハ)	民事公斷條例	一四八
(ニ)	無領事裁判權國人民刑事訴訟章程	一四九
(ホ)	法律適用條例	一四九
(ヘ)	民事公斷條例	一五二
(三)	商事事件ニ關スル諸法規	一五二
(1)	商人通例	一五二

(2)	公司條例	一五二
(3)	商人註冊條例	一五三
(4)	公司註冊條例	一五三
(5)	修正會計師暫行章程	一五四
(6)	商事公斷所章程	一五四
(7)	商會法	一五四
(8)	商標法	一五五
(9)	著作權法	一五五
(10)	證券交易所法	一五六
(11)	物品交易所條例	一五六
(四)	其ノ他ノ諸法規	一五六
(1)	戒嚴法	一五六
(2)	海上捕獲條例及捕獲審檢應條例	一五七
(3)	國籍法	一五八

(4)	森林法	一五八
(5)	國有荒地承墾條例	一五八
(6)	管理寺廟條例	一五九
(7)	鑛業ニ關スル規則	一五九
(8)	土地收用ニ關スル法規	一六〇
(9)	地方自治ニ關スル法規	一六一
(五)	法規ニ關スル一般的考察	一六三
(1)	法規ニ關スル基礎的規定ノ欠缺	一六四
(2)	立法ノ不規則	一六五
(3)	法律ヲ缺ク事項	一六八
(4)	法律ニ關スル考察ノ綱領	一七〇
四、	裁判制度	一七二
(一)	裁判所概說	一七三
(二)	司法行政事務	一七五

(三)	新式裁判所	一七八
(1)	組織及權限	一七八
(イ)	概說	一七八
(ロ)	地方審判廳及其ノ分廳	一八〇
(ハ)	高等審判廳及其ノ分廳	一八三
(ニ)	大理院	一八五
(ホ)	檢察廳	一八七
(2)	訴訟手續	一八七
(イ)	概說	一八八
(ロ)	初審	一八八
(ハ)	上訴審	一九二
(四)	過渡的法廷	一九四
(1)	縣司法公署	一九五
(イ)	構成及權限	一九五

(口)	訴訟手續	一九五
(2)	審判處	一九六
(イ)	構成及權限	一九六
(ロ)	訴訟手續	一九七
(3)	司法籌備處	一九八
(五)	縣知事法廷	一九八
(1)	構成及權限	一九九
(2)	訴訟手續	二〇一
(六)	特別裁判所	二〇二
(1)	東三省特別區域法院	二〇二
(イ)	構成及權限	二〇三
(ロ)	訴訟手續	二〇四
(2)	特別會審衙門	二〇四
(七)	軍法會議	二〇五

(1)	組織及權限	二〇五
(2)	訴訟手續	二〇六
(八)	行政裁判所	二〇七
(九)	警察法廷	二〇八
(十)	裁判所職員ノ考試	二一一
(1)	推事及檢察官	二一二
(2)	書記官	二一三
(3)	承發吏	二一四
(4)	縣司法公署ノ審判官	二一四
(5)	承審員	二一五
(土)	司法官ノ官等及俸給	二一五
(1)	司法官	二一六
(2)	書記官	二一七
(3)	承發吏	二一八

(一)	概説	二二九
(二)	監獄制度	二二九
(三)	無領事裁判權國人民ニ對スル特別規定	二二八
(四)	行政裁判所	二二七
(五)	警察法廷	二二六
(六)	軍法會議	二二五
(七)	過渡的法廷及縣司法公署	二二五
(八)	縣知事法廷	二二三
(九)	管轄ノ分界ノ不明ナルコト	二二三
(十)	行政官憲ニ依ル裁判所ノ監督及司法事務ノ處理	二二二
(十一)	裁判組織ニ關スル一般の考察	二二一
(十二)	訴訟費用	二二〇
(十三)	律師	二一九
(十四)	司法官ノ懲戒	二一八

(一)	監獄行政及司獄官	二二〇
(二)	監獄及囚人ニ關スル規則	二二一
(三)	監獄職員ニ關スル規則	二二二
(四)	監獄制度ニ關スル考察	二二四
(五)	附錄第一 支那國新式裁判所一覽表	二三五
	附錄第二 支那國新式監獄一覽表	四二九
	附錄第三 支那國新舊監獄比較表	二五四
	第三部 支那國ニ於ケル司法運用	二五七
	一、緒言	二五七
	二、軍事官憲ノ干渉	二六〇
(一)	山東高等審判廳長張志事件	二六三
(二)	徐樹錚事件	二六三
(三)	邵鳳萃事件	二六四
(四)	軍票ニ關シ投機ヲ爲ス者ヲ斬首ニ處スルノ布令	二六五

(五)	韓德寧事件	二六六
(六)	朱鐵夫事件	二六六
(七)	「オートー、ハインゾーン」事件	二六七
(八)	林白水事件	二六八
(九)	成舍我事件	二六八
(十)	奉天官憲ノ紙幣ニ付投機ヲ行ヒタル者ニ對スル奉天ニ於ケル處刑	二六九
(十一)	「ボリス、ヂー、オストロモフ」事件	二七〇
三、	其ノ他ノ干渉	二七三
四、	法規ト其ノ運用	二七四
(一)	支那國法規ノ普遍的適用性ノ欠缺	二七四
(二)	保釋	二七六
(三)	囚人虐待ト不法ナル處刑方法	二七七
五、	裁判組織ト其ノ運用	二七八
(一)	新式裁判所ノ不足	二七九

(二)	素養アル司法官ノ不足	二八〇
(三)	司法官ノ素養	二八一
(四)	司法官ノ給料	二八一
(五)	裁判所ニ對スル財政上ノ支持	二八二
(六)	縣知事法廷	二八三
(七)	警察法廷	二八四
(八)	軍法會議	二八五
六、	監獄制度及其ノ運用	二八五
七、	警察	二八八
八、	其ノ他ノ苦情	二八八
附錄第一	千九百二十六年五月十日ヨリ六月十六日ニ至ル治外法權委員會 旅行班ノ視察旅行ノ報告	二八九
第四部	勸告	三二〇

華盛頓
の
議

緒言

支那國ニ於ケル治外法權ニ關スル委員會ニ參加シタル諸國即亞米利加合衆國、白耳義國、支那國、英帝國、丁抹國、佛蘭西國、伊太利國、日本國、和蘭國、諾威國、葡萄牙國、西班牙國及瑞典國代表者ハ千九百二十一年十二月十日ノ軍備制限會議ニ於テ採擇セラレタル左記決議第五及追加決議ニ準據シテ北京ニ會合セリ。

華盛頓ニ於ケル軍備制限會議ニ於テ採擇セラレタル決議第五

「軍備制限會議ニ於ケル太平洋及極東問題ノ審議ニ參加シタル諸國即チ亞米利加合衆國、白耳義國、英帝國、佛蘭西國、伊太利國、日本國、和蘭國及葡萄牙國ノ各代表者ハ
大不列顛國及支那國間ノ千九百二年九月五日ノ條約、亞米利加合衆國及支那國間ノ千九百三年十月八日ノ條約並日本國及支那國間ノ千九百三年十月八日ノ條約ニ於テ此等ノ諸國ハ支那國政府カ

其ノ司法制度ヲ改正シテ之ヲ西洋諸國ノ同制度ニ適合セシムルコトニ付表示シタル希望ヲ同國政府ニ於テ達成スルコトニ關シ一切ノ援助ヲ與フヘキコトヲ約定シ且「支那國法律ノ狀態、其ノ施行ノ設備及其ノ他ノ要件ニシテ當該國カ満足ヲ表スルトキハ其ノ治外法權ヲ撤去スルニ躊躇セサル」ヘキコトヲ聲明シタルノ事實ヲ了承シタルニ因リ

右ニ關シテ千九百二十一年十一月十六日支那國委員ノ表示シタル「支那國ノ政治上、司法上及行政上ノ行動ノ自由ニ對スル現存ノ制限ハ即時ニ又ハ事情ノ許ス限リ速ニ撤廢セララルヘキモノナリ」トノ趣旨ノ願望ヲ達成セシムルニ付同情ヲ有スルニ因リ

右目的ニ適應スヘキ措置ニ關シ如何ナル決定ヲ爲スニ付テモ支那國ノ法律、司法制度及司法運用手續ニ關スル複雑ナル實狀ノ確認及理解ヲ前提トスヘク右ハ本會議力之ヲ決定スルノ地位ニ在ラサルコトヲ考慮シ

左ノ如ク決議セリ

前記諸國政府ハ委員會（前記諸國政府ハ之ニ對シ各一名ノ委員ヲ任命ス）ヲ組織シ支那國ニ於ケル治外法權制度ノ實施ノ現狀並支那國ノ法律、司法制度及司法運用手續ヲ調査セシメ依テ以テ右事項ニ關スル右委員會ノ事實調査並支那國ニ於ケル司法運用ノ現狀ヲ改善スル爲及治外法權ニ關スル各國ノ權利ヲ漸次ニ又ハ其ノ他ノ方法ニ依リ撤去スルコトニ付各國ヲ首肯セシムヘキ立法及司法上ノ改正ヲ實行セムトスル支那國政府ノ努力ヲ援助シ且促進スル爲其ノ適當ト思惟スル手段ニ關スル勸告ヲ前記諸國政府ニ報告セシムヘシ

前記委員會ハ今後前記諸國政府ノ協定スヘキ細目取極ニ從ヒ會議終了後三月内ニ組織セララルヘク且該委員會ハ第一回會議後一年内ニ其ノ報告及勸告ヲ提出スヘキコトヲ命セララルヘシ

前記各國ハ前記委員會ノ勸告ノ全部又ハ一部ヲ受諾シ又ハ拒絕スルノ自由ヲ有スヘシ但シ如何ナル場合ニ於テモ右各國ハ右勸告ノ全部又ハ一部ノ受諾ニ付支那國ヨリ政治上タルト經濟上タルトヲ問ハス何等カノ特殊ノ利權、恩典、利益又ハ免除ヲ直接ニ又ハ間接ニ許與セシムルコトヲ條件

ト爲スヲ得ス」

追加決議

『支那國ハ同國ニ於ケル治外法權及司法運用ノ調査及報告ニ當ル委員會ノ設置ニ關スル決議ヲ了承シタルニ因リ支那國ニ於ケル治外法權ノ廢止ヲ期セムトスル同國政府ノ願望ニ關スル前記諸國ノ同情アル意嚮ニ満足ノ意ヲ表シ且前記委員會ノ委員トシテ出席スルノ權利ヲ有スル一名ノ代表者ヲ任命スルノ意アルコトヲ聲明ス尤モ支那國ハ該委員會ノ勸告ノ全部又ハ一部ヲ受諾シ又ハ拒絶スルノ自由ヲ有スルモノトス支那國ハ又該委員會ノ事業ニ協力シ且其ノ任務ヲ満足ニ完了セシムル爲アラユル便宜ヲ之ニ供與セムトス』

千九百二十一年十二月十日軍備制限會議第四回總會ニ於テ之ヲ採用ス』

委員會開催ノ期日ハ千九百二十五年十二月十八日ト決定セラレタルモ支那國ニ於ケル内亂ノ結果鐵道業務ニ支障ヲ來セルアリ委員ニシテ右期日迄ニ北京ニ到達スルヲ得サル者ヲ生スルニ至レ

北
子
子
子

リ。仍テ開會式ハ千九百二十六年一月十二日北京冬宮内ノ居仁堂ニ於テ舉行セラレ且其ノ第一回本會議ハ其ノ翌日同所ニ於テ開催セラレタリ。

開會式ハ支那國委員王寵惠之ヲ司會シタルカ右開會式當日ニ於テ委員會ハ支那國司法總長ヲ委員會名譽議長ニ、亞米利加合衆國委員「サイラス、エイチ、ストローン」氏ヲ同議長ニ推舉セリ。

而シテ第一回本會議ニ於テ佛蘭西國委員「ツーサン」氏ハ副議長ニ推サレタリ。

各國委員、其ノ代理委員及隨員ノ氏名ヲ舉クレハ左ノ如シ。

亞米利加合衆國

委員

サイラス、エーチ、ストローン

専門顧問

ゼー、イー、ゼーコブス

エム、エフ、バーキンス

白耳義國

委員

エー、ヴァン、クッツェム

代理

エー、サーヂセルス

英帝國

委員

スキナー、ターナー

代理

シー、エフ、ガースチン

支那國

委員

王龍惠

代理

鄭天錫

専門顧問

石志泉

林行規

隨員

林彪

刁敏謙

梁敬敦

張煜全

向哲滄

丁抹國

委員

エーチ、ド、カウフマン

代理

エル、ビー、チリツツ

佛蘭西國

委員

デー、シー、ツーサン

代理

マーセル、ボーデ

伊太利國

委員

デー、ド、ロッシ

代理

デー、ロス

隨員

マヂストラーチ

日本國

委員

日置益

代理

佐分利貞男

隨員

重光葵

三宅正太郎

澤田廉三

守屋和郎

鹽崎觀三

和蘭國

委員

エー、デー、エー、ド、カッ、アンヂェリノ

諾威國

委員

ヨハン、ミシリ

葡萄牙國

委員

ゼー、エー、ド、ピアンチ

西班牙國

代理

エル、イー、フェルナンデス

瑞典國

委員

マヌエル、アカル、イ、マリ

同

書記長

カール、レージョンフォード

同

徐維震

同

ダブルユー、エー、アレキサンダー

委員會ハ千九百二十六年九月十六日ニ開キタルモノヲ最後ノ會議トシ總會ヲ閉クコト二十一回ナ
 リキ。是等ノ會議ニ於ケル委員會ノ主要ナル任務ハ報告ノ審議以前ニ在リテハ支那國法典及法律
 並支那國ニ於ケル治外法權ノ實施ニ關聯セル諸種ノ問題ノ検討ニ在リタリ。委員會ノ旅行班ハ各
 省ニ於ケル裁判所、監獄及看守所即チ支那國司法制度ノ運用狀況ヲ調査スルノ任務ヲ帶ヒテ五月
 十日ヨリ六月十六日迄繼續シテ視察旅行ヲ行ヘリ。委員會ノ企圖セル最初ノ旅行計畫ハ廣東ニ於
 ケル支那國官憲カ治外法權ハ審査ヲ待ツコトナク即時ニ撤去セララルヘキモノナリトノ理由ヲ以テ
 委員ノ來訪ヲ公式ニ拒絕シタルト太原府、張家口、歸化城、包頭鎮及寧夏ノ如キ支那國ノ他ノ地
 方カ政情不安定ニシテ輸送手筈ヲ爲スコト困難ナリシ爲之ニ赴クコト能ハサリシトニ依リ著シク
 短縮セララルニ至リシモノナリ。

第一部 支那國ニ於ケル治外法權實施ノ現狀

一〇

一、沿革略記

一 夙ニ千六百八十九年ニ於テ支那國ト露西亞國トハ相互的ニ特異ノ様式ノ治外法權ヲ認ムル條約ヲ締結セル例アリト雖支那國ニ於ケル現行ノ治外法權制度ハ千八百四十三年以來ノ支那國及列國間ノ多數ノ條約ニ其ノ源ヲ發ス。同年支那國及英帝國ハ一條約ヲ締結シ千八百四十三年十月八日附ヲ以テ之ニ數箇ノ補充條項ヲ追加シタルカ其ノ一條項タル第十三條ニ於テ英帝國臣民ハ英帝國法令ニ從ヒ英帝國官吏ニ依リ裁判セラルヘク、英帝國臣民及支那國人民間ノ混合民事事件ハ共同審判ニ依ルヘキコトヲ規定セリ。其ノ翌年亞米利加合衆國及佛蘭西國政府ハ同様ノ趣旨ニ依リ支那國政府ト條約ヲ締結シタリ。前者ハ千八百四十四年七月三日附ニシテ後者ハ千八百四十四年十月二十四日附ナリ。當時聯合王國タリシ瑞典諾威國モ亦之ニ倣ヒ千八百四十七年

ヲ以テ條約ヲ締結セリ。

二 千八百五十八年ニ於テ前記亞米利加合衆國、英帝國及佛蘭西國トノ各條約ニ付改訂ノ議アリ。

從前ノ條約ト其ノ趣旨ニ於テ同様ナルモ之ヨリ一層明確且周到ニ治外法權ヲ規定セル條款ヲ有スル新條約カ支那國ト是等ノ諸國間ニ成立セリ。千八百七十六年ニ於テ支那國ト英帝國ト、千八百八十年ニ於テ支那國ト亞米利加合衆國トハ更ニ條約ヲ締結シ其ノ中ニ於テ英支人間又ハ米支人間ノ混合事件審理ニ際シ其ノ手續ヲ監視スヘキ代表者派遣方ニ關スル相互的ノ權利ニ付一層明確ナル規定ヲ設ケタリ。

三 千八百七十一年七月日本國ト支那國トハ領事裁判權ノ設定ニ關シ雙務的取極ヲ爲シタルカ下ノ關係約及千八百九十六年ノ通商航海條約ニ依リ支那國ハ日本國ニ於ケル治外法權ヲ拋棄シ日本國ノミ其ノ支那國ニ於ケル治外法權ヲ保留セリ。

四 本委員會ニ代表ヲ派遣セル前掲以外ノ諸國並世界大戰ノ結果治外法權ヲ喪失スルニ至リタル

一一

獨逸國、露西亞國、埃太利及洪牙利國並本會議ニ代表ヲ派遣セサル祕露國、墨西哥國及瑞西國ハ千九百十八年迄ノ間ニ於テ支那國ト條約ヲ締結シ同國內ニ在ル自國臣民ノ爲ニ前記同様ノ治外法權ヲ獲得スル所アリタリ。支那國ノ締結セル條約中外國ニ治外法權ヲ許容セル最後ノモノハ瑞西國トノ條約ニシテ同條約ハ千九百十八年六月十三日調印千九百十九年十月八日批准セラレタルモノナリ。斯クテ支那國ニ於テ現ニ治外法權ヲ實施シ居ルモノハ全部ニテ十六箇國ト爲レリ。右ニ關聯シテ一言スヘキハ瑞西國カ千九百十八年ノ支那國トノ條約ニ於テ「他ノ締約諸國カ其ノ治外法權ヲ拋棄スルニ同意スルニ於テハ同國モ亦斯ノ如クスルノ準備ヲ爲スヘシ」ト宣言シタルコト之ナリ。同様ノ條項ハ千九百十八年支那國トノ間ニ條約締結ニ際シ瑞西國ノ爲シタル宣言中ニモ挿入セラルルヲ見ル。尙一方ニ於テ墨西哥國ハ千九百二十一年九月二十一日附ノ支那國政府トノ交換公文ニ於テ千八百九十九年ノ條約ノ正式改訂ヲ行フニ當リテハ支那國ニ於ケル墨西哥國領事裁判權ノ拋棄ヲ宣言スル一條款ヲ其ノ條約中ニ挿入スヘキコトヲ約シタリ。

二、淵 源

五 現行治外法權制度カ支那國ト關係列國トノ間ニ締結セラレタル條約ヲ以テ其ノ基礎ト爲スコトニ付テハ既ニ第一節ニ於テ之ヲ記述セリ而シテ右條約ノ日附及關係條項一覽表ハ附録トシテ本報告書ニ添附セリ。現行治外法權制度ハ更ニ第二次ノ多數ノ淵源ヲ有ス即チ(一)地方的協定及(二)慣習中ニ之ヲ發見スヘシ。而シテ右慣習ノ或ルモノハ時ニ明示ノ承認ヲ受クル所アリタリ。

六 現行ノ治外法權制度ニ關係アル條約ノ條款、地方的協定及慣習ハ便宜上之ヲ左ノ二箇ノ方面ヨリ觀察スルヲ可トス。

- (イ) 民事又ハ刑事ノ被告タル治外法權國人民ノ地位
 - (ロ) 治外法權國人民ヲ民事ノ原告又ハ刑事ノ原告(被害者)トスル事件ニ於ケル支那人ノ地位。
- 原則トシテ(例外ニ付テハ第十七節ハ參照)イノ場合ニハ民事又ハ刑事ノ被告タル外國人ノ所屬スル國家ノ裁判所事件ヲ裁判シ(ロ)場合ニハ支那國裁判所之ヲ裁判ス。是等ノ裁判所ハ本節

ヨリ後ニ於テハ夫々「外國裁判所」及「支那國裁判所」ト稱スヘシ。但シ右外國裁判所及支那國裁判所ハ混合事件審理ニ際シ外國會審官又ハ共同審判官ノ立會ヲ受クルトキハ其ノ限度ニ於テ所謂「混合法廷」ト爲ルモノトス。

七 外國ノ領事ハ條約ニ基キ一切ノ混合民事事件ニ付訴訟手續ヲ實行スル以前ニ於テ事件ヲ平和的ニ解決スル爲當事者雙方ヲ援助スルノ權限ヲ有ス。外支人間ノ爭議ニシテ此ノ制度ニ基キ法廷外ニ於テ解決セラレタルモノ相當多數ニ上ルヲ見ル。

三、外國裁判所

(一) 概 說

八 支那國在住自國國民ニ對スル裁判權行使ニ關シ條約上ノ基礎ヲ獲得シタル後諸國ハ右條約規定實施ノ爲進ムテ法規ヲ制定シ又其ノ裁判所ヲ設置スルニ至レリ。然レトモ諸國ノ現行治外法權制度ヲ見ルニ内容他ニ比シ廣汎ナル範圍ニ涉ルモノアリ又裁判所ノ設立ノ如キ殆ト之ヲ考慮

セサルモノアリ。而シテ英帝國及亞米利加合衆國ノ兩國ハ專任ノ職員ヲ配置セル特別ノ裁判所ヲ支那國內ニ設立シ佛蘭西國及伊太利國ハ支那國在勤ノ特別ノ裁判官ヲ設ケ日本國ハ特ニ養成シタル司法領事ヲ奉天、天津、上海及青島ノ總領事館ニ配置シ諾威國ハ本國ノ通常裁判所ノ判事ト同一ノ法律ノ素養アル裁判領事ヲ上海ニ配置セリ。前記ノ例外ヲ除キ治外法權國ノ裁判制度ハ領事官カ單獨ニ又ハ或ル場合ニ於テ會審員ト協力シテ主宰スル領事裁判所ヲ以テ其ノ骨子トスルモノニシテ此ノ間ニ於テ陪審員ノ制度ヲ採用スルハ英帝國ノミナリ。支那國ニ於ケル外國裁判所ノ裁判制度ハ孰レモ概シテ著シク簡單ナレトモ諸外國ニ於ケル審理手續ノ要綱ハ總テ之ヲ網羅セリ。

(二) 管 轄

九 外國裁判所カ管轄權ヲ有スル民事及刑事ノ事件ハ之ヲ左記三種類ニ區別スルコトヲ得。

(イ) 當事者雙方カ裁判所所屬國ノ人民タル事件

(ロ) 裁判所所屬國ノ人民タル外國人ヲ民事ノ原告又ハ刑事ノ原告(被害者)トスル事件
(ハ) 支那人ヲ民事ノ原告又ハ刑事ノ原告(被害者)トスル事件

一〇 前記(イ)ノ事件ニ於テハ唯一箇ノ國籍即權限アル裁判所ノ所屬スル國ノ人民ノミニ關係アルモノニシテ審理ハ權限裁判所ノ屬スル國家ニ於テ單獨ニ之ヲ行フモノトス。(ロ)ノ事件ニ於テハ二箇ノ外國カ之ニ關係アルモノニシテ民事又ハ刑事ノ被告ノ屬スル國家ノ裁判所ニ於テ之ヲ審判ス。右ノ場合ニ於ケル審理手續ハ關係國間ノ取極又ハ協定ノ定ムル所ニ依ル。(ハ)ノ事件ニ於テハ被告ノ國籍ニ依リ又訴訟ノ民事事件ナルヤ刑事事件ナルヤニ依リ其ノ手續同シカラス。支那國官憲ヨリ外國裁判所ノ審理ヲ監視スル爲會審官ヲ派遣スルノ權利ヲ主張スルコトヲ得ル場合アリ又民事事件ニ付特別ノ取極アリテ稍非公式ナル方法ニ依リ事件ヲ衡平ニ雙方ノ共同審理ニ委スルコトヲ定ムル場合アリ。後ノ場合ニ於テハ支那國政府ノ代表者ハ固ヨリ外國領事官憲ト同一ノ權利ヲ有スヘキモノトス。(ハ)ノ事件ハ本來ノ「混合事件」ト稱セラルヘキモノタリ。

一一 一般ニ外國裁判所ハ支那國ニ在ル自國國民ヲ被告トスル民事及刑事ノ事件ニ付右自國國民ニ對シ裁判權ヲ行使スルモノトス。一切ノ民事事件ハ第一審トシテ右裁判所之ヲ裁判スレトモ刑事ノ事件ニシテ重罪犯ニ關スルモノハ或ル場合ニ於テハ支那國領域外ノ外國裁判所ニ於テ審理セラル。而シテ外國裁判所ノ構成及訴訟手續ハ民事事件ニ在リテハ訴訟金額及適用セラルヘキ法律上ノ原則ニ依リ、刑事事件ニ在リテハ犯罪ノ輕重ニ依リ迭ニ相異ルモノトス。
一二 外國裁判所及其ノ他ノ外國官憲中ニハ其ノ管轄ノ下ニ在ル自國國民ヲ支那國外ニ追放スルノ命令ヲ發布スルノ權限アルモノアリ。

(三) 上 訴

一三 判決ニ對スル上訴及重罪事件ノ第一審ノ公判ハ支那本土内ノ裁判所ニ於テ管轄スルコトアリ例ヘハ英帝國高等法院ノ場合ノ如シ合衆國支那裁判所ノ場合モ亦一部分然リトス。又支那國ニ隣接スル地域ノ裁判所ニ於テ之ヲ管轄スルコトアリ日本國裁判所、在「パタビヤ」和蘭國裁

判所、在「サイゴン」及在「ハノイ」佛蘭西國裁判所並在「マカオ」及在「ゴア」葡萄牙國裁判所ノ場合ノ如シ。白耳義國、丁抹國、伊太利國、諾威國、西班牙國及瑞典國ノ場合ニ在リテハ上級審ノ管轄ハ總テ歐洲ニ在リ。而シテ總テノ國ニ於テ上告審ハ各國ノ首都ニ設置スル最高裁判所ノ管轄トス。但シ例外トシテ和蘭國ハ上告事件ノ裁判權ヲ「バタビア」高等法院ニ附與シ日本國ハ南支那、滿洲及間島地方ヨリノ上告ヲ夫々臺北（臺灣）、旅順及京城ノ裁判所ノ管轄ト爲セリ。

(四) 適用法規

一四 外國裁判所ハ當該治外法權國ノ領土内ニ於テ實施セララルモノト同一ノ法規ヲ其ノ儘又ハ之ニ變更ヲ加ヘテ適用ス。之ト同時ニ右裁判所ハ民事事件ニ付時ニ地方的慣習及衡平ノ一般原則ヲ適用シ又國際法ノ通則ニ從ヒ外國法ヲ適用スルコトアリ。又制度ニ依リテハ外交官及領事官ニ於テ其ノ都度各本國政府ノ特別ノ認可ヲ經又ハ經スシテ警察、市政、港灣其ノ他ノ事項ニ

關シ法律ノ效力ヲ有スル規則ヲ公布スルモノアリ。

(五) 監獄設備

一五 外國裁判所ノ判決ヲ受ケタル囚人ハ支那國ニ於ケル外國監獄ニ收監セララルコトアリ。又支那國領域外ノ監獄ニ收容セララルコトアリ。而シテ右ハ刑期ノ長短ニ依リテ決セララルヲ常トス。支那國內ニ監獄ノ設備ヲ有スル治外法權國ハ亞米利加合衆國、英帝國、佛蘭西國及日本國ノミ。他ノ諸國ハ前記四國中ノ一國又ハ外國租界官憲ト取極ヲ爲シ其ノ監獄ヲ使用スルカ又ハ其ノ判決シタル囚人ヲ支那國領域外ノ自國監獄ニ送致ス。

(六) 外國裁判所ノ概要ニ關スル各國ノ覺書

一六 支那國ニ於ケル各外國裁判所ノ制度ニ關シ關係各國委員ヨリ提出セル詳細ナル覺書ハ左記「アルファベット」順ニ依リ本報告ニ之ヲ添付セリ。

(1) 亞米利加合衆國

- (2) 白耳義國
- (3) 英帝國
- (4) 丁抹國
- (5) 佛蘭西國
- (6) 伊太利國
- (7) 日本國
- (8) 和蘭國
- (9) 諾威國
- (10) 葡萄牙國
- (11) 西班牙國
- (12) 瑞典國

四、支那國裁判所

(一) 概 說

一七 治外法權ニ關スル條約ノ條款及取極ハ支那國在任外國人民ニ對シ裁判權ヲ行使スルノ權限ヲ當該外國ニ附與シタルノミナラス更ニ支那人ヲ被告トスル外支人間ノ民事事ノ訴訟ニ關シ特別ナル訴訟手續ヲモ規定スル所アリ。

右手續ニ關スル條約及取極ハ便宜上之ヲ左ノ三類ニ分ツコトヲ得

- (イ) 必要ニ應ジ審理手續ノ細目ニ互リテ抗議ヲ爲シ且(千八百八十年米支條約ノ定ムル如ク)審理ニ立會ヒ證人ヲ訊問又ハ反對訊問スルノ權限アル代表者(通常「會審官」ノ名ヲ以テ呼ハル)ヲ派遣シ審理手續ヲ監視スルコトヲ得ヘキ旨明文ヲ以テ規定セル條約及取極
- (ロ) 以上ノ如キ明文ナキモ最惠國條款ノ效果ニ依リ會審官派遣ノ權利ヲ要求シ得ヘキ條約(但シ概テ實際ニ之ヲ要求セリ)

(ハ) 民事事件ニ付支那國及關係外國ノ官吏ノ共同審判ヲ規定セル條約

二二

一八 治外法權ニ關スル條約ノ締結セラレタル當時ニ在リテハ司法運用ハ全部縣知事(知縣)法廷ノ手中ニ在リタルヲ以テ自然外國人ヲ原告トシ支那人ヲ被告トスル民事及刑事ノ訴訟モ亦右法廷ノ裁判スル所ナリキ。然ルニ時日ノ經過ニ伴ヒ上海、廈門、漢口ニ於テ特別ナル訴訟上ノ慣例發生シ縣知事ノ裁判ヲ監視スル外國會審官ノ權力著シク擴大セララルルニ至レリ(尤モ漢口ニ在リテハ其ノ程度他ニ比シ顯著ナラス)。千九百四年ヨリ千九百十年ニ至ル迄ノ間ニ於テ支那國ハ泰西ノ様式ニ倣ヒテ其ノ司法制度ヲ改革スルコトトナリ右計畫ニ從ヒ新式ノ裁判所ヲ設置シタル結果新式裁判所ノ設置セラレタル地方ノ縣知事ハ其ノ司法權ヲ剝奪セララルルニ至リタレトモ支那國政府ニ於テ右新式裁判所ニ外國會審官ノ出席スルコトヲ拒ミタルト外國側ニ於テ自國臣民ヲ刑事事ノ原告トシ支那人ヲ被告トスル事件ニ關スル條約上ノ會審權ヲ拋棄スル意思ナカリシトニ依リ縣知事ハ斯ノ種事件ニ付テハ引續キ裁判權ヲ行使セサルヘカラサル地位ニ在

リタリ。尤モ外國人ハ必スシモ右ノ事件ヲ縣知事ノ裁判ニ附スヘキ義務アルモノニ非サリシヲ以テ事情已ムヲ得サルカ又ハ自分之ヲ欲スルトキニハ審理監視ノ爲又ハ事件ヲ衡平ニ共同審判セシムル爲自國代表官憲ノ出廷ヲ求ムルノ權利ヲ拋棄シテ以テ事件ヲ新式裁判所ノ裁判ニ附スルコトヲ得タリ。斯クテ治外法權國人民ハ現在ニ於テハ或ル程度迄此ノ慣行ニ從ヒツツアリ。

(二) 管轄及訴訟手續

一九 支那人ヲ被告トシ外國人ヲ原告トスル民事及刑事ノ訴訟ヲ管轄スル裁判所ハ左ノ如ク之ヲ概括スルコトヲ得。

- (イ) 會審官ノ出席ナクシテ縣知事ニ於テ單獨ニ裁判ヲ行フ縣知事法廷
- (ロ) 縣知事ニ於テ審理監視ノ爲刑事事ノ原告タル外國人所屬國ヨリ派遣スル會審官ト共ニ裁判ヲ行フ縣知事法廷

(ハ) 衡平ノ原則ニ依リ民事事件ニ付共同審判ヲ行フ外國及支那國官吏ノ混合法廷

二三

(ニ) 廣汎ナル權限ヲ有スル會審官ヲモ構成員トスル上海、厦門及漢口ノ特別ノ會審衙門
(ホ) 外國會審官ノ出席セサル新式ノ支那國裁判所

二〇 前記イ及ロノ法廷ニ於ケル訴訟手續ヲ略記セムニ訴訟ハ當該領事ヨリ自國國民ノ訴狀ヲ交
涉員ノ手ヲ經テ所轄縣知事ニ提出スルコトニ依リテ之ヲ開始ス。而シテ裁判ニ際シテハ當該領
事ニ於テ其ノ條約上ノ權利ヲ行使シ之ニ會審官ヲ出席セシムルコトアリ又右權利ヲ行使セスシ
テ之ニ會審官ヲ出席セシメサルコトアリ。尙訴訟手續ニ關シテハ支那國政府ノ制定シタル多數
ノ規則アレトモ(例ヘハ千九百十三年三月六日華洋訴訟辦法ノ名稱ヲ以テ公布セラレタル法規
參照)是等ノ規則ハ治外法權國人民ノ條約上ノ權利ヲ變更又ハ剝奪スルモノナル限リ關係諸外
國ニ於テハ之ヲ有效ト認メサルナリ。右ノ事項ハ支那國外交部ト關係外國トノ間ノ交渉懸案ト
爲リ支那國政府ハ千九百十四年五月二十六日ヲ最後トシテ其ノ反對意見ヲ開陳セル文書ヲ手交
スル所アリタリ。

二一 諸條約ノ規定スル前記(ハ)ノ民事事件共同審判ノ方法ハ實際ニハ主トシテ佛蘭西國國民ト支
那國國民トノ間ノ訴訟ニ於テ左ノ手續ニ依リ行ハルルモノトス。即チ原告ハ事件ヲ先ツ領事ニ
提出ス。領事ハ自ラ之ヲ圓滿ニ解決スル能ハサルニ至リテ權限アル支那國官吏ノ出席ヲ求メ雙
方會同ノ上事件ヲ調査シ衡平ノ原則ニ從ヒテ之ヲ解決ス。條約ノ規定ニ依レハ雙方ノ會同ハ領
事館ニ於テ行ハルヘキモノナルモ儀禮上被告代表者ノ官廳ニ於テ之ヲ行フ。權限アル支那國官
吏ハ一時道臺タリシコトアリ又同知若ハ交涉員タリシコトアリシモ今日ニ於テハ此ノ種混合法
廷ハ支那側ノ反對ニ依リテ實際ニ之ヲ構成スルコト能ハサルコト往々アリテ領事ハ概ネ交涉員
ト共ニ事件ヲ行政上ノ手段ニ依リテ解決スルヲ常トス。

二三 前記(二)ニ掲クル特別ノ會審衙門ノ構成及訴訟手續ハ同一都市内ニ在ルモノノ間ニ於テモ互
ニ差異アリ。上海ニハ二箇ノ會審衙門アリ即チ共同租界會審衙門及佛國租界會審衙門トス。
二三 共同租界會審衙門ハ千八百六十九年前ニ於テ既ニ事實上裁判ヲ行ヒタルモ其ノ構成ハ元來

同年ノ會審章程ニ基クモノナリシカ同年以來各般ノ事項ニ互リテ上海ニ地方的慣習ノ成立スルアリテ前記章程ハ殆ト有名無實ト爲ルニ至レリ。更ニ千九百十一年ノ革命ニ際シ會審衙門カ引續キ其ノ職務ヲ續行シ得ルヤ否ヤ疑ハシキ事態發生スルト共ニ衙門ノ地位ニ一變化ヲ來シ支那國裁判官ハ上海領事團ノ確認ヲ得テ其ノ地位ニ在ルヘキモノトナレリ。右ハ衙門ノ崩解ヲ防止セムトスル應急措置ナリシモ此ノ事アリテヨリ以來支那國裁判官ハ總テ支那國官憲ニ照會スルコトナクシテ領事團ニ依リテ選任セララルルコトナリ現ニ其ノ數六名ヲ算ス。千九百十二年民國政府成リ諸外國ノ之ヲ承認スルト共ニ會審衙門ノ地位ニ關シテ商議ノ開始セララルルニ至レリト雖同問題ハ未タ解決ヲ見スシテ今日ニ及ヘリ。右商議ハ現ニ(千九百二十六年九月)外國及支那國官憲トノ間ニ於テ尙進行中ナルニ鑑ミ委員會ハ衙門ノ現在ノ構成及訴訟手續ノ細目ニ互リテ研究ヲ爲スコトヲ避ケタリ。然レトモ衙門ノ管轄甚廣汎ニシテ其ノ共同租界内居住ノ支那人及非治外法權國人民ノ全部ニ及フノ事實及現在ノ取極ニ於テハ一切ノ事件ニ於テ即チ純然タル

ル支那人ノ民事事件ニ於テスラモ外國會審官カ支那國裁判官ト共同シテ裁判ヲ爲スヲ例トスルノ事實ニ付注意ヲ喚起セムト欲ス。惟フニ現在ノ如キ構成ニ依ル會審衙門ハ千九百十一年十月以降ハ條約上ノ根據ナクシテ其ノ事務ヲ處理シツツアルモノト謂フコトヲ得ヘシ。

二四 共同租界會審衙門ニ於ケル民事訴訟手續ニ付テハ治外法權ヲ有スル外國人カ原告ナル場合ニ於テハ訴訟ノ提起ハ訴狀ヲ原告ノ屬スル國ノ領事官ヲ通シ衙門ノ檢察員ニ提出スルコトニ依リテ之ヲ行フ。訴狀受理セララルルヤ被告ハ其ノ寫及二十日以内ニ之ニ回答スヘキ旨ノ命令ノ送達ヲ受ク。右ノ方法ニ依リ書類ノ送達アリタルトキハ被告逃亡ノ虞アリト信スヘキ理由アルトキハ原告ハ法廷ニ對シ即時保證ニ關スル呼出狀ヲ請求スルコトヲ得。右呼出狀ノ送達アリシトキハ被告ハ直ニ法廷ニ招致セラレ其ノ出頭ニ付保證ヲ立ツルコトヲ求メラル。右ノ場合ニ於テハ法廷ハ前記呼出狀ノ送達ニ先チ原告ニ對シ其ノ善意ナルコトヲ保證スル爲保證物ヲ提供スヘキコトヲ命スルヲ常トス。右何レカノ方法ニ依ル送達アリタル後衙門ノ檢察員ハ審問ノ期日ヲ

定ム。其ノ期日ニ於テ原被兩告ハ自身又ハ訴訟代理人ヲ以テ其ノ訴ノ理由ヲ陳述シ證據ヲ提出シ證人ヲ訊問又ハ反對訊問ス。審問終レハ支那國裁判官ト會審官トハ合議ヲ爲シ其ノ意見ノ一致ヲ見ルトキハ茲ニ共同ニ判決ヲ言渡スモノトス。意見ノ一致ヲ見サルトキハ再審理ヲ行フ。

二五 支那人ノミ又ハ非治外法權國人民ノミニ關係アル民事事件ニ於ケル訴訟手續ハ前掲第二十四節ニ記載スル所ト略同様ナリ但シ訴狀ハ外國領事官ノ仲介ヲ經ルコトナク一定ノ手数料ヲ添ヘテ直接ニ檢察員ニ提出セラルヘク會審官ハ毎年上海領事團ノ任命スル者ヨリ之ヲ選定スヘキモノトス。

二六 刑事事件及警察犯ノ訴訟手續ニ關シテハ訴追ハ一般ニ私人又ハ警察官ニ依リ行ハル。警察官現行犯人ヲ逮捕セルトキハ犯人ヲ警察署ニ引致シ簡略ナル取調ヲ爲ス。而シテ警察官之ヲ告發セントセハ其ノ罪狀ノ主要點ヲ警察事故調書ニ記入シ二十四時間以内ニ事件ヲ衙門ニ提出

ス。輕微ナル租界行政規則違反事件ニ付テハ警察ハ亦保釋ヲ許ス。其ノ他ノ事件ニ付テハ被害者ハ法廷ニ呼出狀又ハ逮捕狀ノ發給ヲ申請スヘキモノトス。審理ニ際シテハ私人ノ告發ニ係ルモノト警察官ノ告發ニ係ルモノトニ依リ訴訟手續ヲ異ニス。前者ニ於テハ論告ハ被害者自身又ハ其代理人之ヲ爲シ後者ニ於テハ警察官之ヲ爲ス。當事者ハ双方共證人ヲ呼出シ證據ヲ提出シ訊問及反對訊問ヲ爲スノ權アリ。判決ハ民事事件ニ於ケルト同様審理ノ後支那國裁判官ト外國會審官ト合議ノ上之ヲ言渡スモノトス。被告カ死刑ニ處セラレタルトキハ會審衙門ハ刑ノ執行ノ爲被告ヲ上海支那國官憲ニ送致スルヲ現在ノ慣行ト爲スモ右ハ事實支那國官憲カ更ニ審理ヲ行ヒタル後ニ非サレハ執行セラレサルヲ通例トス。

二七 佛國ハ千八百六十九年ノ會審章程第十條カ當時實施中ノ佛支條約ニ抵觸スルコト明ナルノ故ヲ以テ同章程ニ署名セサリシト雖其ノ條項ニシテ右條約ト抵觸セサルモノハ佛租界會審衙門ニ於テモ之ヲ通用セリ。佛租界會審衙門ニ關スル文書トシテハ右ノ外共同租界會審衙門及佛租

界會審衙門ノ權限ヲ定ムル千九百二年ノ規則、千九百十一年ノ領事團ノ布告、千九百十四年ノ佛支取極及同會審衙門ニ關スル各般ノ佛國總領事ノ命令アリ。

二八 佛租界會審衙門ニ在リテハ訴狀ハ書記長ニ提出セラルヘキモノトス。其ノ送達並當事者及證人ノ呼出ハ書記長之ヲ行フモ令狀ニハ判事ノ署名ヲ要ス。民事原告カ若シ共同租界又ハ佛租界内ニ居住セサルカ又ハ資産ヲ有セサルモノナルトキハ支那法規ノ定ムル手續ニ則リ人證又ハ保證金ヲ提出セシメラル。重大ナル理由アルトキハ被告ハ原告ノ請求ニ基ツキ判事ノ命令ヲ以テ保證ヲ立ツルコトヲ求メラルコトアリ。保證ハ人證及金錢又ハ其ノ何レカ一ナルコトヲ得。然レトモ若シ被告カ土地所有者ナルカ又ハ佛國租界内ニ營業セル商人ナル場合ニ於テハ請求額カ其ノ土地又ハ營業ノ評價概算額ヲ超過セサルトキハ保證ヲ立テシメラルコトナシ。被告ニシテ虛偽ノ申立ヲ爲シタル證據アルモノ又ハ其ノ保證充分ナラサルモノハ之ヲ拘留ス。刑事ニ在リテハ警察官ハ現行犯ノ場合又ハ公ノ秩序ヲ紊ルノ虞アル緊急ノ場合ニハ令狀ナクシテ逮捕ヲ行フコトヲ得ルモ其ノ他ノ場合ニ於テハ總テ逮捕狀ヲ必要トス。犯人ハ逮捕後始メテ開カ

ルヘキ法廷ニ於テ之ヲ審問ス。

二九 厦門鼓浪嶼共同租界會審衙門ノ構成ハ元來千九百二年ノ土地章程第十二條乃至第十四條ニ基クモノトス。然レトモ千九百十一年中ニ於テ上海ニ付第二十三節ニ掲ケタルト同様ノ事態發生シタル爲大體上海ト同様ノ制度上ノ變更ヲ受ケタリ。從テ此ノ裁判所ノ地位ハ上海ニ於ケル共同租界會審衙門ト同様變則ナル地位ニ在リ。但シ厦門ハ上海ニ比シ其ノ地域小ナルヲ以テ治外法權制度上ノ地位ハ上海會審衙門ノ如ク重大ナラス。

三〇 漢口ニハ外國租界内ノ輕微ナル犯罪ヲ審理スル特別ノ會審衙門アリ。支那國政府ハ之カ爲特別ノ裁判官ヲ任命シ又同裁判所ニ依リテ刑ノ宣告ヲ受ケタル者ヲ收容スル特別ノ監獄ヲ設ク。同衙門ニ關シテハ特別ノ訴訟手續ナク又裁判所ノ管轄ハ上海ノ各會審衙門ニ比シ甚タ狹シ。治外法權國人民ヲ原告トシ支那人ヲ被告トスル民事事件ハ會審衙門ノ裁判官トハ別個ノ官吏タ

ル夏口縣知事之ヲ裁判ス。

三一 上記(ホ)ニ掲クル新式ノ支那國裁判所ニ於ケル訴訟手續ハ同裁判所ニ於テ審理セララル支那人相互間ノ事件ノ夫ト同様ナリ。

(三) 上 訴

三二 縣知事ニ於テ單獨ニ又ハ會審官ト共ニ裁判ヲ行フヘキ第十九節(イ)及(ロ)ノ縣知事法廷ノ判決及命令ニ對スル上訴ハ支那交渉員ノ法廷之ヲ管轄ス。而シテ關係外國領事ハ其ノ審理ヲ監視スル爲之ト同席スルノ權アリ。右以外ニハ嚴密ニ謂ヘハ上訴ノ途ナキモ交渉員ノ決定ニ對シ會審官ニ於テ異論アルトキハ外交部及關係公使館ヲシテ商議ヲ行ハシムル爲事件ヲ北京ニ移送ス。第十九節(ハ)ニ記載セル事件ノ上訴ニ付テハ何等ノ規定ナキモ實際ニ於テハ是等ノ事件ノ上訴ヲ道臺ト總領事トニ於テ管轄シタルノ記録アリ(例ヘハ千八百六十七年、千八百六十八年及千九百五年)。第十九節(ニ)ニ記載セル特別ノ會審衙門ノ審理スル事件ニ付テハ支那人ヲ被告トシ外國

人ヲ原告トスル民事事件ニ關スル厦門會審衙門ノ上訴ハ縣知事法廷ノ裁判ニ對スル上訴ノ場合ト同シク交渉員ノ管轄トスルモ上海ニ於テハ之ト異リ共同租界會審衙門ノ地位變則的ナル結果トシテ現在ニ於テハ其ノ判決ニ對スル上訴ニ付何等手續ヲ缺ク。尤モ同一ノ會審官及裁判官又ハ別人ノ會審官及裁判官ノ下ニ再審理ノ行ハルコトアリ。上海ノ佛國會審衙門ニ關シテハ事態稍之ト類似スレトモ同衙門ニ於テハ首席支那國裁判官ト此ノ目的ノ爲ノ特別ノ會審官トニ於テ再審理ヲ爲スノ手續アリ。新式ノ支那國裁判所ニ於テ裁判セル事件ノ上訴ハ同裁判所ヨリ支那國ノ高等審判廳及大理院ニ至ル一般ノ上訴手續ニ從フモノトス。

(四) 適用法規

三三 支那人ヲ被告トシ外國人ヲ原告トスル民事及刑事ノ訴訟ニ付適用アル法規ハ全國ノ一切ノ新式裁判所ニ於テ適用スル支那國ノ諸法律、命令及規則ナリ。然レトモ右法規ハ或ル場合ニ於テハ特殊ノ事情ニ適合スル爲必要ナル變更ヲ受クルモノトス。例ヘハ租界章程附則ヲ適用スル

カ如シ。裁判所ハ亦多數ノ條約ニ基ツキ平衡ノ一般原則ヲ適用スルノ權限ヲ有ス。

三四

(五) 監獄設備

三四 支那人ヲ被告トシ治外法權國人民ヲ原告トスル刑事訴訟ニ於テ管轄裁判所ノ判決ヲ受ケタル囚人ハ上海ニ在リテハ之ヲ工部局監獄ニ收監スルモ其ノ他ノ場所ニ於テハ支那國ノ監獄法規ニ準據シテ支那國監獄ニ之ヲ收容ス。

五、考 察

三五 支那國ニ於ケル治外法權實施ノ一般狀況ニ對シテハ左ノ如キ考察ヲ加フルコトヲ得ヘシ。

(一) 支那國裁判權行使ノ自由ニ對スル制限

三六 支那國ニ於ケル治外法權ノ制度ハ元來支那人ノ法律及裁判ニ關スル觀念ト外國人ノ夫レトノ間ニ甚タシキ相異アルニ顧ミ支那國法規及支那人ノ法律觀念ノ發達スルニ至ル迄支那國ト外國間ノ圓滑ナル關係ヲ維持スル爲必要ナル暫行的措置トシテ設定セラレタルモノナリ。然ルニ

代ノ推移ニ伴ヒ治外法權ト一國主權トノ關係ニ付テハ別異ナル觀察行ハレ現今ニ於テハ一般ニ治外法權ハ之ヲ許與シタル國ノ主權ニ對スル一ノ制限ト目セララルニ至レリ。之レ蓋シ最近數年來支那國ノ大ニ高調スル所ニシテ其ノ茲ニ到リタル原因ハ主トシテ國家主義的感情ノ支那國內ニ彌蔓スルニ至リタルコト及同國內ニ於ケル外國利益ノ急激ナル膨脹ニ伴ヒ現行制度ノ不合理ナル實例カ益々暴露セラレタルコトニ存ス。

(二) 裁判所ノ對立及法規ノ不同

三七 支那國內ニ多數ノ外國裁判所現存シ各自國ノ法規ヲ適用スルヨリシテ往々不合理ナル實例ノ出現スヘキコトハ固ヨリ當然ノコトニ屬ス。審理ヲ行フ裁判所ハ自國國民ニ非サル原告又ハ證人ニ對シテハ何等ノ管轄權ヲ有セス。其ノ結果トシテ第一ニ外國人タル原告又ハ證人ハ僞證ノ罪ヲ犯シ又ハ裁判所ヲ侮辱スルモ當該裁判所ノ適用スル法規ノ定ムル通常ノ訴追ヲ受クルコトナキ現狀ニシテ唯裁判所ハ斯ル場合ニ僅ニ(1)事件ノ審問ヲ繼續スルコトヲ拒絕シ(2)右違反者

カ辯護士ナルトキハ之ヲ當該裁判所ノ訴訟代理人名簿ヨリ除名シ又(3)或ル場合ニ於テハ違反者ヲ處罰スヘキ管轄裁判所ニ事件ヲ移送スルコトヲ得ルニ過キス。次ニ被告ヨリ他國人タル原告ニ對シテ提起セムトスル反訴ニ付テハ(1)反訴カ事實上「相殺」ナルカ又ハ(2)自己ニ不利ナル判決ヲ受クルコトアルモ右判決ノ執行ニ必要ナル保證金ヲ提供スル程度ニ於テ該裁判所ノ管轄ニ服從スルニ非レハ本訴ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得サルモノトス。尤モ外國人タル原告ニ對シ反訴ノ提起アリタル場合ニハ裁判所ハ正義ノ見地ヨリシテ權限裁判所ニ於テ反訴ノ判決ヲ爲ス迄其ノ判決ノ執行ヲ中止シ又ハ審理其ノモノヲ中止ス。更ニ差押財産ノ所有權ニ關スル爭訟ハ他ノ國家ニ於テハ訴訟參加トシテ當該裁判所ニ之ヲ提出シ得ヘキモノナルモ支那國ニ於テハ之ト趣ヲ異ニシ管轄權ヲ主張スル他ノ裁判所ノ介入スル爲事態稍複雑ヲ來セリ。他ノ著シキ不合理ノ實例ハ數人カ共同シテ罪ヲ犯シタル場合ニ生ス。即チ右ノ場合ニハ犯人ノ國籍ト同數ノ裁判所ニ於テ各別ニ審理ヲ行ヒ之ニ科セラルヘキ處罰モ亦廣キ範圍ニ互リテ差異アルニ至ル。

尤モ外國裁判所ノ適用スル法律上ノ諸原則ハ實質的ニ一様ナルノミナラス法律ノ牴觸アル場合ニハ國際法ノ規則ヲ正當ニ適用スルコトニ依リテ幾多ノ困難ヲ除去スルコトヲ得ルモノトス。

(三) 裁判所ノ隔在

三八 支那國ニ於テ外國人カ重罪ヲ犯シタルトキハ(犯人カ合衆國又ハ英帝國ノ國籍ヲ有スルモノニ非サル限り)支那國ノ領域外ニ於テ而モ又往々歐洲ニ於テ之ヲ裁判ス。此ノ制度ヨリ生スル困難ニ付テハ詳説ノ要無シ。外國人カ支那國ニ在ル領事裁判所ニ於テ訴追セラルヘキ場合ニ於テモ右裁判所ハ犯罪ヲ犯シタル地ヨリ遠隔ナル場所ニ在ルコトアリ。斯ル場合ニハ必要ナル證人ヲ出頭セシメ又ハ必要ナル證據ヲ提出スルコト往々困難ナルコトヲ免レス。此ノ結果トシテ訴訟遲滯費用ノ損失及其ノ他ノ不便ヲ生スルニ至ル。尤モ支那國在住ノ外國人ハ概ネ外國裁判所ノ現存スル大ナル條約港ニ居住スルヲ常トシ又或ル國ノ治外法權制度ノ下ニ於テハ遠隔ノ地ノ事件ヲ裁判スル爲メ巡回裁判ヲ爲サシムルヲ以テ是等ノ不便ハ大部分之ヲ除去スルヲ得ヘシ。

(四) 外國裁判所職員ノ才能及素養

三八

三九 裁判官タル領事中ニハ時ニ法律及裁判上ノ素養ヲ缺クモノアリ又領事ノ行政事務ト司法事務トハ互ニ相兩立セサル性質ヲ有スルモノナルヨリシテ領事裁判官ノ裁判ハ往々ニシテ不充分ト認メラル。仍テ多數ノ國家ハ此ノ事態ヲ匡正セムカ爲特別ノ訓練ヲ經タル者ヲ裁判官ニ任用シ又特別ノ正式裁判所ヲ設置スル所アリタリ(第八節參照)。

(五) 上訴ノ手續

四〇 前出(三)ニ於テ重罪ニ付述ヘタルト同様ナル事情ハ上訴ニ付テモ亦生ス。支那ニ於テ現行ノ各國治外法權制度ノ下ニ於テハ外國裁判所ノ判決ニ對スル上訴ハ概ネ支那國領域外ノ裁判所ニ提起セラルヘキモノニシテ右ハ明ニ訴訟當事者タル支那人ニ對シテ不公平ナルノミナラス外國人ニ執リテモ不便ナリトス(第十三節參照)。

(六) 外國人ニ對スル支那國法規ノ適用免除

四一 支那國內ニ在ル外國裁判所カ其ノ本國ノ領域ニ於テ實施スル同一ノ法規ヲ其ノ儘又ハ修補ノ上支那國在住ノ自國民ニ之ヲ適用スルコトニ付テハ既ニ第十四節「適用法規」ニ於テ之ヲ述ヘタリ。然レトモ各場合ニ付特別ノ立法ヲ俟タスシテ本國法ヲ修補スルノ權限ハ固ヨリ其ノ範圍ニ制限アリテ交通、租稅及新聞ニ關スル諸規則等支那國補助的法規ヲ適用スルカ如キ權限ヲ含マス。其ノ結果ハ外國人ハ此ノ種法規ノ適用ヲ受ケサルコトヲ常トス。右ノ免除ニ基ク不合理ハ外國人支那官憲問ノ不斷ノ軋轢ノ原因ヲ成スニ至レリ。

(七) 支那人血統ノ者ノ國籍ニ關スル法ノ牴觸

四二 外國ニ生レタル支那人血統ノ者カ支那國領域内ニ來住スル場合ニ於テ血統主義ト出生地主義トノ相異ニ起因スル變則的事態ノ生スルコト稀ナラス。又往々ニシテ支那國ハ支那人血統ノ者カ外國ニ於テ爲シタル歸化ヲ否認スルコトアリ。是等ノ矛盾ハ治外法權ノ行使ニ依リテ一層紛糾ヲ來セリ。

三九

(八) 支那人ニ對スル不當保護

四〇

四三 治外法權國ノ中ニハ往々支那國ニ在ル支那人竝其ノ商館及財産ヲ領事館ニ登録セシメ以テ猥リニ之ニ保護ヲ與フルモノアリ。然レトモ斯クノ如キハ右治外法權國カ是等ノ者竝其ノ財産及營業ヲ支那國ノ法律及裁判所ノ管轄外ニ置クモノニシテ何等正當ナル理由アルコトヲ得ス。仍テ多數ノ國家ハ此ノ事態ヲ取締且匡正スルノ措置ヲ講スル所アリタリ。

四四 出生又ハ歸化ノ何レカニ依リテ外國市民權ヲ獲得シタル支那人血統ノ者カ條約上外國人ノ居住、財産所有又ハ營業ヲ許ササル支那國ノ地方ニ來リ又ハ歸リテ自ラ支那人ナリトシテ是等ノ條約上ノ制限ヲ脱却シ得ルニ至ル場合ニ生スル困難モ亦本項ニ於テ説明スルヲ可トス。是等ノ者ハ事アルニ際シテ當該領事ノ保護ヲ要求シ以テ支那人ノ名ノ下ニ約束シタル義務ヲ回避セムト試ムルモノナリ。一二ノ國家ニ於テ支那國在住ノ自國民ニ對シ強制的登録ヲ命ジ居ラサルノ事實ハ斯ノ種違反者ノ監視ヲ一層困難ナラシムルモノナリ。支那人血統ノ者カ種々ノ氏名ヲ

使用スルコトモ亦右困難ノ一原因タリ。

(九) 犯罪人引渡取極ノ欠缺

四五 治外法權ノ現行制度ト支那國及諸國間ニ犯罪人引渡ニ關スル取極ノ欠缺スルコトハ相俟テ在支外國裁判所ノ管轄區域外ニ脱走シタル者ノ處罰ヲ往々不可能ナラシム。斯ノ如キ不當ナル實例ハ治外法權ナクトモ或程度迄發生シ得ヘキ所ナルモ治外法權制度ノ實施ト共ニ一層顯著トナレルモノナリ。

(十) 外國人居宅ノ不可侵

四六 條約ニ依レハ外國人ノ居宅ハ支那國ノ司法官憲又ハ其ノ他ノ官憲ニ依リ搜索又ハ侵入セララルコトナク之ニ遁入セル支那人犯罪者ハ支那國官憲ヨリ領事ニ宛テタル正規ノ要求アルニ非サレハ又場合ニ依リテハ逮捕ノ理由ヲ一應實證スルニ非サレハ逮捕セラルルコトナシ。斯クテ往々治外法權國人民ニシテ其ノ居宅内ニ於テ支那人ヲ庇護シ又ハ之ヲ庇護スト認メラルル者ア

ルニ至ル。居宅カ領事館ヨリ遠隔ナル内地ニ存スル場合ニ於テハ關係外國人ノ庇護者タル地位一層顯著ナリトス。同様ノ事情ハ外國裁判所カ支那人又ハ他ノ治外法權國人民ノ居宅内ニ居住シ又ハ之ニ遁入セル自國民ヲ逮捕又ハ訴追セムトスル場合ニモ生ス。

(十二) 旅行、營業及居住ニ對スル制限

四七 治外法權制度カ廢棄セラレ又ハ實質的變更ヲ受クル迄ハ支那國全土ヲ外國人ノ通商貿易ニ開放セサルコト支那ニ取り得策ナリト爲スハ支那年來ノ方針ニシテ華府會議ニ於テ支那國全權ノ言明セル所ナリ。從テ宣教師及慈善事業家ヲ除キ外國人ハ支那國全土ニ於テ無制限ナル旅行、營業及居住ノ權ヲ有スルコトナク其ノ活動ハ一般ニ「條約港」又ハ「開港場」ト稱セラルル特別ノ地域、殊ニ是等ノ港市ノ特別ノ區域内ニ限定セラルルヲ常トス。此ノ事情ハ更ニ一ノ紛糾ヲ伴フモノニシテ支那國ト治外法權國トハ右港市及特別區域ノ正確ナル限界ニ關シ常ニ意見ヲ異ニシカ爲屢々外國人ト支那國官憲トノ間ニ紛擾ヲ生スル所アリタリ。

(十三) 裁判所間ノ司法上ノ協力

四八 支那國內ニ在ル外國裁判所ハ其ノ相互間及支那國裁判所又ハ會審衙門トノ間ニ於テ或ル程度迄召喚、證人訊問、犯罪人逮捕、判決執行及訴訟書類ノ送達ニ關シ司法上ノ協力ヲ實行スルトモ右相互援助ハ實際ニ於テ概ネ任意ノ協力ニシテ條約又ハ其ノ他ノ正式ナル協定中ニハ之ニ關スル充分ナル規定ナシ。

(十四) 辯護士

四九 辯護士ノ外國裁判所出廷ニ關シテハ各治外法權國ハ辯護士ヲ其ノ法廷ニ出席セシムルノ許可ニ關シ規則ヲ設ク。支那國ニ在ル自國裁判所ニ於テ其ノ業務ヲ行フコトヲ許サレタル辯護士ハ相互主義ニ依リ好意上支那國ニ於ケル他ノ外國裁判所ニ於テモ業務ニ從事スルコトヲ許サルルヲ常トス。辯護士ハ又上海會審衙門ニ於テモ亦辯護ニ從事スルコトヲ得。混合事件ヲ審理スル他ノ支那國裁判所ニ於ケル辯護士ノ出廷ニ關シテハ外國人カ原告トシテ事件ヲ新式裁判所ニ

提起スル場合ニ其ノ代理人トシテ支那國辯護士ヲ使用スルコトヲ得ルノ權利ヲ有スルニ止マリ
外國辯護士ヲ之ニ出廷セシムルノ權利ヲ認ムルコトナシ。

(五) 在支外國人及商館數

五〇 支那國ニ在ル外國人及外國商館數ノ概數ヲ知ルニ便ナラシムル爲左ニ其ノ統計ヲ掲ク。治
外法權國人民ハ之ヲ第一表ニ、非治外法權國人民ハ之ヲ第二表ニ收ム。右統計ハ千九百二十五
年度ノモノトシテ稅關ノ作成シタルモノナリ(千九百二十五年「支那國外國貿易」第二百十
九頁參照)。

右統計ニ付注意スヘキモノ左ノ如シ。

(イ) 治外法權國人民ノ全數ノ中九八・四「バーセント」ハ日本國、英帝國、亞米利加合衆國、
葡萄牙國及佛蘭西國ノ國民ニシテ爾餘ノ諸國ノ人民ハ其ノ全數僅ニ一・六「バーセント」ニ過
キス。

(ロ) 右ニ特記セル治外法權國五箇國ノ中八七・四「バーセント」ハ日本國(其ノ大部分ハ滿洲ニ
在リ)、六「バーセント」ハ英帝國、三・八「バーセント」ハ亞米利加合衆國、一・四「バ
ーセント」ハ葡萄牙國、一・二「バーセント」ハ佛蘭西國ノ國民ナリ。

第一表

國籍	人口	商館數
亞米利加合衆國	九、八四四	四八二
白耳義國	五四九	二五
伯刺西爾國	一	一
英帝國	一五、二四七	七一八
丁抹國	六二六	四五
和蘭國	四六九	三五

佛蘭西國	二、五七六	四六
伊太利國	七八三	四六
日本國(*)	二二八、三五一	四、七〇八
墨西哥國	一二	一
諾威國	五七五	一六
祕露國	一	一
葡萄牙國	三、七三九	一七四
西班牙國	二二六	一六
瑞典國	四八九	六
瑞西國	四二九	二五
計	二五四、〇〇六	六、四七三

第二表

國籍	人口	商館數
埃太利國	一九三	八
チッコ、スロヅアキア國	一五六	六
芬蘭國	二	一
獨逸國	五、〇五〇	五一八
洪牙利國	一	一
露西亞國	七九、七八五	九三二
其他	四八	六

(*) 日本委員ノ提供セル統計ニ依レハ千九百二十四年支那國ニ於ケル日本國臣民ノ總數
 ハ一、〇三二、七一六名ニシテ右ノ中朝鮮人八〇〇、〇〇〇名臺灣人七、九六三名ナリ。

(註) 支那國委員ハ三月二十三日附及四月二十六日附ヲ以テ二箇ノ覺書ヲ提出シタル
 カ右覺書ハ支那國ニ於ケル治外法權實施ノ現狀ニ關スル各種ノ問題ヲ論シタルモノ
 ニシテ右ノ中一ハ特別地域即外國共同居留地及專管居留地、租借地、北京公使館區
 域並鐵道附屬地ニ關スルモノナリ。委員會ハ「特別地域」ノ問題ハ華府決議ニ規定
 セラレタル委員會ノ調査權限内ニ屬セストノ意見ヲ有シタリ。而シテ右二箇ノ覺書
 ハ之ヲ考慮ノ爲關係國政府ニ送付スルコトニ決定セラレタリ。

附錄第一 治外法權國及其ノ關係條約條項一覽表

一、亞米利加合衆國

- 望夏條約(千八百四十四年) 第十六條 第二十一條 第二十四條 第二十九條
- 天津條約(千八百五十八年) 第十一條 第十八條 第二十七條 第二十八條 第三十條
- 北京通商條約(千八百八十年) 第四條

二、白耳義國

- 北京條約(千八百六十五年) 第十六條 第十七條 第十八條 第十九條 第二十條

三、伯刺西爾國

- 天津條約(千八百八十一年) 第九條 第十條 第十一條

四、英帝國

- 通商章程(千八百四十三年) 第十三條 千八百五十八年ノ條約第一條ニ依リ廢棄セララル
- 天津條約(千八百五十八年) 第七條 第十五條 第十六條 第十七條 第二十二條 第五十四條
- 千八百七十六年芝罘協約 第二節
- 千八百九十四年緬甸協約 第十七條
- 千八百九十四年ノ緬甸協約ノ修正(千八百九十七年) 第二條
- 香港地域擴張ニ關スル協約(千八百九十八年) 第二項

通商條約（千九百二年）第八條第二項

西藏ニ關スル協約（千九百六年）第四條

西藏通商規則（千九百八年）第四條

五、丁抹國

天津條約（千八百六十三年）第十五條 第十六條 第十七條 第十八條

六、佛蘭西國

黃埔條約（千八百四十四年）第二十五條 第二十六條 第二十七條 第二十八條 第三十一條

第三十五條

天津條約（千八百五十八年）第三十二條 第三十五條 第三十八條 第三十九條 第四十條

天津條約（千八百八十六年）第十六條 第十七條

七、伊太利國

天津條約（千八百六十六年）第十五條 第十六條 第十七條 第十八條

八、日本國

天津條約（千八百七十一年）第十二條 第十三條

通商航海條約（千八百九十六年）第二十條 第二十一條 第二十二條 第二十三條 第二十四

條

九、黑西哥國

華盛頓條約（千八百九十九年）第十三條 第十四條 第十六條 第十七條

一〇、和蘭國

天津條約（千八百六十三年）第六條 第十五條

一一、諾威國

廣東條約（千八百四十七年）第二十一條 第二十四條 第二十五條 第二十九條

一二、祕露國

天津條約(千八百七十四年)第十二條 第十三條 第十四條

一三、葡萄牙國

天津條約(千八百六十二年)第十五條 第十六條 第十七條 第十八條

北京條約(千八百八十七年)第四十七條 第四十八條 第四十九條 第五十條 第五十一條

一四、西班牙國

天津條約(千八百六十四年)第十五條 第十六條 第十七條 第十八條 第十二條 第十三條

第十四條

一五、瑞典國

廣東條約(千八百四十七年)第二十一條 第二十四條 第二十五條 第二十九條

一六、瑞西國

東京條約(千九百十八年)第二條及條約附屬ノ宣言

附錄第二 千九百十三年十月十日ノ支那國大總統ノ宣言

「、、、余ハ茲ニ前清政府及臨時共和政府ヲ一方トシ外國政府ヲ他方トシテ締結セラレタル一切ノ條約、協約及國際的協定ハ嚴格ニ遵奉セララルヘク前政府カ外國會社及個人ト正當ニ約定セル一切ノ契約モ亦嚴格ニ遵奉セララルヘク更ニ外國人カ國際的協定、國內法規及既定ノ慣行ニ依リ支那國ニ於テ享有セル一切ノ權利、特權及免除ハ茲ニ確認セララルヘキコトヲ宣言ス。國際的親善及平和ヲ維持セムカ爲余ハ此ノ宣言ヲ爲ス。」

附錄第三 外國裁判所ノ概要ニ關スル各國ノ覺書

一 亞米利加合衆國

一 概説

亞米利加合衆國ハ千八百四十四年ノ合衆國支那國間ノ望夏條約第十六條、第二十一條、第二十

四條、第二十五條及第二十九條ニ依リ治外法權ニ關スル權利ヲ獲得シタルカ同條約批准ノ後合衆國政府ハ條約ノ規定實行ノ爲必要ナル法規ヲ制定スルト共ニ裁判機關ヲ創設スル所アリタリ。合衆國ノ治外法權裁判所ノ制度ヲ規定セル最初ノ法律ハ千八百四十八年八月十一日制定セラル。之ニ次テ千八百六十年六月二十日、千八百六十六年七月二十二日、千八百七十年七月一日、千八百七十四年三月二十三日及千八百七十六年二月一日ノ補充的修正法律アリ。千八百七十八年上記ノ諸法律ハ總テ合衆國修正法律第四千八百三十三乃至第四千三百三十節ニ一括整理セラレタリ。右法律ハ支那國ニ關スル限リ尙其ノ效力ヲ存續スルモノナルモ合衆國支那裁判所ノ設立ヲ定ムル千九百六年六月三十日ノ法律及上海領事館區域領事裁判所ノ領事裁判官ノ司法事務ヲ合衆國支那裁判所ノ「コミッショナー」(Commissioner)ニ於テ處理スヘキコトヲ規定セル千九百二十年六月四日ノ法律ニ依リテ修正セラレタル點アリ。前記「コミッショナー」ハ前記日附以後ハ職權上當然上海領事裁判所判事ト爲リタリ。

尙阿片取引ニ關スル法律、藥局法、支那貿易法ノ如キ多數ノ特別法アリ。

二 治外法權裁判所概説

前記諸法律ノ結果現在支那國內ニハ左ノ如キ亞米利加合衆國ノ治外法權裁判所アリ。

- | | | |
|-----|-----------------|----|
| (1) | 領事裁判所 | 一七 |
| (2) | 合衆國「コミッショナー」ノ法廷 | 一 |
| (3) | 合衆國支那裁判所 | 一 |
| (一) | 領事裁判所 | |

支那國內ニハ十八ノ領事館區域アリ即チ厦門、安東、廣東、長沙、芝罘、重慶、福州、漢口、哈爾濱、張家口、奉天、南京、上海、汕頭、天津、濟南、青島、雲南トス。右區域ノ領事館ヲ管掌スル總領事、領事又ハ副領事ハ上海ヲ除キ領事裁判所ノ判事ト爲ル。上海ニ於テハ合衆國支那裁判所ノ「コミッショナー」ハ首席領事官ニ代リテ職權上領事裁

判所ノ判事タルモノトス。

五六

領事裁判所（合衆國支那裁判所ノ「コミッションナー」ノ法廷ヲ含ム）ハ民事、刑事及商事ノ裁判權ヲ有ス。民事事件ニ在リテハ訴訟物ノ價格カ合衆國貨幣五百弗ヲ超過セサルモノ、刑事事件ニ在リテハ犯罪ニ對スル刑罰カ百弗ノ罰金又ハ六十日ノ懲役又ハ其ノ兩者ニ該當スルモノヲ以テ其ノ管轄トス。尙是等ノ裁判所ハ被告人ヲ逮捕、取調且放免スルノ權アリ。又事件其ノ管轄ニ屬セサル場合ニ於テハ被告人ヲ合衆國支那裁判所ノ審問ニ附スル爲拘束スルノ權アリ。遺産事件ニ付テハ合衆國貨幣五百弗以下ノ一切ノ遺産ニ付管轄權ヲ有ス。

(二) 合衆國支那裁判所

合衆國支那裁判所ハ千九百六年六月三十日ノ法律ニ依リ創設セラレ合衆國司法制度上合衆國「ディストリクト・コート」ト事實上同等ノ地位ヲ有ス。同裁判所ハ十年ノ任期ヲ有ス

ル一名ノ判事並裁判所長ノ任免スル一名ノ檢事及二名ノ書記及一名ノ「コミッションナー」ヲ以テ其ノ職員トス。同裁判所ハ上海ニ定期ニ開廷シ廣東、天津及漢口ノ各市ニ毎年一回宛定期ニ法廷ヲ開クコトヲ要ス。尙同裁判所ハ必要アリト認ムルトキハ其ノ裁量ヲ以テ條約ニ基キ認許セララルル支那國內ノ各都市ノ合衆國領事館内ニ於テ法廷ヲ開クコトヲ得。

合衆國支那裁判所ハ領事裁判所ノ管轄ニ屬セサル民事、刑事及遺産事件ニ付第一審裁判權ヲ有ス。エー、シー、ケー、フイツチ (A. C. K. Fitch) ノ遺産事件ニ關スル千九百十九年三月ノ判決ニ依リ合衆國支那裁判所判事ハ同裁判所カ領事裁判所ノ第一審裁判權ニ屬スル輕微ナル事件ニ付テモ之ト競合シテ管轄ヲ有スルモノトセラレタリ。故ニ右ノ決定ニ基キ當事者ハ領事裁判所ニ提起スルヲ要スヘキ輕微ナル事件ニ付テ先ツ合衆國支那裁判所ニ訴訟ヲ提起スルコトヲ得ルモノトス。尙ホ合衆國支那裁判所ハ領事裁判所

五七

及「コミッションナー」ノ法廷カ第一審トシテ裁判シタル一切ノ事件ニ付上訴管轄ヲ有ス。

五八

三 上訴

合衆國支那裁判所ニ於ケル上訴ノ系統ヲ述フレハ左ノ如シ。

- (1) 領事裁判所ノ判決又ハ決定ニ對スル上訴ハ合衆國支那裁判所ノ管轄トス。
- (2) 合衆國支那裁判所ノ判決及決定ニ對スル上訴ハ加州桑港ノ第九巡回區合衆國巡回控訴院ノ管轄トス。

- (3) 治外法權ノ管轄ニ屬スル事件ニ關スル合衆國巡回控訴院ノ判決及命令ニ付テハ合衆國高等法院ニ上訴ヲ提起スルコトヲ得。但シ事件ノ性質カ合衆國地方裁判所及巡回裁判所ヲ第一審トスル事件ニ對スル右巡回控訴院ノ判決ニ付上訴ノ許サルト同一ノ種類タルコトヲ要ス。

四 囚人

領事裁判所及合衆國支那裁判所ノ判決ヲ受ケタル囚人ハ輕微ナル事件ニ付テハ在上海合衆國監獄又ハ裁判所ノ指定スル他ノ監獄ニ之ヲ收容ス。懲役期間三箇月ヲ超ユル事件ノ囚人ハ之ヲ「マニラ」ノ「ピリビッド」監獄ニ送致スルノ慣例ナリシモ最近ハ合衆國ニ送致ス。合衆國檢事總長ハ改正法律第五千五百四十六節ニ依リ其ノ裁量ヲ以テ犯人ヲ合衆國ノ聯邦監獄ニ移送スルコトヲ得。

- 五 支那國在住ノ合衆國國民ニ適用スル法規ニ關シテハ改正法律第四千八十六節及千九百八年六月三十日ノ法律ノ第四節中ニ一般的规定アリ。同規定ノ全文ハ左ノ如シ。
第四千八十六節 刑事及民事ノ兩者ニ關スル裁判權ハ一切ノ場合ニ於テ合衆國ノ法律ニ準據シテ行使セラルヘク右法律ハ各條約ヲ實施スル爲ニ必要ナル限り及該條約ヲ施行スル爲ニ適切ト認メラルル限り支那國在住ノ一切ノ合衆國國民及各條約ノ規定ニ依リ正當又ハ必要ト認メラルル範圍ニ於テ其ノ他ノ一切ノ者ニ及フモノトス。然レトモ右法律カ當該目的ニ適ハサル

五九

カ又ハ適當ノ措置ヲ講スル爲必要ナル規定ヲ缺クカ如キ一切ノ場合ニ於テハ普通法及衡平法及海事法カ同様ノ方法ニ依リ支那國在住ノ合衆國國民及其ノ他ノ者ニ及フモノトス。而シテ若シ普通法衡平法、若ハ海事法又ハ合衆國ノ法律カ適切且充分ナル措置ヲ講スルニ足ラサル場合ニハ支那國駐在合衆國公使ハ法律ノ效力ヲ有スヘキ命令及規則ヲ制定シ其ノ缺點及缺陷ヲ補正スヘキモノトス。

第四節 合衆國裁判所ノ民事及刑事ノ初審及控訴審ノ裁判權及在支領事裁判所ノ裁判權ハ條約及支那國ニ在ル合衆國領事裁判所ニ關スル現行ノ合衆國ノ法律ニ準據シテ行使セラルヘク且該領事裁判所ノ一切ノ判決及決定並合衆國裁判所ノ一切ノ決定、判決及命令ハ條約及前記法律ニ從ヒ執行セラルヘシ。然レトモ右法律カ裁判ヲ行フ爲又ハ適當ナル措置ヲ執ル爲必要ナル規定ヲ缺クトキハ合衆國及支那國間ノ條約ノ規定ニ從ヒ普通法及合衆國裁判所ノ決定ニ依リ確立セラレタル法則ニ準據スヘキモノトス。

過去三年間（即チ千九百二十三年乃至千九百二十五年）ニ於テ在支合衆國諸裁判所ニ於テ裁判シタル民事、刑事及警察犯ノ總件數ハ千六件ニシテ之ニ關係アル合衆國國民數概算一萬二千人ナリ。其ノ中九百四十五名ハ上海ニ於テ裁判ヲ受ケタルモノトス。各年平均事件數ハ三百六十九件ニシテ右ノ中百三十件ハ上海租界章程附則違反事件ナリ。

二 白耳義國

白耳義國ハ千八百六十五年十一月二日ノ北京條約ニ依リテ支那國ニ於ケル治外法權ニ關スル權利ヲ取得セリ。而シテ該國內ニ居住セル白耳義國國民ノ地位ハ千八百五十一年十二月三十一日ノ領事組織法ノ規定スル所ナリ。

領事裁判所常設ノ必要ナカリシ爲未タ其ノ設置ヲ見スト雖必要アレハ廣東、漢口、上海及天津駐在領事ノ發議ニ依リ法廷ヲ開クコトヲ得ルモノトス。領事裁判所ハ裁判長タル領事、名聲アル白國國民二名ノ會審員、裁判所書記タル領事館書記生ヲ以テ之ヲ組織ス。

支那國ニ在ル白耳義國領事裁判所ノ司法權行使ニ付テハ「ブラッセル」ノ檢事總長之ヲ監督ス。
民事事件ノ裁判

白耳義國臣民ヲ被告トシ白耳義國臣民又ハ他國人ヲ原告トスル價額百法以下ノ一切ノ訴訟ハ領事
單獨ニテ之ヲ裁判シ其ノ判決ニ對シテハ上訴ヲ許サス。白耳義國臣民ヲ被告トシ白耳義國臣民又
ハ他國民ヲ原告トスル百法^{フラン}ヲ超過スル價額ノ一切ノ訴訟ハ領事ハ二名ノ會審員ト共ニ之ヲ裁判
ス。其ノ判決ニ對シテハ控訴ノ途アリ。控訴ハ「ブラッセル」控訴院ノ管轄トス。而シテ法律ノ
點ニ關スル上告ハ白耳義國ノ法律ニ依リ認メラレタル場合ニ於テ「ブラッセル」ノ上告裁判所ニ
提起スルコトヲ得。支那人白耳義國臣民間ノ訴訟ハ衡平ニ裁判ヲ爲スヘキ混合法廷ノ制度ヲ定メ
タル千八百六十五年ノ北京條約ノ規定セル和解手續ニ依リ之ヲ解決ス。

刑事事件ニ關スル裁判

警察犯

領事ハ白耳義國臣民ニ關スル簡單ナル警察犯ヲ審判ス。領事ノ決定ニ對シテハ上訴ノ途ナシ。
輕罪

領事ハ名聲アル白耳義國臣民中ヨリ選任セル二名ノ會審員ノ助力ヲ以テ白耳義國臣民ノ輕罪事件
ノ第一審ノ裁判ヲ行フ。其ノ控訴ハ「ブラッセル」ノ控訴院ニテ審理セラレ法律點ニ關スル上告
ハ白耳義ノ法律ニ依リ許可セラル場合ニ於テ「ブラッセル」ノ上告裁判所ニ於テ審理セラル。

重罪

刑法ニ依リ重罪トセラルル罪ヲ犯シタル者ハ「ブラバン」州ノ巡回裁判所ノ管轄トシ之ヲ「ブラッ
セル」ニ送致ス。

刑罰

警察犯、輕罪及重罪ニ對シテハ白耳義國ノ法規ノ規定スル刑罰ヲ課スルモ警察犯及輕罪ニ關シテ
ハ領事ハ罰金ヲ以テ徵役ニ代フルノ權限ヲ有ス。

英帝國ハ千八百九十年ノ外國裁判法ニ依リ條約其ノ他ニ基キ裁判權ヲ有スル諸國內ニ於テ英帝國臣民ニ對シ右ノ權利ヲ行使スル爲立法ヲ爲スノ權限ヲ定メタリ。右ハ樞密院ノ協贊ヲ以テ發布スル勅令 (Order in Council トシテ知ラル) ニ依ルヘキモノニシテ右ノ權力ニ基キ二百三十六條ヨ成ル千九百二十五年ノ支那國ニ於ケル裁判ニ關スル勅令制定セラレ同令ハ支那國全土 (「カシユガール」ヲ除ク) ニ於ケル右裁判權ニ關スル他ノ勅令ニ代ハレリ。

裁判權ハ高等法院及地方法院ニ依リテ行使セラル。而シテ右裁判權ハ一切ノ民事、刑事ノ事件ニ亘リ現在ニ於テハ支那國ニ住所ヲ有スル英帝國臣民ノ離婚事件ニモ及フモノトス。

高等法院

高等法院ハ上海ニ常設セラルルモノナルモ支那國ノ他ノ如何ナル地方ニ於テモ開廷スルコトヲ得。現在ニ二名ノ素養アル判事及一名ノ專任事務員ヲ有ス。民事及刑事ノ事件ニ付テハ其ノ管轄ニ

制限ナシ。裁判ハ判事單獨ニテ又ハ會審員ト共ニ之ヲ行ヒ又陪審員ヲ出席セシムルコトアリ。民事(例ハ離婚)及刑事(例ハ殺人)トモ特定ノ事件ハ高等法院ニ於テ裁判スルコトヲ必要トスルモノアリ。

地方法院

支那國ニ於ケル各領事館管轄區域内ニハ各一ノ地方法院アリ。其ノ區域ヲ管轄スル領事官之ヲ主宰ス。其ノ有スル民事事件ノ裁判權ニハ價額上ノ制限ナク唯左ノ條件ニ從フ。

- (1) 價額五百磅以上ナルカ又ハ困難ナル法律問題ヲ伴フ事件ハ高等法院ニ報告スルコトヲ要ス。

- (2) 高等法院ハ如何ナル事件ニテモ自ラ之ヲ裁判スルノ權利ヲ有ス。

地方法院ハ單獨ニテ又ハ會審員ノ出席ヲ以テ裁判ヲ行フ。刑事事件ニ在リテハ其ノ管轄ハ十二箇月ノ懲役及百磅ノ罰金ノ刑ヲ最高トスル事件ニ限ラルルモ高等法院ハ如何ナル事件ヲモ地方法院

ヨリ之ヲ移シテ自ラ裁判スルコトヲ得。地方法院ハ簡易手續ニ依リ又ハ會審員ノ出席ヲ以テ裁判ヲ爲ス。

六六

上訴(高等法院)

上海ニ三名ノ判事ヲ定員トスル合議廷アリ。合議廷ハ民事及刑事事件ニ付完全ナル管轄權ヲ有ス。同合議廷ハ緊急ノ事件ヲ處理スルトキニハ二名ノ判事ヲ以テ之ヲ構成シ其ノ他ノ場合ニハ一名ノ判事ヲ以テ之ヲ構成ス。同法廷ハ英帝國控訴院及刑事控訴院ト同等ノ權限ヲ有ス。高等法院ニ於ケル民事訴訟ノ當事者ハ何レモ同合議廷ニ上訴ヲ提起スルコトヲ得。地方法院ニ於ケル三十五磅以上ノ價額ノ民事訴訟ノ當事者亦同シ。地方法院又ハ合議廷ハ如何ナル事件ニ付テモ上訴提起ノ許可ヲ與フルコトヲ得。刑事事件ニ付テハ常ニ合議廷ニ上訴ヲ許スモノトス。法律上ノ論點ニ關スル限り簡易裁判ニ付テモ亦同シ。合議廷ハ又刑事事件ニ付テモ上訴提起ノ許可ヲ與フルコトアリ。

上告

合議廷ノ民事ノ判決ニ對シテハ倫敦ニ開設セララルル樞密院ニ上訴ヲ提起スルコトヲ得但シ(イ)五百磅又ハ夫レ以上ノ事件ニ付テハ當然右上诉ヲ提起シ得ヘキモ(ロ)其ノ他ノ事件ニ在リテハ一般公共ノ爲極メテ重要ナル意義ヲ有スルモノニシテ且合議廷ノ許可アリタルコトヲ要ス。合議廷ノ刑事ノ裁判ニ對シテハ樞密院ノ許可アリタル場合ノ外之ニ上訴ヲ提起スルノ途ナシトス。

刑事ノ判決ハ支那國內ニ於テ之ヲ執行ス。然レトモ囚人ヲ香港又ハ其ノ他ノ場所ニ送リテ服役セシムルコトヲ得ルモノトス。死刑ハ英國公使ノ確認ヲ得タル後上海ニ於テ懸首ノ方法ヲ以テ之ヲ執行ス。刑ノ輕減及免除ハ高等法院判事ノ報告ニ基キ英帝國國務大臣又ハ公使之ヲ行フ。民事事件ニ在リテハ勅令ノ規定ニ從ヒ現ニ效力ヲ有スル英帝國ノ法規ヲ以テ其ノ適用法規トシ刑事事件ニ在リテモ亦現ニ效力ヲ有スル英帝國ノ法規ヲ以テ其ノ適用法規トス。裁判所ハ又勅令ニ於テ犯罪ト定メタル事項ノ一切ヲ裁判スルコトヲ得ルモノニシテ英帝國臣民ニ對シテ支那國ニ在ル外國裁判所ニ於ケル偽證及右裁判所ニ對スル侮告ニ付テモ處罰シ、更ニ地方的規則(例ヘハ衛

六七

生、港灣又ハ麻藥若ハ武器輸入等ニ關スルモノ）ヲモ強制スルコトヲ得。千九百二十二年一月迄ニ於テ制定セラレタル此ノ種ノ規則百九十二アリ其ノ中百四十六カ當時支那國內ニ於テ實施セラレタリ。（此ノ種ノ規則ヲ制定スルノ權限ハ以前ノ勅令ノ規定スル所ナリ）。

「カシユガール」ハ特別ノ取扱ヲ受ケ印度ノ法規カ同地在住ノ英帝國臣民ニ適用アリ。同地ニ設立セラレル裁判所ハ緬甸裁判所ノ管下ニ在リ。但シ右以外ハ上掲ノ諸原則カ總テ一般的ニ適用アルモノトス。

四 丁 抹 國

支那國內ノ丁抹國臣民ニ對スル裁判權ニ關スル現行法規ハ千八百九十五年二月十五日ノ法律ニ基クモノナリ。支那國全土ニ對スル司法權及行政權ノ行使ハ右法規ニ準據シ丁抹國外務省ノ發シタル特別ノ訓令ニ從ヒ在上海丁抹國裁判所之ヲ掌ル。

裁判所ノ構成

在上海總領事ハ職權上領事裁判官ニシテ總領事館ノ職員及部下タル他ノ地方在勤ノ領事ノ援助ヲ受ケ其ノ職務ヲ行フ。

民事事件ニ在リテハ總領事單獨ニ裁判ヲ行ヒ刑事事件ニ在リテハ總領事單獨ニ豫審ヲ行フ。總領事ハ又二百「クラウン」以下ノ罰金刑ニ付テハ單獨ニテ判決ヲ言渡スモノトス。總領事ニ於テ之ヨリモ重キ刑罰ヲ課スヘキモノト推定シタルトキハ判決言渡ニ當リ二名ノ男子ヲ呼出シ其ノ援助ヲ受クヘキモノトス。右二名ハ成ルヘク支那國在住丁抹國臣民ノ中ヨリ之ヲ選定スルコトヲ要ス。領事裁判官ハ領事裁判所ノ裁判長タルモノナレトモ會審員ハ之ト同等ノ票決權ヲ有シ判決ハ投票ノ多數ニ依リテ決セラレルモノトノトス。

裁判所ノ權限

領事裁判所ハ支那國內ニ居住シ又ハ一時滞在スル丁抹國臣民ヲ被告トスル一切ノ民事事件ニ付第一審ヲ管轄スルモノニシテ且遺產裁判所トシテ支那國內ニ居住スル丁抹國臣民ノ遺產ヲ管理スル

モノトス。

刑事事件ニ在リテハ領事裁判所ハ六箇月ノ懲役以下ノ判決ヲ言渡スノ權限アリ。然レトモ此ヨリ重キ事件ハ「コペンハーゲン」ニ在ル裁判所ニ之ヲ送致ス。

領事裁判官ハ執行官吏タル資格ヲ以テ其ノ管轄下ニ在ル臣民ニ對シ判決及法廷内ニテ作成セラレタル契約ノ執行ヲ掌ル。右判決又ハ契約ハ右領事裁判官自身カ言渡シ又ハ其ノ面前ニテ成立シタルモノニ係ルト他ノ裁判權アル丁抹國領事又ハ丁抹本國ノ裁判所カ自ラ言渡シ又ハ其ノ面前ニテ成立シタルモノニ係ルト問フコトナシ。

總領事ハ特別ノ行政權ニ基キ全國ニ亙リ又ハ其ノ一部ニ對シ及其ノ管轄轄下ニ在ル個人ニ對シ一般警察規則ヲ公布シ且支那國ノ現行法規ニ關シ遵守スヘキ條項ヲ公示スルコトヲ得。

上訴

民事事件ノ上訴ヲ管轄スル裁判所ハ「コペンハーゲン」ノ控訴裁判所ナリ。刑事事件ニ在リテハ

懲役刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ第一審裁判ノ爲事件ヲ「コペンハーゲン」ノ地方裁判所ニ移送スヘキコトヲ要求スルノ權アリ。此ノ場合被告人ハ本國ニ送還セラレ丁抹國ニ於ケル官憲ニ引渡サルルモノトス。

監獄

囚人ハ領事裁判所ノ所在スル上海佛國租界内ノ監獄ニ之ヲ收監スルヲ常トス。

裁判所ノ適用スル法規

訴訟事件ハ能フ限り丁抹國ノ法規ニ準據シテ之ヲ裁判ス。殊ニ刑事事件ニ在リテハ一般丁抹國刑法典及刑事規定ヲ有スル其ノ他ノ法規ニ依リ事件ヲ判決スルモノトス。民事事件ニ在リテハ裁判所ノ判決ニ於テ往々地方的慣習ノミナラス外國法ヲモ考慮ニ容ルルコトアルハ言ヲ俟タス。

丁抹國刑法ヲ其ノ儘適用シ得サル刑事事件例ヘハ武器、麻藥其ノ他ニ關スル地方的輸入規則又ハ其ノ他ノ地方的規則ノ違反ニ該ル事件ニ在リテハ裁判所ハ通常之ニ適應セル丁抹國法規ヲ準用シ

テ之ヲ處分ス。

七二

統計

(イ) 領事裁判所ニ提起セラレタル民事事件ノ大部分ハ裁判官ノ助力ニ依リ法廷外ニ於テ解決セラレ呼出狀ヲ送達シタル事件ハ極テ少數ナリ。過去十年間ノ平均事件數ハ五件ニシテ何等訴訟事件ナキ年モアリタリ。原告ノ約三十「パーセント」ハ支那人ニシテ其ノ殘餘ノ大部分ハ各種國籍ニ屬スル外國人ナリ。領事裁判所ノ判決ニシテ「コペンハーゲン」ニ在ル上級裁判所ニ上訴セラレタルモノ一件モナシ。

(ロ) 過去十年間ニ於テ領事裁判所ハ總計二十五件ノ刑事事件ヲ裁判シタリ。犯罪ノ種別ヲ述フレハ交通法規ニ關スル重大ナル違反其ノ他十件、毆打七件、強盜詐欺三件、毀謗三件、殺人一件及遺棄一件ニシテ右ノ内二件ノミ「コペンハーゲン」ニ在ル刑事裁判所ニ送致セラレタリ。

五 佛蘭西國

一 地位

千八百四十四年十月二十四日ノ佛支黃埔條約第二十七條及第二十八條竝千八百五十三年七月二十七日ノ佛支天津條約ノ第三十八條及第三十九條ハ支那國ニ在ル佛蘭西國國民ハ佛蘭西國ノ裁判權ノ下ニ在ルコトヲ規定ス。

支那國ニ於ケル佛蘭西國領事裁判ニ關スル千八百五十二年七月八日ノ法律ニ依リ近東ニ於テ同一事項ニ付實施セラレタル規定ヲ之ニ多少ノ變更ヲ加ヘテ適用セラレタリ。

現在支那國ニ於ケル佛蘭西國領事裁判ヲ規律スル主要ナル法規ハ上記ノ法律ヲ除キ左ノ如シ。

千六百八十一年八月ノ海法

外國於ニ於テ佛蘭西國領事ノ行使スル裁判及警察權ニ關スル千七百七十八年七月勅令

近東ニ於ケル佛蘭西國國民ノ警察犯、輕罪及重罪ノ訴追及處罰ニ關スル千八百三十八年五月二

十八日ノ法律

七四

支那國ニ於ケル領事裁判所ノ上訴及同國ニ於ケル佛蘭西國國民ノ犯罪ヲ審理スルノ義務ヲ「サイゴン」ノ裁判所ニ指定セル千八百六十九年四月二十八日ノ法律

雲南ニ於ケル領事裁判所ノ判決ニ對スル上訴及同省ニ於ケル佛蘭西國國民ノ犯罪ヲ審理スルノ義務ヲ「ハノイ」控訴院ニ指定セル千九百十年七月十五日ノ法律

二 領事裁判所ノ構成

支那國ニハ十七ノ佛蘭西國領事裁判所アリ。各領事裁判所ハ單純ナル警察犯ニ付領事單獨ニ審理スル場合ヲ除キ民事及刑事ヲ通シ裁判長タル領事ト二名ノ會審員トヲ以テ之ヲ構成ス。北京ニ於テハ裁判事務ハ公使館ノ書記生之ヲ行フ（千八百八十一年一月三十一日ノ命令）。千九百十七年上海ノ領事裁判所附トシテ一名ノ判事配置セラレタリシカ現在ハ此ノ地ニ支那國全土ヲ管轄區域トスル一名ノ判事ヲ置キ領事自身ニテ裁判ヲ行ハサル領事裁判所ニ於テ裁判ヲ行フ。尙

一般ニハ領事ノ不在ナルトキ又ハ審理ヲ行フ能ハサルトキニハ領事館ノ一職員之ニ代理スルモノニシテ此ノ場合ニハ後者ニ於テ事件審理ノ一切ノ過程ヲ終了スヘキモノトス。

會審會員ハ成年ニ達シ且一切ノ私權ヲ享有スル佛蘭西國國民ナルコトヲ要ス。商事又ハ民事ノ事件ニ在リテハ會審員ハ事件毎ニ任命セラレ刑事ニ在リテハ一年ノ任期ヲ以テ豫メ任命セラレ。會審員ハ其ノ職務ヲ行フニ先チ宣誓ヲ爲スヘキモノトス。

領事何等カノ理由ニ依リ會審員ノ援助ヲ得ル能ハサルトキハ單獨ニテ審理ヲ行フ。書記生ハ裁判所ノ録事及書記ノ職務ヲ行フコトヲ得。北京ニ於テハ右ノ職務ハ佛蘭西共和國公使又ハ代理公使ノ任命スル書記生代理ニ於テ之ヲ行フ。

領事裁判所ニハ檢事ヲ置カス。豫審判事ノ職務ハ領事之ヲ行フ。

三 權限

領事裁判所ハ其ノ性質及輕重ヲ問ハス佛蘭西國國民相互間又ハ佛蘭西國國民若ハ佛蘭西國保護

七五

民カ外國人ヨリ訴ヘラレタル一切ノ民事又ハ商事訴訟ヲ審理ス。先例ニ依レハ支那人モ亦原告トシテ佛蘭西國國民ヲ對手トシ佛蘭西國領事裁判所ニ訴訟ヲ提起スルコトヲ得ヘキモノトス。訴訟價格三千法ヲ超エサル債權又ハ動産上ノ請求及右價格ヲ超エサル反訴又ハ要償ノ訴訟當事者ニ於テ最終審トスルコトニ同意シタル事件ニ付テハ領事ノ審理ヲ以テ終審トス。刑事事件ニ在リテハ領事裁判所ハ左記三種ノ輕罪ニ限り之ヲ裁判スルコトヲ得。

(イ) 犯人カ佛蘭西國國民ナルトキ

(ロ) 犯人カ佛蘭西國保護民ナルトキ

(ハ) 佛蘭西國國民カ外國人ノ輕罪事件ニ共犯者トナレルトキ

支那國ハ「ルーマニア」人又ハ希臘人ノ如キ佛蘭西國ノ保護民ニ對シ佛蘭西國ノ裁判權ヲ及ホスコトニ異議ヲ申立テツツアリ。(支那國外交部ヨリ佛蘭西國公使ニ宛テタル千九百十九年一月十三日ノ「ブジラ」(Busila)事件及千九百二十年十二月十一日ノ「ツーリオトス」(Tonliotos)事

件ニ關スル照會參照)。

領事裁判所ハ監獄ノ設ナキ場合及監獄カ被告人ヲ收容スルニ適當ナラスト認メラルル場合ニ於テハ罰金刑ヲ以テ懲役ニ代フルコトヲ得。

一般刑事犯ハ在「サイゴン」又ハ在「ハノイ」ノ控訴院ニ移送セララルモノトス。右法院ニ在リテハ先ツ檢事長ノ移審部ニ之ヲ送致シ罪狀明白ニシテ起訴スヘキモノト認メラレタル後之ヲ刑事公判部ニ移送スルモノトス。

評議廷

領事裁判所ハ警察犯及輕罪ニ在リテハ領事カ直接召喚ノ權ヲ行使セサル場合ニ於テ評議廷トシテ開廷シ重罪ニ在リテハ豫審終了ト共ニ直ニ評議廷トシテ開廷ス。評議廷ハ左記ノ決定ヲ爲スコトヲ得。

(1) 證據不充分ナルコト及起訴スヘキ事實ナキコト。

- (2) 犯罪ヲ警察犯トシ被告人ヲ單純ナル警察犯審問手續ニ附スヘキコト。
- (3) 犯罪ヲ輕罪トシ被告人ヲ輕罪ヲ審理スヘキ法廷ニ差戻スヘキコト。
- (4) 犯罪ヲ重罪トシ被告人ヲ拘禁スルノ命令ヲ發スルコト。但シ逮捕狀ニ依リ拘禁スル場合ニハ右ノ命令ハ遲滯ナク之ヲ被告人ニ通知シ右被告人ヲ證據及調書ト共ニ關係法廷ノ檢事長ニ送致スルモノトス。

四 控訴

單純ナル警察犯ノ判決ニ對シテハ上訴ナシ。民事事件ニ付テハ一千七百七十八年ノ勅令ノ規定及民事訴訟法第四百五十六條及第六十一條ニ上訴ノ提起ニ關スル條項アリ。

刑事事件ニ付テハ輕罪ト認メラルル事實ニ關スル領事裁判所ノ判決ニ對シテハ總テ上訴ヲ爲スコトヲ得。控訴ノ權利ハ被告人、民事上ノ責任者、被害者(本人自身ノ利益ニ關シテノミ)及所轄裁判所ノ檢事長之ヲ有ス。

五 上告

上告ハ巴里ニ在ル破毀院ノ管轄トス。民事ニ在リテハ上告ハ裁判所カ其ノ權限ヲ踰越シタリトノ理由ニ依ル場合ニ限り之ヲ許ス。刑事事件ニ在リテハ單純ナル警察犯ノ判決ニ對シテハ上告ヲ許サス。

六 適用法規

佛蘭西國法規ハ領事裁判ニ關スル特別法規ニ牴觸スルコトナク且純然タル屬地的性質ヲ有スルモノニ非サル限り原則トシテ總テ領事裁判ニモ其ノ適用アリ。但シ外國人ヲ原告トシ佛蘭西國國民又ハ佛蘭西國保護民ヲ被告トスル場合ニ於テ外國人ノ本國法カ佛蘭西國法規ト其ノ内容ヲ共通ニセサルトキハ領事裁判所ハ國際法ノ原則ニ準據スルヲ要シ從テ「場所カ行爲ヲ支配スル」ノ原則ヲモ當然考慮スルヲ要スルニ至ル。同様ニ當事者カ自ラ準據スヘキ法律ヲ指定スルトキハ右ノ法律ヲ適用スルヲ要ス。而シテ何等ノ約束ナキトキハ契約ヲ爲シタル地ノ法規又ハ履行

地ノ法規ヲ以テ適用法規トス。例ヘハ若シ香港ニ於テ契約ヲ結ヒタルトキハ英帝國ノ法規ヲ適用スヘシ。租界ニ於テ契約ヲ結ヒタル場合ニ於テ當事者ノ希望ヲ推定シ得サルトキハ領事裁判所ハ商事慣習及條理ヲ適用スヘシ。破産事件ニ付テハ原則トシテ訴訟ノ行ハルル國ノ法規カ破産者ノ他位及破産ノ結果ヲ規律スヘキモノトス。訴訟手續ヲ定ムル規則ハ常ニ訴訟ノ行ハルル國ノ法規ナリ

六 伊太利國

千八百六十六年天津ニ於テ支那國伊太利國間ニ締結セラレタル條約ニ於テ伊太利國ハ其ノ人又ハ物ノ何レニ關スルヲ問ハス支那國ニ居住セル伊太利國臣民間ノ一切ノ權利竝伊太利國臣民ヲ被告トスル伊太利國臣民及外國人間ノ爭ニ付自國官憲ノ完全ナル裁判權ヲ留保シ(第十五條)刑事ノ事ノ事件ニ於テモ伊太利國臣民ニ對スル裁判權ハ伊太利國官憲ニ之ヲ留保セリ(第十六條)。

同條約第十七條ハ更ニ支那人伊太利國臣民間ノ民事訴訟ニ付一種ノ混合裁判ヲ規定シタリト雖支

那國ハ支那人ヲ原告トスル民事事件ノ裁判ニ付外國官憲ト協力スルノ權利ヲ諸外國トノ他ノ條約ニ於テ拋棄シタルニ依リ伊太利國ハ同條約第五十四條ニ依リ當然此ノ種ノ民事訴訟ニ於テ自國民ニ對シ完全ナル裁判權ヲ取得シタリ。右ニ對シテハ支那國政府ハ今尙異論ヲ唱ヘ居レリ。

支那國ニ於ケル裁判權行使ニ關シテハ特別ナル法規ナシ。其ノ之ヲ必要トセサリシハ「伊太利國領事法」及其ノ附則カ該條約調印當時既ニ效力ヲ有シ必要ナル詳細ノ規定ヲ有シタルニ依ルモノトス。

右ノ法律ニ依レハ裁判權ハ事件ノ性質及輕重ニ從ヒ領事自身又ハ各領事館ニ附置セル領事裁判所之ヲ行フモノトス。其ノ管轄ハ夫々領事館管轄區域ヲ其ノ範圍トスルモノニシテ右區域ハ現在支那國ニ於テハ左ノ五ナリ。

上海(總領事館) 江蘇、安徽、山東、浙江及福建省

漢口(領事館) 湖北、江西、河南、湖南、四川、陝西及甘肅省

天津(領事館)

直隸及山西省

八二

哈爾濱(領事館)

滿洲三省

廣東(總領事館)

廣東、廣西、貴州、雲南省

上ニ述ヘタルカ如ク領事又ハ其ノ代理若ハ其ノ派遣者ハ單獨判事トシテ裁判スルコトヲ得。而シテ領事又ハ其ノ代理若ハ其ノ派遣者ハ領事裁判所ノ裁判長ト爲ル。領事裁判所ハ裁判長及二名ノ會審員ヨリ成リ會審員ハ命令ニ依リ領事ノ毎年任命スル裁判官中ヨリ之ヲ選任ス。裁判官ハ必スシモ伊太利國臣民タルコトヲ要セス(領事法第六十九條)ト雖實際上外國人ヲ任命スルコト極メテ稀ナリ。而シテ領事館管轄區域内居住ノ伊太利國臣民ノ身分、素行及資格ヲ充分ニ調査ノ上適當ナル者ヲ裁判官ニ選任スルモノトス。各特殊事件ノ會審員ノ選定ニ當リテハ事件ニ關スル本人ノ特別ノ能力ニ考慮ヲ拂ヒ且本人ト訴訟當事者トノ現在ノ利害關係ヲモ精査ス。何等カノ理由又ハ原因アリテ裁判官三名ヨリ成ル法廷ヲ構成スルコト不可能ナルカ又ハ之ヲ得策

トセサルトキハ領事ハ之ニ代リテ單獨ニ裁判ヲ爲シ其ノ事件調書ニ右ノ理由ヲ掲記ス。

副領事(副領事ヲ置カサル場合ニハ領事ノ指名セルモノ)ハ法廷ノ書記ノ職務ヲ行フ。

辯護士及訴訟代理人ニ於テ訴訟當事者ノ代リニ出廷セントスルトキハ領事ニ書面ヲ以テ之ニ申請スルコトヲ要シ領事ハ「領事命令」ヲ以テ之ヲ許可シ又ハ之ヲ拒絕ス。其ノ拒絕ヲ受ケタルモノハ外務大臣ニ異議ヲ申立ツルコトヲ得。

領事又ハ領事裁判所ノ裁判ハ領事館管轄區域内ニ於テハ領事自ラ之ヲ執行シ他ノ領事館管轄區域(治外法權ノ享有セララルル)、伊太利王國又ハ伊太利國殖民地ニ於テハ更ニ何等ノ手續ヲ要セスシテ權限アル官憲ニ於テ之ヲ執行ス。

非訟事件ニ於ケル領事及領事裁判所ノ各權限

伊太利國領事法第四節ハ非訟事件ニ付規定ス。領事ハ右法律ニ依リテ非訟事件ニ關スル裁判權ノ行使ニ關スル事項ニ付伊太利國ニ於ケル「ブレトール」即チ第一審裁判所長ト同等ノ權限ヲ有

ス。第一審裁判所ノ管轄ニ屬スル事件ハ領事裁判所之ヲ管轄ス。

右ノ權限ニ對シテハ一ノ制限アリ。即チ伊太利王國內ニ開廷スル裁判官憲ノミ之ヲ許可スルヲ得ヘキ養子若ハ私生子認知又ハ伊太利王國內ニ在ル不動産取引ニ關スル命令及其ノ他ノ行爲ハ王國ノ裁判機關ニノミ保有セララルモノトス。

判決ハ合議ニ依リテ之ヲ言渡ス。判決、決定又ハ命令ニ對シテハ伊太利國ノ法規ニ於テ上訴ヲ認ムル一切ノ事件ニ付「アンコナ」控訴院ニ上訴ヲ爲スコトヲ得。但シ判決ハ伊太利國ノ法規ニ於テ假執行ニ付明文ノ規定ナキ場合ト雖領事又ハ領事裁判所ノ特別命令ニ依リ上級審ノ判決アル以前ニ於テ之ヲ執行スルコトヲ得。

民事事件ニ關スル裁判

單獨判事タル領事ハ伊太利國船舶ノ船員及船長間ノ俸給、給與、食費等ニ關スル一切ノ係争ヲ裁判ス。右領事ノ判決ニ對シテハ上訴ヲ許サス。伊太利國臣民間又ハ伊太利國臣民ヲ被告トスル民事

又ハ商事ノ係争ハ其ノ價額五百「リーラ」ヲ超過セサルトキハ單獨判事タル領事之ヲ裁判シ其他ノ場合ニハ領事裁判所之ヲ裁判ス。

原則トシテ伊太利國ノ法律ヲ以テ適用法規トス。然レトモ商事事件ニ在リテハ地方的慣習及商慣習ノミナラス外國法ヲモ參酌スルコトヲ要ス。

領事裁判所ノ訴訟手續ハ王國內ノ裁判所ニ於テ準據スヘキ普通ノ手續ヨリモ幾分簡單ナリ。該訴訟手續ハ大略領事法第八十條乃至第一百十條及領事規則第二百十三條乃至第二百四十八條ノ定ムル所ノ如シ。

民事事件ノ上訴

單獨判事タル領事ノ判決又ハ千五百「リーラ」ヲ超エサル價額ノ事件ニ關スル領事裁判所ノ判決ニ對シテハ上訴ヲ許サス。他ノ一切ノ事件ニ付テハ「アンコナ」控訴院ニ再審ノ申立ヲ爲スコトヲ得。領事又ハ領事裁判所ノ判決ニ不服ナル當事者ハ右判決ノ言渡又ハ通告ノ日ヨリ十日以内ニ領事館

ニ上訴ノ通告ヲ爲シ正式ノ上訴ヲ其ノ日ヨリ一年以内ニ「アンコナ」控訴院ニ提起スヘキモノトス。

刑事事件ニ關スル裁判

伊太利國領事法ハ刑事ニ付左ノ如ク管轄ヲ定メタリ。

警察犯

領事館管轄區域又ハ伊國船舶内ノ伊太利國臣民ノ犯シタルモノハ單獨判事タル領

事、其ノ代理又ハ其ノ派遣シタル者

輕罪

領事裁判所

重罪

「アンコナ」巡回裁判所

千八百九十年以來效力ヲ有スル伊太利國刑法ニ依レハ一切ノ刑事犯ハ輕罪ト警察犯ノ二種ニ類別セラル。故ニ領事法公布ノ當時尙效力ヲ存シタル「サルヂニア」刑法中ニ現ルル重罪ナル文句ハ終身懲役、私權ノ永久喪失及最短期三年ノ懲役又ハ拘留ノ刑ヲ課セラルヘキ一切ノ犯罪ニ互ル

モノトス。

領事館ニハ檢事ヲ配置セス。檢事ノ職務ハ領事之ヲ行フ。(領事法第百十五條)

領事ハ豫審ヲ必要トスル一切ノ事件ニ付豫審判事ノ職務ヲ行フ。領事裁判所ハ合議廷トシテ豫審判事ノ報告ニ基ツキ更ニ補充的ニ取調ヲ爲スノ必要ナシト認メタルトキハ被告人ヲ放免シ又ハ之ヲ領事又ハ領事裁判所ノ公判ニ附ス。重罪ノ場合ニハ調書ヲ「アンコナ」控訴院附屬ノ檢事長ニ移送ス。同檢事長ハ事情ニ依リ被告人ヲ巡回裁判所ノ審理ニ附シ又ハ不起訴トス。伊太利國刑法ヲ以テ適用法規トス。外國租界ニ居住スル伊太利國臣民ニハ各市政規則ノ適用アリ。

刑事事件ノ上訴

領事ノ言渡シタル判決ニ對シテハ上訴ヲ許サス。右判決ハ最高裁判所ニ依リテモ再審セララルコ

トナシ。(領事法第百三十八條)

領事裁判所ノ判決シタル事件ニ付テハ判決ヲ受ケタル者又ハ「アンコナ」控訴院ノ檢事長若ハ千五百「ローラ」ヲ超ユル損害賠償ノ訴訟ヲ提起セル被害者ヨリ申請アリタル場合ニ限リ「アンコナ」控訴院ニ於テ之ヲ再審ス。

上訴ノ申請ハ判決ヲ言渡シタル日ヨリ五日以内又ハ判決言渡ノ際當事者出席ナカリシトキハ判決ノ通知アリタル日ヨリ十日以内ニ之ヲ爲スヘキモノトス。

領事ノ行政權

領事法第七十二條ニ依リ領事ハ警察權ヲ有ス。同條ニ依レハ領事ハ必要ナル事情アリト認ムルトキハ條約及地方的慣習ニ適應スル限り領事館管轄區域内ニ居住スル伊太利國臣民ニ適用スヘキ警察法規ヲ制定スルコトヲ得。領事カ領事館管轄區域ニ於テ最高警察ノ職權ヲ以テ發布セル命令ニ從ハサル者ハ「適法ナル命令違反」ニ關スル伊太利國刑法ノ規定ニ從ヒ處罰セラル。

伊太利國臣民ノ行動カ地方公衆ノ公共ノ秩序ヲ亂スコトアルトキ又ハ風紀上又ハ政治上ノ理由ア

ルトキハ同人ハ之ヲ領事館管轄區域ヨリ追放スルコトヲ得。

七日 本 國

一 領事裁判所ノ構成ニ關スル規則

日本國政府ハ明治三十二年（千八百九十九年）領事官ノ職務ニ關スル法律ヲ公布シ支那國ニ在ル領事官ニ日本國臣民ヲ被告トスル民事刑事ノ訴訟事件及非訟事件ニ對スル裁判權ヲ附與シ且領事官ノ裁判ニ對スル第二審裁判所ヲ事件ノ性質ニ從ヒ長崎地方裁判所又ハ長崎控訴院ト爲シ同時ニ同年ノ「領事職務規則」ナル勅令ヲ以テ領事裁判ニ關スル基本原則ヲ定メタリ。其ノ後明治四十一年（千九百八年）滿洲ニ於ケル領事裁判ニ關スル法律ヲ以テ滿洲ニ於ケル領事官ノ裁判ニ對スル第二審ヲ關東廳高等法院ノ管轄ニ屬セシメ明治四十四年（千九百十一年）ノ間島ニ於ケル領事官ノ裁判ニ關スル法律ヲ以テ間島ニ於ケル領事官ノ裁判ニ對スル第二審ヲ朝鮮ノ覆審法院ノ管轄ト爲シ大正十年（千九百二十一年）ノ南部支那ニ於ケル領事裁判ニ關スル法律

ヲ以テ南部支那ニ於ケル領事官ノ裁判ニ對スル第二審ヲ臺灣總督府高等法院ノ管轄ト爲シタリ。

二 裁判所

支那國駐在領事官ハ第一審裁判所トシテ左ノ事件ニ付審理裁判ヲ爲ス權限ヲ有ス。

- 一 金額、價額ノ如何ニ拘ハラス一切ノ民事訴訟事件
- 二 破産事件
- 三 非訟事件

四 重罪ニ非サル犯罪ノ刑事訴訟事件

重罪即チ死刑又ハ無期若ハ最短期一年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ該ル犯罪事件ニ付テハ領事官ハ判決ヲ爲スノ權限ナシ。領事官ハ斯ル事件ニ付テハ豫審ヲ爲シタル上有罪ノ嫌疑アルトキハ事件ヲ其ノ領事官ノ所在ニ依リ中部支那ニ在リテハ長崎地方裁判所、滿洲ニ在リテハ關東廳地方法

院、間島ニ在リテハ朝鮮總督府清津地方法院、南部支那ニ在リテハ臺灣總督府臺北地方法院ノ

公判ニ附スルモノニシテ該事件ニ付テハ右ノ各裁判所ヲ以テ第一審裁判所トス。

又日本國法律ハ皇室及皇族ニ對スル危害及内亂罪ノ事件ニ付テハ之ヲ日本國領土内各地ノ最高裁判所ノ特別ノ管轄ニ屬セシムルヲ以テ該事件ハ各最高裁判所カ豫審竝ニ公判ノ審理ヲ行フ。領事官カ第一審トシテ爲シタル裁判及重罪事件ニ付爲シタル豫審ノ決定ニ對シテハ日本國領土内ニ於ケル之ニ相當スル第一審ノ裁判及豫審決定ト同様ノ審級及手續ニ依リ上訴ヲ爲スコトヲ許サル。領事官ノ裁判ニ對スル上訴管轄ノ系統ヲ表示スレハ左ノ如シ。

第一審 控 訴 上 告

中部支那ノ領事官(重罪ニ關シテハ長崎地方裁判所)	長崎控訴院	大審院
滿洲領事官(重罪ニ關シテハ關東廳地方法院)	關東廳高等法院覆審部	關東廳高等法院上告部
間島ノ領事官(重罪ニ關シテハ朝鮮清津地方法院)	京城覆審法院	朝鮮高等法院

南部支那ノ領事官(重罪ニ
關シテハ臺北地方法院)

臺灣高等法院覆審部

臺灣高等法院上告部

九二

支那國ニ於ケル日本國臣民ノ重罪事件ニ付領事官ノ豫審決定ニ基ツキ日本國本土内ノ普通裁判所ノ第一審トシテ爲シタル裁判ニ對スル上訴ハ右裁判所ノ爲ス一般重罪事件ノ裁判ト全然同一ノ取扱ヲ受ク。

三 裁判所ノ職員

支那國內ニハ領事館三十五アリ。領事館ノ長タル總領事又ハ領事ハ總テ裁判ヲ爲ス權限ヲ有ス。奉天、天津、上海、青島其ノ他訴訟事件比較的多ク其ノ性質複雑ナル地方ノ總領事館ニハ別ニ專ラ司法事務ニ從事スル領事又ハ副領事ヲ配置セリ。司法事務專任ノ領事又ハ副領事ハ日本國ニ於テ正式ノ裁判官トシテ現任中ノ者ヨリ任用セラル。

總領事、領事又ハ副領事ハ總テ單獨ニテ審理判決ヲ行フ。領事裁判所ニ於ケル檢事ノ事務ハ領事館外務書記生又ハ警察官之ヲ行ヒ裁判所書記ノ事務ハ領事館勤務ノ外務書記生之ヲ行フ。司

法事務ニ從事スル外務書記生ハ概ネ國內ニ於テ裁判所書記タリシ經驗アル者ヨリ任用セラル。

四 裁判手續

日本國ノ領事裁判ハ原則トシテ日本國本土ニ於ケル訴訟手續ニ依ルモノニシテ土地ノ狀況其ノ他ノ事情ニ依リ之ニ據ルコト能ハサル場合ニ限り特例ヲ認メラル。

領事官ノ管轄ニ屬スル刑事ノ事件ニ關シ國交上必要アルトキハ外務大臣ハ當該領事ニ之ヲ管轄スヘカラサルコト及犯人ヲ日本國領土内ノ監獄ニ移送スヘキコトヲ命シ同時ニ上級裁判所ノ系統及犯罪ノ輕重ニ從ヒ之ヲ長崎地方法院所、關東廳地方法院、朝鮮總督府地方法院又ハ臺灣總督府地方法院ヲシテ處理セシムル爲必要ナル措置ヲ司法大臣ニ要求スルコトヲ得。

五 適用法規

日本國本土ニ於テ實施セラレタル一切ノ民事、商事及刑事ノ法規ハ原則トシテ領事裁判ニモ適用アリ但シ性質上領事裁判ニ於テ實施シ難キ規定ニ對シテハ勅令又ハ外務省令ヲ以テ之ニ例外

規定ヲ設ク。領事官モ亦法律ノ委任ニ依リ行政特ニ警察上ノ取締ニ關シ必要ナル規則ヲ設クルコトヲ得。領事館令ニハ五十圓以下ノ罰金、料料又ハ拘留ノ罰則ヲ附スルコトヲ得。

六 裁判ノ執行

民事及商事ノ裁判ノ執行ハ領事館ノ警察官カ執達吏ト爲リテ之ヲ行フ。

刑事裁判ノ執行ニ關シテハ短期ノ體刑ハ各總領事館又ハ領事館ニ附置スル監獄ニ於テ之ヲ執行スレトモ右監獄ハ小規模ナルニ依リ長期囚ハ原則トシテ日本國領土内ノ監獄ニ送致シテ之ヲ執行セシム但シ罰金刑ハ檢事代理ノ命令ニ基ツキ領事館ノ警察官執達吏トシテ之ヲ取立ツルモノトス。

八 和 蘭 國

和蘭國ハ天津ニ於テ署名セル千八百六十三年十月六日ノ條約ニ依リ支那國在任自國臣民ニ治外法權ノ地位ヲ享有セシメタリ。

領事館職員ニ領事裁判權行使ノ爲必要ナル法律上ノ權限ヲ附與スル目的ヲ以テ和蘭國議會ハ千八百七十一年七月二十五日「領事法」ノ名ヲ有スル一法律ヲ制定シタリ。右法律ハ民事事預ノ登記及領事裁判ニ關スル領事館職員ノ權限ヲ規定ス。同法律ハ數次修正ヲ受ケタルカ其ノ最近ノ修正ハ千九百十八年二月二十三日附ナリ。

領事法第一條ハ勅令(國務院ノ諮詢ヲ經タル女皇ノ一般命令)ニ依リ特ニ指定セラレタル領事館職員ノミカ其ノ管轄區域ニ於テ裁判權ヲ行使スルノ權限ヲ有スヘキコトヲ定ム。千九百十七年三月二十八日修正セラレタル千八百七十二年九月十九日附ノ勅令ハ厦門、廣東、上海及天津在勤ノ領事館職員ノ上席者ニ支那國ニ於ケル裁判權ヲ行使スルノ權限ヲ附與シタリ。領事法第二十條ニ依レハ前記四管轄區域内ニ於ケル裁判權ハ單獨判事タル領事又ハ領事裁判所ニ之ヲ委任ス。領事裁判所ハ裁判長タル領事、和蘭國公使ノ任命スル二名ノ會審員ヲ以テ之ヲ構成ス。民事及刑事ノ事件ニ付テハ和蘭國法規ヲ以テ其ノ適用法規トス。商事事件ニ付テハ領事館ノ管轄區域又ハ取引ノ行ハ

レタル地方ニ於テ效力アル永年ノ商慣習ヲモ之ヲ參酌スヘキモノトス。訴訟手續ニ關シテハ民事及刑事共ニ多少ノ例外ヲ除キ和蘭國法規ニ準據ス。但シ法廷ノ構成ハ極メテ簡單ナリ。支那國駐在領事ハ公使ノ認可ヲ經テ警察法規ヲ制定スルコトヲ得。右規則ニ違反シタル者ハ六日以下ノ拘留又ハ二十五「フロリン」以下ノ罰金若ハ其ノ兩者ヲ以テ之ヲ處罰スルコトヲ得。千九百十三年三月ノ法律ニ依レハ外交官及領事官ハ特定ノ場合ニ於テ更ニ重要ナル規則ヲ制定スルノ權限アリ但シ右規則ハ公布前外務大臣ノ許可ヲ受クヘキモノトス。右ノ規則ニ違反シタル者ハ六箇月以下ノ拘留又ハ六百「フロリン」以下ノ罰金ヲ以テ之ヲ處罰スルコトヲ得。

民事事件ニ在リテハ和蘭國臣民ニ對スル七十五「フロリン」以下ノ一切ノ請求ハ領事官單獨ニ且終審トシテ之ヲ裁判ス。和蘭國內ニ於テ平和判事及區裁判所長ニ委任セララルル民事事件ニ關スル一切ノ裁判外ノ事務モ亦領事之ヲ執行ス。

刑事事件ニ在リテハ領事官ハ六日以下ノ拘留又ハ六十「フロリン」以下ノ罰金若ハ其ノ兩者ニ處

セララルヘキ犯罪ヲ單獨ニ且終審トシテ裁判ス。

領事裁判所ハ和蘭國臣民ニ對スル七十五「フロリン」ヲ超ユル價額ノ一切ノ民事訴訟ヲ裁判ス。六百「フロリン」以下ノ訴訟ニ付テハ其ノ判決ヲ以テ終審トシ右金額ヲ超過スル價額ノ訴訟ニ付テハ在「バタビア」裁判所ニ上訴スルコトヲ得。領事裁判所ハ和蘭國ニ於テ區裁判所ニ委任セララル後見、補佐、婚姻等ノ事項破産及支拂延滞ニ關係アル事務ヲ執行スルノ權限アリ。

刑事事件ニ在リテハ領事裁判所ハ六日ヲ超ユル拘留又ハ六十「フロリン」ヲ超ユル罰金ニ處セララルヘキ一切ノ犯罪ヲ終審トシテ裁判ス。領事裁判所ハ又四年以下ノ懲役ニ處セララルヘキ一切ノ犯罪ヲ第一審裁判所トシテ裁判ス但シ之ニ對シテハ「バタビア」裁判所ニ上訴スルコトヲ得。領事裁判所ハ其ノ管轄ノ下ニ在ル國民ヲ支那國ヨリ追放スルコトヲ得。四年以上ノ懲役ヲ最高ノ刑罰トスル事件ハ「バタビア」裁判所ヲ以テ其ノ第一審裁判所トス。

刑事事件ニ關スル領事及領事裁判所ノ判決ヲ除キ領事法ニ依リ言渡サレタル一切ノ終局判決及決

定ニ對シテハ蘭領印度高等法院ニ上訴ヲ提起スルコトヲ得。〔「バタビア」裁判所ノ領事法ニ依リ爲シタル刑事事件ニ關スル判決ニ對シテハ其ノ第一審裁判所トシテ爲シタルト控訴裁判所トシテ爲シタルトヲ問ハス同高等法院ニ上訴ヲ提起スルコトヲ得。

領事法ニ依リ言渡シタル判決及同法ニ依リ登記セラレタル事項ノ記録ハ和蘭王國並其ノ海外殖民地及屬領ノ全土ヲ通シテ有效ナルモノトス。

判決ハ外國ノ監獄ニ於テ之ヲ執行ス。六月以上ノ懲役ニ處セラレタル囚人ハ蘭領印度ニ送致シテ刑ノ執行ヲ受ケシムルコトヲ得。過去五年間（千九百二十年ヨリ千九百二十四年ニ至ル）ノ裁判統計ニ就テ見ルニ右ノ期間内ニ於テ厦門及廣東ノ區域ニ於テハ民事事ヲ通シ裁判事件一件モナシ。天津ノ區域ニ於テハ千九百二十四年ニ唯一件アリ。和蘭國臣民ノ大部分ノ居住スル上海ノ區域ニ於テハ領事裁判官ハ民事刑事ヲ通シ十二件、二十二件、十四件、二十四件及五十四件宛裁判ヲ行ヒタルモノナレトモ概ネ輕易ナル民事事件又ハ輕罪ノ事件ニシテ和蘭國臣民及他ノ外國人ニ

關係スルモノナリ。

九 諾 威 國

千九百六年三月二十九日ノ法律ハ支那國ニ於テ諾威國ノ行使スル裁判權ニ付規定ヲ設ク。此ノ法律ニ依レハ領事裁判所ハ後ニ述フル例外ノ場合ヲ除キ裁判長タル領事官ト二名ノ會審員トヲ以テ之ヲ構成ス。

上海駐在諾威國總領事ハ領事裁判官ナリ。從テ諾威國ニ於テ普通裁判所ノ判事ト同様ノ訓練ヲ經タル者ヲ右總領事ニ任命スヘキモノトス。會審員ハ事件毎ニ任命セラレ訓練ヲ經タル判事トハ異ルモ專任職員ニ非サル裁判所構成員ニシテ事件ニ應シ商業ニ經驗アル者、航海ノ智識アル者又ハ他ノ智識アル者ヲ以テ之ニ充ツ。

便宜上及本項ノ記載ヲ一層明瞭ナラシムル爲刑事及民事ヲ別々ニ分説スヘシ。

刑事事件

刑事事件ニ在リテハ本國ニ於テ刑事訴訟法ニ從ヒ檢事ノ執行スヘキ職務ヲモ領事之ヲ執行ス。罰金刑ニ處スヘキ事件ニ在リテハ領事ハ單獨ニ（會審員ナクシテ）裁判ヲ行フ。但シ二名ノ陪審員ヲ出席セシムルコトヲ要ス。同様ニ三月ノ懲役以下ノ刑ニ該ル事件ニ於テモ亦領事ハ會審員ノ出席ナクシテ裁判ヲ行フコトヲ得。但シ被告人カ會審員ノ出席ヲ求メサルコトニ同意セサル場合、此ノ限ニ在ラス。其ノ他ノ事件ニ付テハ二名ノ會審員領事ト同席ス。領事裁判所ハ三年ヲ超ユル刑罰ニ該ル事件ニ付テハ裁判權ナシ。刑罰三年ヲ超ユル事件ハ諾威國ノ裁判所ニ之ヲ移送ス。領事又ハ領事裁判所ノ判決ニ對スル上訴ハ諾威國大審院（在「オスロ」）ノ管轄トス。

民事事件

一切ノ民事訴訟及離婚訴訟ハ領事裁判所（領事及二名ノ會審員）之ヲ裁判ス。但シ係争物ノ價額カ二百「クローネ」（墨銀約百十弗）以下ナルトキハ領事單獨ニテ之ヲ裁判スルコトヲ得。上訴

領事裁判所ノ判決ニ對スル上訴ハ諾威國大審院（在「オスロ」）ノ管轄トス。尤モ一定ノ價額ヲ超エサル事件ノ上訴ハ「オスロ」ノ市裁判所ノ管轄トス。訴訟物タル請求ノ價額二百「クローネ」（墨銀百十弗）ヲ超エサル場合ニハ上訴ヲ許サス。

領事裁判所ノ適用スル法規ハ諾威國ノ法規ナリ。諾威國ノ刑法ニ依レハ市政規則違反モ亦右刑法ニ依リテ處罰セララルコトアリ。即チ例ヘハ上海工部局ノ交通規則違反ノ如キハ右ニ依リ處罰セララルモノトス。

諾威國領事裁判所ハ之ヲ上海ニ常設ス。領事ハ其ノ選擇ニ依リ上海外ニ於テモ裁判ヲ行フコトヲ得。又資格アリト認ムル他ノ者ニ委任シテ他ノ地方ニ於テ證人ヲ訊問シ又ハ其ノ他ノ裁判事務ヲ行ハシムルコトヲ得。尤モ右ノ者ハ判決ヲ言渡スコトヲ得ス。

十 葡萄牙國

支那國在住葡萄牙國臣民ニ對スル裁判權ハ千八百八十七年支那國葡萄牙國間ニ締結セラレタル條

約ノ規定スル所ナリ。

右裁判權即チ民事、刑事及商事ノ裁判權ハ領事及領事裁判所之ヲ行使ス。條約港駐在ノ領事官ハ刑事事件ニ在リテハ單獨ニテ民事及商事事件ニ在リテハ會審員ト共同シテ又ハ其ノ出席ナクシテ右裁判權ヲ行使スルモノトス。

一切ノ事件ニ付葡萄牙國ノ法規ヲ以テ其ノ適用法規トス。但シ外交上ノ慣例トナレルモノモ亦之ヲ參酌ス。

民事及商事ノ裁判

一切ノ民事及商事ニ關スル領事裁判權ハ現行條約ノ定ムル範圍内ニ於テ且「領事規則」ノ定ムル處ニ依リテ之ヲ行使ス。治外法權ノ行使ニ關スル細目ハ領事規則第五百二十三條乃至第六百二十四條之ヲ規定ス。調停ヲ試ミタル後ニ非レハ領事又ハ領事裁判所（事件ニ依リ）ニ訴訟ヲ提起スルヲ得ス。副領事ハ平和判事トシテ一切ノ調停ニ關與ス。價額二百「エスクドス」〔四百弗〕以下ノ

一切ノ事件ニ在リテハ領事ハ單獨ニテ裁判ヲ行ヒ其ノ判決ヲ以テ終審トス。價額二百「エスクドス」ヲ超ユル其ノ他ノ事件ハ領事裁判所之ヲ管轄ス。領事裁判所ハ裁判長タル領事及三名ノ會審員ヲ以テ之ヲ構成ス。領事ノ單獨裁判ノ手續及領事裁判所ニ於ケル訴訟手續ハ彼此一様ナリ。領事裁判所ニ出席セル領事ハ其ノ判決ヲ言渡スニ先チ會審員ニ對シ事實ニ關スル必要ナル諸點ヲ提示スルコトヲ要ス。領事裁判所ノ判決ニ對シテハ葡萄牙印度ノ「ゴア」ニ於ケル高等法院ニ上訴ヲ提起スルコトヲ得。

刑事裁判

領事及領事裁判所ハ葡萄牙國臣民及支那國領海内ニ在ル葡萄牙國商船ニ對シ裁判權ヲ行使ス。領事ハ左ノ刑罰ニ該當スル一切ノ事件ニ付單獨ニ裁判ヲ行フ。

戒告

五年ヲ超エサル期間ノ公權停止

最高千「エスクドス」(二千墨弗)ノ罰金

六月以下ノ期間ノ追放

六月以下ノ懲役

領事裁判所ハ刑法第五十五條、第五十六條及第五十七條ニ列舉セルモノヲ除キ上ニ列舉スルヨリモ重キ刑罰ニ該當スル一切ノ事件ヲ審問ス。刑法第五十五條乃至第五十七條ハ二年乃至八年ノ懲役、八年乃至二十五年ノ流刑又ハ葡萄牙本國ヨリノ追放若ハ西部亞弗利加ノ葡萄牙國殖民地ヘノ流刑ニ該ル罪ヲ規定ス。此ノ場合ニ於ケル領事官ノ職務ハ犯罪ノ證言及物的證據ヲ蒐集スルニ止マリ右證言及物的證據ハ之ヲ遲滯無ク「マカオ」ニ送致スヘキモノトス。葡萄牙國ノ法律ニハ死刑ヲ課スルノ規定ナシ。

「マカオ」ノ法院ニ於テ爲シタル判決ニ對シテハ「ゴア」ニ在ル高等法院ニ上訴スルコトヲ得。當事者ハ更ニ法律及訴訟手續ノ點ニ關シテハ「リスボン」ノ大審院ニ上告スルコトヲ得。大審院ノ

判決ハ之ヲ終審トス。

現行ノ主要ナル法律ヲ列記スレハ左ノ如シ。

民法

民事訴訟法

商法

商事訴訟法

刑法

刑事訴訟法

破産法

家族法及離婚法等(民法ニ對スル最近ノ追加及變更)

十一 西班牙國

支那國ニ於ケル西班牙國ノ領事裁判權ノ根據ハ千八百六十四年ノ支那國西班牙國間ノ條約第十二條、第十三條及第十四條中ニ存ス。支那國ニ於ケル西班牙國ノ領事裁判ニ關シテハ千八百五十四年十一月十八日ノ規則中ニ其ノ規定アリ。

領事裁判所ハ專任領事ヲ以テ之ヲ構成ス。領事其ノ裁判スル事件ニ付判決ヲ言渡サムトスルトキハ二十五歳以上ノ二名ノ西班牙國臣民又ハ之ヲ任命スル能ハサルトキハ名聲アル二名ノ外國人ヲ選任シ判決ニ對スル同意ヲ求ムルコトヲ要ス。若シ上記ノ二名ノ西班牙國臣民又ハ二名ノ外國人ヲ得ルコト能ハサルトキハ領事ハ單獨ニ判決ヲ下スコトヲ得。但シ判決ニ先チ右ノ事情ヲ開示スヘキモノトス。

適用法規ハ西班牙國法規ナリ。

民事事件ニ在リテハ訴訟物ノ價格支那國通貨百弗以下ナルトキハ領事裁判所ニ書面ニ依ル訴訟ノ申請ヲ爲スコトヲ得ス。輕微ナル事件ハ當事者ノ任命セル仲裁者ニ依リ之ヲ解決スヘキモノトス。

仲裁者ハ當事者ノ之ヲ選任セサルトキハ領事之ヲ任命ス。仲裁者間ニ意見一致セサルトキハ領事最後ノ決定ヲ爲ス。

西班牙國臣民ノ犯罪ニシテ兇器ヲ使用セス及流血ヲ見サリシモノハ被害者不服ノ申立ヲ爲ササル限り領事ニ於テ之ヲ簡易處分ニ附スヘク流血ヲ見又ハ兇器ヲ使用シタル犯罪及其ノ他ノ重罪又ハ輕罪ニ在リテハ領事ハ取調及判決ニ助力スヘキ二名ノ西班牙國臣民ト共ニ、右西班牙國臣民ナキトキハ名聲アル二名ノ外國人ト共ニ正式ノ裁判ニ附ス。

非訟事件ニ在リテハ領事ハ第一審裁判ノ判事タル資格ヲ以テ之ニ屬スルノ職務ヲ行フ。

西班牙國領事裁判所ノ權限ハ一切ノ西班牙國臣民ニ及フ。

領事ノ爲シタル判決ハ係争物ノ價額四百弗ヲ超エサル民事事件ニ在リテハ終審トシ右判決ハ動産ノ差押ニ依リ又ハ適法ナル限り身體ニ拘束ヲ加フルニ依リテ之ヲ執行ス。闕席判決ハ裁判所ノ命令ニ應セサル者ノ動産ニ對シテ之ヲ執行スルコトヲ得。

瑞典國ノ支那國ニ於ケル領事裁判權行使ノ權利ハ千八百四十七年三月二十日瑞典諾威國ヲ一方トシ支那國ヲ他方トシテ締結セラレタル條約ニ其ノ基礎ヲ有ス。右條約第二十一條ノ明文ヲ擧クレハ左ノ如シ。

「瑞典國又ハ諾威國ノ臣民ニ對スル犯罪行爲ニ關シ有罪トナレル清國臣民ハ清國官憲之ヲ逮捕シ清國法律ニ依リ之ヲ處罰スヘク、清國ニ於テ罪ヲ犯シタル瑞典國又ハ諾威國ノ臣民ハ領事又ハ同國ノ法律ニ依リ委任セラレタル官吏ニ於テ之ヲ審問處罰スヘシ。紛議及異議ヲ豫防スル爲裁判ハ雙方ニ於テ公正ニ之ヲ爲スヘシ。」

後千九百八年七月二日瑞典國ト支那國トノ間ニ一條約成リ瑞典國ニ特殊ノ權利ヲ附與シタリ。同條約第十條ハ左ノ如キ趣旨ノモノニシテ右特殊權利ニ付詳細ナル規定ヲ爲セルモノナリ。

「正當ナル權限アル瑞典國官憲ハ瑞典國臣民ニ對シテ瑞典國臣民又ハ外國人ノ提起シタル訴

訟ヲ清國官憲ノ干渉ヲ受クルコトナクシテ審理シ且裁決ス。

然レトモ清國ハ現ニ法律制度ヲ改正シツツアルヲ以テ他ノ一切ノ條約國カ其ノ治外法權ヲ拋棄スルコトニ同意スルトキハ瑞典國モ亦直ニ右條約國ノ如ク實行スルノ準備ヲ有スヘシ。

締約國ノ一方ノ臣民カ他ノ一方ノ臣民ニ對シ提起シタル民事上ノ訴訟ハ最惠國ノ人民ニ依リ提起セラレタル同様ノ訴訟ニ於テ據ルヘキ訴訟手續ニ從ヒ被告ニ對シ裁判權ヲ有スル官憲ニ依リ公平ニ審問決定セララルヘシ。

締約國ノ一方ノ臣民ニシテ犯罪又ハ違法行爲ノ爲告發セラレタルトキハ被告人ニ對シテ裁判權ヲ有スル官憲ニ依リ最惠國ノ同様ノ事件ノ訴訟手續ニ從ヒ裁判セラレ且有罪ト決定シタルトキハ自國ノ法令ニ從ヒ處罰セララルヘシ。」

領事裁判權ニ關スル現行ノ規定ハ千九百九年六月五日ノ瑞典國領事裁判法ノ包含スル所ニシテ同法律ハ千九百十年一月一日ノ實施ニ係ルモノナリ。

瑞典國裁判權ニ服スル者ハ瑞典國臣民、瑞典國ノ保護ノ下ニ在ル者(保護民)及瑞典國船舶内ニ於テ行ハレタル犯罪ニ關スル限リ瑞典國以外ノ他國國民トス。「保護民」ノ本來ノ語義ニ於テノ瑞典國ノ保護民ハ支那國內ニ在住スルコトナキヲ以テ右ノ法律ノ保護民ニ關スル事項ハ未タ適用セラレタルコトナシトス。

瑞典國法ノ適用ハ領事裁判權ニ關スル基本原則ナリ。而シテ之ニ所謂瑞典國法トハ一切ノ瑞典國內ニ實施セラレル法律及勅令ヲ指ス。但シ之ニ對シ明瞭ナル制限アリ。地方的事情ノ之ヲ容認スルコト及千九百九年六月五日及其ノ他ノ法規中ニ別異ノ規定ナキコト即チ之ナリ。

特ニ瑞典國內ニ於テノミ適用スヘキ法律及勅令ハ國王ノ裁可ヲ經ルニ非サレハ之レヲ國外ノ領事裁判ニ於テ適用スルコトヲ得ス。然レトモ今日迄斯クノ如キ裁可アリタルコトナシ。從テ例ヘハ瑞典國臣民ノ上海ニ於テ有スル不動産ニ付領事裁判所ノ爲シタル抵當證書ノ認證ハ之ヲ有效ト認ムヘキヤ否ヤ甚タ疑ハシトス。

在支領事裁判所ハ裁判長タル瑞典國總領事及右總領事ノ任命スル任期一年ノ二名ノ會審員ヲ以テ之ヲ構成ス。會審員ハ今日迄常ニ上海居住ノ瑞典國臣民中ヨリ選任セラレタリ。但シ一定ノ輕微ナル事件即チ價額三百「クローネル」(百五十墨弗)以下ノ民事訴訟及罰金又ハ損害賠償請求額カ三百「クローネル」以下ナル刑事訴訟事件ニ在リテハ領事裁判所ノ裁判長ハ領事裁判官ノ資格ニ於テ單獨ニ之ヲ審問判決スルコトヲ得。右ノ手續ハ瑞典國ノ地方裁判所及初級裁判所ニ於テ裁判スル請求及財産目錄ノ作成、死亡者ノ遺產管理、保護者又ハ監理者ノ任命及解任並婚姻ノ登録及遺產ニ關スル遺言ノ證明等ノ事項ニ關シテモ適用アリ。領事ハ行政權ヲモ之ヲ有シ兼テ最高警察官タリ。而シテ自身又ハ特別ノ場合ニ於テ其ノ任命シタル代理者ハ一ノ執行官ナリトス。

支那國內ニ於ケル裁判組織ハ上述ノ如ク著シク簡略ニシテ瑞典國內ニ於テ多數ノ獨立セル司法及行政機關ニ分屬セシメラレタル職務ハ支那國內ニ於テハ一領事ニ集中セラレ。斯クノ如クナルカ故ニ瑞典國法規ノ規定ハ必スシモ之ヲ遵守シ難キコトアリ。或ル程度迄地方的事情ヲ參酌シ又「ア

ングロ、サクソン」ノ顯著ナル勢力ニ依リ共同租界内ニ成立スルニ至リタル支那ノ慣習（形式的ニモセヨ實質的ニモセヨ）及條理ヲモ之ヲ參酌セリ。

領事裁判所及領事ハ支那國內ノ如何ナル地方ニ於テモ其ノ職務ヲ執行スルコトヲ得。尤モ未タ上海總領事館以外ニ於テ法廷ヲ開キタルコトナク當事者ノ一方カ上海外ニ居住スル場合ニ於テモ事件ニ付充分ナル調査ヲ爲ス爲ニ法廷ヲ移スカ如キ必要ヲ生シタルコトナシ。

前掲ノ法律ニ依レハ領事ハ警察規則ヲ發布シ且之ニ對スル違反ヲ五百「クローネール」以下ノ罰金ニ處スルノ權アリ。但シ右規則制定ニ付テハ國王ノ裁可ヲ必要トス。領事裁判所及領事ノ判決及決定ニ對スル上訴ハ在「ストツクホルム」控訴院ノ管轄トス。右ノ控訴及該控訴院ヨリ高等法院ニ提起スヘキ上告ハ瑞典國ニ於ケル事件ノ一般訴訟手續ニ關スル法規ニ從フ。本國ヨリ隔在スルノ理由ニ依リ又ハ特殊ノ地方的状態ニ依リ該法規ニ加フルコトヲ適當トスル一定ノ輕易ナル方式ノ變更ニ關シテハ千九百九年六月五日ノ法律ニ其ノ規定アリ。

領事裁判所及領事ノ裁判ニ於テハ必要ナル場合ニハ瑞典語ノ代リニ英語及時ニハ獨逸語ヲ以テ用語トスルコトヲ得ヘク審理ノ記録モ亦或ル場合ニハ英語又ハ獨逸語ヲ以テ調製スルコトヲ得。英語ノ智識ナキ支那人カ當事者又ハ證人ナルトキハ瑞典國總領事館ノ支那語書記官ヲ通譯ニ任ス。瑞典國臣民カ警察ニ依リ拘禁セラレ領事ノ審理ニ附セラレタルトキハ原則トシテ領事單獨ニテ之ヲ裁判シ必要ノ場合ニ限り領事ト共ニ審問ニ參與スヘキ會審員ニ對シ電話ヲ以テ出席ヲ求ムルコトヲ得。呼出狀ノ送達ニ依リ開廷スル場合ニハ三日目ニ審問ヲ爲スヲ原則トスルモ被告ノ之ヲ承認シタル場合ニハ之ヨリモ早ク開廷スルコトアリ。第一回審問ノ際ニ於テ最終決定ニ到達スルト能ハサリシトキハ能フ限りノ短キ期間ヲ限リテ之ヲ延期スルコトアリ。右期間ハ如何ナル場合ニ於テモ裁判所ニ於テ當事者ヨリ更ニ證據ヲ提出スル爲ニ要求シテ差支ナシト認ムル期間ヨリモ長キコトヲ得サルモノトス。瑞典國ノ領事裁判カ當事者ニ與フル他ノ特典ハ其ノ支拂フヘキ手數料カ瑞典國ノ地方裁判所ニ於テ施行スル最低額ニ依リテ定メラルルコト之ナリ。即チ呼出狀ハ五

十仙、證明書ハ五十仙、記録ノ拔萃及寫ハ最初ノ一枚一弗、以下ノ頁ハ六十五仙ナリ。
支那國在住瑞典國臣民ノ數ハ比較的少數ニシテ最近二三年間ハ平均約七百名ナリ。其ノ大多數ハ
地方ニ在住スル宣教師、其ノ妻及子女ニシテ上海在住者ハ僅ニ百名ナリ。其ノ結果領事裁判ノ活動
範圍ハ限定セラレ殊ニ領事ニ於テ爭議ヲ法廷外ニテ解決スルコトニ努力シテヨリ一層右ノ範圍局
限セララルルニ至レリ。

過去四年間即チ千九百二十二年乃至千九百二十五年ノ記録ニ依リ領事裁判所又ハ領事ノ處理シタ
ル件數ヲ掲クレハ左ノ如シ。

正式訴訟記録中ニ記載セルモノ

金錢請求

四

婚姻ニ關スル事件及子ニ對スル親權

三

遺言及檢證及遺言ニ關スル證人訊問

二五

竊盜、小盜及橫領

四

毆打

三

賭博、猥褻行爲及酒類無免許販賣

三

泥酔及公安ヲ害スル行爲

三

交通規則其ノ他ノ警察規則違反

三

所謂小記録中ニ記載セララルルモノ

婚姻契約ニ關スルモノ

二

遺産目錄及遺産相續稅ニ關スルモノ

二三

保護者及監理者ニ關スルモノ

一二

第二部 支那國ノ法規並裁判及監獄ノ制度

一 法典編纂事業

五一 清朝末期ノ頃當時現行ノ法律及裁判制度ノ改善ヲ目的トスル一ノ改革運動支那國ニ發生セリ。此ノ運動ノ直接ノ原因ハ千九百二年英帝國竝千九百三年亞米利加合衆國及日本國ト約シテ支那國法規、其ノ運用ノ施設及其ノ他ノ條件ニシテ満足ナルニ至ラハ各治外法權ハ之ヲ撤去スヘシト爲シタルニ存ス。此ノ結果トシテ勅定法典編纂委員會（憲政編纂館）設立セラレ刑事、商事及訴訟手續（民事及刑事）諸法典ノ草案成レリ。此ノ委員會ノ作成セル新刑法法典（暫行新刑律）ハ千九百九年ヲ以テ公布セラレ次テ高等以下各級審判廳試辦章程及法院編制法ナルニ法律ノ下ニ新式裁判制度ノ創設ヲ見タリ。而シテ高等以下各級審判廳章程ハ千九百七年、法院編制法ハ千九百九年ノ公布ニ係ルモノトス。

五二 民國建設後前記委員會ニ關スル官制ハ兩度ニ互リテ修正セラレ且委員會ハ「修訂法律館」ト改稱セラレテ清朝以來ノ事業ヲ繼續完成スヘキ任務ヲ委任セラレタリ。此ノ委員會ノ主要ナル事業ハ司法部ト協力シテ地方的慣習及習俗ヲ審査シ斯クシテ得タル結果ニ依リ前清時代ニ於テ準備シタル法典ノ草案ヲ修正スルニ在リタリ。此ノ事業ハ其ノ範圍甚廣汎ナリシノミナラス古來ノ支那國慣習ト外國法ノ原則トヲ調和スルカ如キハ又容易ノ業ニ非サリシヲ以テ委員會ハ民國三年（千九百十四年）以後佛蘭西人及日本人顧問ノ援助ノ下ニ此ノ事業ニ從事スルニ至レリ。支那國裁判所ニ於テ適用スル一切ノ法典及多數ノ法規類ハ此ノ委員會ノ作成シタルモノニシテ未公布ノ數多ノ法典草案モ亦同様ナリ。

二 憲法

五三 支那國カ千九百十二年共和制採用ト共ニ支那國法規ノ審議ヲ爲シ先ツ第一ニ憲法ヲ考慮セリ。之レ蓋シ右憲法ハ政府ノ形體ノミナラス又法律及裁判ニ關スル諸般ノ事項ヲ規定スヘキモ

ノナルニ依ル。然レトモ民國創設以後ニ於テ臨時約法、修正約法及千九百二十三年ノ憲法ノ三箇ノ憲法時ヲ異ニシテ順次ニ實施且廢止セララルアリ且又千九百二十三年ノ憲法カ千九百二十四年十月ヨリ十一月迄存在セル臨時政府ニ依リテ廢止セララルアリテ現在ニ於テハ憲法ハ其ノ存否稍疑ハシキ状態ニ在リ。事情斯ノ如クナリト雖法律ハ必ラス憲法ニ基キテ其ノ效力ヲ有スヘキモノタル一方前掲ノ諸憲法モ亦支那國民ノ權利義務及司法權獨立ニ付規定ヲ設ケ之ヲ保障シツツアルニ依リ茲ニ是等ノ諸點ニ特別ノ關係ヲ有スル主要ナル規定ヲ簡單ニ記述スヘシ。

(一) 臨時約法

五四 臨時約法ハ千九百十二年ノ臨時國民會議ニ依リ制定セラレ千九百十二年五月十五日袁世凱ノ大總統令ニ依リテ公布セラレタルモノナリ。其ノ臨時ナル文字ヲ冠スルハ正式憲法ノ豫期セラレ且約法ノ第五十四條ニ於テ正式憲法ニ關スル規定ヲ有スルニ依ルモノナリ。此ノ憲法ハ(第二章第五條乃至第十五條ヲ以テ)支那國民カ政府ニ對シテ有スヘキ權利及之ニ對シテ負フ

ヘキ義務ニ付規定ス。是等ノ規定ハ其ノ一般的性質諸外國ノ憲法ト同様ニシテ且法律ノ正當ナル手續ニ據ラスシテ逮捕及沒收ニ依リ身體及財産ノ自由ヲ侵サルルコトナカルヘキ旨ヲ定ムル一般的保障ヲモ包含ス。第三章第十九條第一項ハ又議會ニ依ル法律ノ制定ニ付規定シ第四章第三十條ハ斯ノ如クニシテ制定セラレタル法規ハ大總統ニ依リテ宣布公布セララルヘキコトヲ規定ス。又第三十一條ニ於テハ大總統ハ法律ノ委任ニ依リ法規命令ヲ制定シ得ヘキコトヲ規定ス。此ノ憲法ノ第五十一條及第五十二條ハ更ニ司法權ノ獨立及其ノ外部ヨリノ干涉ヲ受ケサルコトニ付規定ヲ設ク。之ヲ要スルニ臨時約法ハ支那國民ノ固有ノ權利義務及議會ニ依ル法律ノ制定並司法權ノ獨立ニ付規定スルモノトス。

(二) 修正約法

五五 修正約法ハ千九百十四年五月一日大總統袁世凱ニ依リ宣布セラレ千九百十六年六月彼ノ死スル迄二年間繼續シテ有效ナリシモノナリ。此ノ憲法ハ議會ノ制定シタルモノニ非ス。從テ其

ノ程度ニ於テ臨時約法第五十四條ニ違背スル所アリ。支那國民ノ權利義務及司法權ノ獨立ニ關スル修正約法ノ規定ハ臨時約法中ノ規定ト實質的ニ同一ナリ。法律ノ制定及公布ニ關スル規定モ亦同様ナレトモ公安ヲ増進スル爲緊急命令ヲ公布スルノ附隨的權力ヲ大總統ニ附與シタル點ヲ異ニス。但シ緊急命令ハ次ノ會期ニ於テ議會ニ提出シ其ノ承認ヲ受クヘキモノトセラル。

(三) 千九百二十三年ノ憲法

五六 千九百十六年六月二十九日黎元洪ハ臨時約法ヲ回復シ之ヲ實施セシメタルカ國會ハ千九百二十三年十月十日ニ至リ新ラシキ憲法ヲ制定シタリ。然レトモ同憲法ハ其ノ後一年ニシテ廢棄セラレタリ。同憲法ニハ人民ノ權利義務ニ關シ注目スヘキ唯一ノ重要ナル改正アリ即チ第六條ニ於テ人民ニシテ逮捕セラレタルトキハ法律ノ規定ニ基キ裁判所ニ對シテ人身保護狀(ヘービ・アス・コーパス)ノ發給ヲ求ムルコトヲ得ト爲シタルコトナリ。同憲法ハ中央政府及各省ノ法規ノ制定ニ關シ以前ノ二個ノ憲法ト比較シ甚タ特色アル諸規定ヲ包含スレトモ議會ニ依ル法

律ノ制定及大總統ニ依ル法規ノ公布ニ關スル根本原則ハ彼此同一ナリ。司法權ノ獨立モ亦同憲法之ヲ規定セリ。

(四) 千九百二十四年十月以後ノ憲法ノ狀況

五七 千九百二十四年十月ヨリ十一月ニ至ル間ニ於テ臨時政府成立シ臨時「執政」ノ統制ニ服セリ。此ノ時ヨリシテ左ニ引照スル二箇ノ大總統令ノ拔萃ヨリ推知シ得ルカ如ク支那國憲法ノ狀態ハ愈々確定シ難キモノトナレリ。

右大總統令ノ一ハ千九百二十四年十一月四日附ニシテ其ノ二ハ千九百二十五年四月二十四日附ナリ。

「今次中華民國臨時政府設立ノ目的ハ人民ノ協力ニ依リ新方針ニ基キ政府組織ヲ改正シ且一般の改革ニ着手セムトスルニ在リ。此ノ任務ハ甚タ重要ニシテ各種ノ問題ハ關係アル總テノ者ノ協力ニ俟タサルヘカラス。従前ノ行政及司法上ノ法規及命令ニシテ臨時政府ノ組織ト矛

盾セサルモノ及命令ニ依リ取消サレサルモノハ總テ引續キ其ノ效力ヲ有ス。

「臨時政府ハ憲法ヲ作成スル爲及、其ノ實施ノ手續ノ詳細ヲ定ムル爲茲ニ國民代表會議ヲ召集ス。」

千九百二十六年四月十日臨時政府ハ消滅ニ歸シタリ。

(五) 憲法ト法律トノ關係

五八 千九百二十二年民國政府ノ建設セラレタル時ヨリ千九百二十四年十月ニ至ル迄ハ支那國ニ於ケル法規制定ノ手續ハ憲法上議會ノ行爲ニ依ルヘキモノトセラレタリ。三箇ノ憲法ハ用語及微細ナル點ニ於テ多少異ル所アルモ議會ヲ以テ唯一ノ立法機關トスルコト及大總統ノ權限ヲ法律ノ公布及執行ニ限定シタルコトニ於テ相一致セリ。然レトモ支那國ノ裁判所ノ適用スルモノトシテ委員會ニ提出セラレタル一切ノ法規中議會ニ依リテ制定又ハ承認セラレタルモノ甚少ナシ。是等ノ法規ハ大總統ノ命令又ハ司法部ノ命令ニ基ツクノミ。而モ此ノ兩者ハ孰レモ嚴格ニ云

ヘハ法規ヲ作成スル法律上若ハ憲法上何等ノ權限ヲモ有セサルモノニシテ前節五十六節ニ於テ指摘シタル如ク大總統袁世凱ノミカ修正約法ニ依リ議會ノ事後承認ヲ條件トスル緊急命令ノ制定權ヲ有シタルニ過キス。支那國ノ法規ハ斯ノ如ク大總統ノ命令及司法部ノ命令ニ基クモノナレトモ實際ニ於テハ之ニ拘泥スル所ナク支那國ノ裁判所之ヲ適用シツツアリ。司法上ノ見地ヨリスレハ諸法規ハ裁判所ニ於テ法律トシテ適用セラレツツアルカ如キモ是等ハ其ノ制定者即チ大總統及司法部ニ依リ何時ニテモ變更又ハ廢止セラレ得ヘキモノタリ。

三 法 規 (註)

(註) 以下ノ記述ニ於テ法規トハ北京中央政府ニ依リテ實施セラレタル各種ノ諸法規包含スルモノニシテ各省ノ官憲ニ依リテ隨時制定セラレタル法規(其ノ運用亦同シ)ヲ包含セス。委員ハ右法規ノ大部分ノ英譯及佛譯ノ配布ヲ受ケタルモ外國文中ニ多少ノ誤譯アルコトヲ發見セリ。但シ委員會ハ各場合ニ付之ヲ支那文ト對照スルコトヲ爲ササリキ。

(一) 刑事事件ニ關スル諸法規

(1) 暫行新刑律

五九 暫行新刑律ハ清朝時代ニ於テ千九百九年實施セラレ且多少修正ノ上千九百十二年四月大總統令ニ依リ民國ノ下ニ於テモ採用セラレタリ。此ノ法典ハ千九百十四年十二月二十四日ノ暫行新刑律補充條例ニ依リ補充セラレ支那國ノ基本的刑事法規ヲ成シ暫行ノ名ヲ附セラルルニ拘ラス約十五年間實施セラレタリ。但シ支那國政府ハ右法規ニ缺陷アリト爲シ未タ公布ニ至ラサルモ第二修正刑事草案ナルモノヲ起草セリ。右第二修正草案ハ其ノ第一部ニ於テ一層科學的ニシテ且貴重ナル諸規定ヲ包含スル外ニ第六十二條ニ於テ特ニ判事ハ刑罰ヲ量定スルニ當リ減刑ノ理由トナルヘキ多クノ事情ヲ酌量スヘシトノ規定ヲ設ケ且其ノ第四十一條ニ於テ刑罰ノ種類及範圍ヲ従前ヨリ更ニ自由ナルモノタラシメタリ。右草案ハ委員會カ其ノ會議中ニ於テ暫行新刑律ニ對シ加ヘタル批評ノ大部分ヲ充タスニ足ルモノナリ。

(2) 違警罰法

六〇 違警罰法ハ千九百十五年十一月七日大總統令ニ依リテ實施セラレ警察罰及他國ニ於テ自治團體ノ制定スル取締法規ノ違反ト認めラルヘキ罪ニ對スル刑罰ヲ規定スルモノニシテ九章ヨリ成ル。其ノ定ムル刑罰ヲ分チテ戒告、罰金、拘留、沒收、業務ノ停止及業務ノ閉鎖トス。罰金ハ十錢ヨリ十五弗ニ、拘留期間ハ一日ヨリ十五日ニ至ル但シ犯罪ノ競合スル場合ニハ三十弗若ハ三十日迄、累犯ノ場合ニハ二十二弗又ハ二十二日迄刑罰ヲ加重スルコトヲ得。同法違反者ノ裁判ハ警察法廷ニ於テ之ヲ行ヒ其ノ拘留ハ警察拘留場ニ於テ之ヲ執行ス。

六一 同法第十三條及其ノ他ノ規定ノ包含スル刑罰規定ハ拘留ニ關スル限り嚴格ニ過クルモノト認めラル。蓋シ行政上ノ救濟手段ヲ別トシ之ニ對シテハ事實點ニ付テモ法律點ニ付テモ司法裁判所ニ上訴スルノ途無キヲ以テナリ。更ニ第二十六條ハ特定ノ事情アル限り事件ヲ急速ニ警察法廷自身又ハ檢察官ヲシテ處理セシムルコトナク又審理中被告人ヲ保釋ニ依リ解放スルコトナ

ク警察官署ニ於テ現行犯ヲ逮捕拘留シ得ヘキコトヲ定ム。此ノ法規ヲ重大視スヘキ主タル理由ハ其ノ一般住民ノ日常生活ニ干渉シ及一般ニ小事件ト認メラルヘキ警察犯ニモ拘留ノ刑ヲ科スト云フ點ニ存ス。

(3) 嗎啡治罪法

六二 嗎啡治罪法ハ千九百二十年十二月三十一日大總統令ニ依リ實施セラレタルモノトス。「モルヒネ」及同様ナル癡醉劑又ハ其ノ注射管ヲ不法ニ製造又ハ販賣シタル者ヲ懲役又ハ罰金ニ處スヘキコトヲ定ムルモノニシテ十二條ヨリ成ル。第二修正刑律草案ノ第二章第二百六十九條乃至二百七十五條モ亦癡醉劑ニ關スル規定ナルニ依リ新刑法制定後ニ於テ此ノ二法律ノ規定ノ關係ヲ是正スルノ要アルヘシ。

(4) 陸軍刑事條例及海軍刑事條例

六三 陸軍刑事條例ハ當初千九百十五年三月十八日大總統令ヲ以テ實施セラレレ千九百十八年四月

二十六日同様ノ方法ニ依リ修正、千九百二十一年八月十七日再度修正セラレタルモノナリ。海軍刑事條例ハ千九百十六年四月七日大總統令ニ依リ實施セラレ且千九百十八年五月二十一日修正セラレタルモノナリ。是等陸海軍法規ハ現在支那國ニ於テ繼續的ニ廣汎ナル地域ニ互リテ内亂ノ進行シツツアルト兩條例ノ各第二條ニ於テ同法規ノ定ムル特定ノ犯罪ヲ犯シタル非軍人ヲ陸軍又ハ海軍ノ法廷ニ於テ審問スヘキ旨ヲ定ムルトノ二箇ノ理由ニ依リ相當重要ナル意義ヲ有スルモノトス。

(5) 懲治盜匪法

六四 懲治盜匪法ハ千九百十四年十一月二十七日大總統令ニ依リテ公布セラレタリ。同法ニ依レハ(イ)同法中ニ特記スル重罪ヲ犯シタル強盜、匪徒及叛徒ヲ死刑ニ處スヘキコトヲ(右死刑ノ宣告ハ銃殺ニ依リテ之ヲ執行スルコト及ハ)證據充分ナリトシテ被告人カ地方審判廳又ハ縣知事法廷ノ審理ヲ受ケ有罪ト決定セラレタル場合ト雖判決ノ執行ハ先ツ事件ヲ省長、又ハ其ノ事件カ京

師ニ起リタルトキハ司法部ニ報告シ其ノ認可ヲ受ケタル後ニ於テノミ之ヲ行フモノトス。陸軍軍隊ノ最高司令官ハ其ノ軍隊ノ駐屯スル地域ニ於テ生シタル上記ノ事件ヲ自ラ裁判スルコトヲ得。但シイ直經百里以内ニ司法事項ヲ處理スヘキ裁判所又ハ縣知事ナク且通信困難ナルカロ事情緊急ニシテ重大ナル變亂ヲ醸スノ虞アルカ又ハ犯罪人逃走スルノ虞アリト認メラレタル場合ニ限ル。判決ノ執行ハ先ツ事件ヲ軍隊ノ最高司令官ニ報告シ其ノ承認ヲ受ケタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス。上ニ述ヘタル一切ノ事件ニ付テハ再審ヲ命スルコトヲ得。千九百二十二年十二月ノ司法部令ハ此ノ法規ノ廢止ヲ宣布シタレトモ河南、湖北、江蘇ノ軍事官憲ハ中央政府ニ抗議シ此ノ法規ヲ尙引續キ實施スルヲ要スト爲シタル爲千九百二十三年四月三日附ノ大總統令ヲ以テ遂ニ前記ノ命令ヲ變更スルニ至レリ。本法ハ千九百二十年十月十三日附ノ大總統令ニ依レハ無領事裁判權國人民ニハ適用ナキモノトス。

(6) 其ノ他ノ刑事法規

六五

雜多ノ刑事法規中委員會ノ注目スル所ト爲リタルモノヲ列記スレハ左ノ如シ。

- (イ) 私鹽治罪法 千九百十四年十二月二十二日教令ニ依リテ公布セラレタルモノニシテ鹽務局ヨリ特別ノ許可ヲ受クルコトナクシテ鹽ヲ製造、販賣又ハ輸送シタル者ニ對スル刑罰ヲ規定ス。
- (ロ) 販賣罌粟種子罪刑令 千九百十四年十二月二十四日教令ニ依リ公布セラレタルモノニシテ罌粟種子ノ販賣ヲ刑罰ヲ以テ禁止スル一箇條ノ規定ナリ。
- (ハ) 禁止銷燬前清制錢罪刑令 千九百十六年一月二十日教令ニ依リテ公布セラレタルモノニシテ前清ノ銅錢ヲ溶解スルコトヲ刑罰ヲ以テ禁止スルコトヲ定ム。
- (ニ) 妨害内債信用懲罰令 千九百十四年十一月二十九日教令ニ依リテ公布セラレタルモノニシテ内國債法違反行爲ニ對スル刑罰ヲ規定ス。
- (ホ) 辨贖犯罪懲治暫行條例 千九百二十年九月十九日ノ教令ニ依リテ公布セラレタルモノニシ

テ中央又ハ各省ノ政府ノ認可ヲ受ケ慈善ノ目的ノ爲ニ集メタル金錢ヲ恣ニ横領セル者ニ對シ死刑若ハ懲役ヲ科スルコトヲ定ム。本條例ノ刑罰規定ハ横領罪ニ關スル刑律ノ規定ヨリモ嚴重ナリ。

(ヘ) 豫戒條例 千九百十四年三月三日ノ教令ヲ以テ公布セラレタルモノニシテ特定ノ所爲ヲ重ネテ行ハサルヘキコトニ關シ合法ナル戒告ヲ爲シタルニ拘ハラス之ニ從フコトヲ拒ミタル浮浪人及暴漢ニ對シ十錢ヨリ二十五弗ニ至ル罰金及一日ヨリ二十五日ニ至ル拘留ノ罰ヲ科スルノ權ヲ警察官署及縣知事ニ附與スルモノナリ。同法ハ一見不規律ナル者ヨリ公衆ヲ保護セムコトヲ目的トスルカ如キモ警察官署及縣知事ノ權限廣汎ニ過クルモノト認メラル。

(ト) 治安警察條例 千九百十四年三月二日ノ教令ニ依リテ制定セラレタルモノニシテ政治結社、政談及其他ノ集會、公衆運動並軍器爆發物所持ノ制限又ハ禁止ニ關ス。本法ニ違反シタル者ハ輕罪ニ在リテハ警察官署ニ依リ、重罪ニ在リテハ司法裁判所ニ依リ處罰セララルモノトス。

(チ) 千九百十四年七月十四日、千九百十四年十一月二十七日及千九百十七年八月二日附ノ三箇ノ教令 右教令ニ依レハ大總統ハ公安増進ノ爲、法律及秩序維持ノ爲並法律ヲ執行スル爲法規ヲ制定スルノ權限ヲ有ス。而シテ是等ノ法規ニハイノ一年半迄ノ懲役(ロ)二月迄ノ拘留(ハ)二百弗迄ノ罰金ノ罰則ヲ附スルコトヲ得。大總統ハ又省長、道尹、縣知事及警察官署ニ罰則附ノ同様ノ法規ヲ制定スルノ權限ヲ附與スルコトヲ得(實際ニ於テ之ヲ附與シタリ)。但シ右罰則ノ最高ハ警察廳ニ在リテハ一月ノ拘留又ハ六十弗ノ罰金、省長ニ在リテハ六月ノ懲役又ハ百弗ノ罰金以下トシ大總統ノ特別ノ許可アリタル場合ニ於テノミ之ヲ八月ノ懲役迄増加スルコトヲ得ルモノトス。仍テ縣知事及警察官署ハ其ノ欲スル所ニ從ヒ比較的重キ罰則ヲ有スル規則ヲ制定スルノ權限アリ而シテ或ル場合即チ刑罰カ罰金又ハ二月迄ノ拘留ナル場合ニ於テハ行政官憲ニ於テ之カ言渡ヲモ爲スモノトス。尙北京ニ於テ京師警察廳ノ上述ノ權限ハ六十日ノ

拘留迄擴張セラル。委員會ハ斯ノ如キ法規制定権カ如何ナル限度ニ於テ行使セラルルヤヲ詳ニスル所無シ。

(リ) 出版法 千九百十四年十二月四日ノ教令ニ依リ公布セラレタルモノニシテ出版物ノ檢閲權ヲ廣汎ナル範圍ニ於テ警察官署ニ委ネ出版物ノ寫ハ頒布前之ヲ警察官署ニ提出スヘシトシ又第十一條ニ於テ禁止スル出版物ハ警察官署ニ於テ第十三條ニ基キ之ヲ沒收スルコトヲ得ト爲セリ。同法ニハ百五十弗以下ノ罰金、拘留及五等有期懲役ノ罰則ヲ附ス。支那國委員ノ言フ所ニ依レハ同法ハ千九百二十六年一月二十九日ニ於テ廢止セラレタル趣ナリ。

(ヌ) 狩獵法 千九百十四年九月一日ノ教令ニ依リ公布セラレタルモノニシテ狩獵ニ關シ十四箇條ノ規定ヲ爲シ之ニ二十弗迄ノ罰則ヲ附シタリ。本法ニハ千九百二十一年九月十四日農商部令ヲ以テ公布セラレタル施行規則アリ。

(7) 刑事訴訟條例

六六 刑事訴訟條例ハ當初千九百二十一年十一月十四日ノ教令ニ依リ東三省(滿洲)ノ特別區域

内ノ露西亞人ニ關係アル事件ニ適用スルモノトシテ實施セラレ千九百二十二年一月六日ノ教令

ニ依リ千九百二十二年一月一日以後一切ノ支那國裁判所ニ於テ一切ノ刑事事件ニ適用セラルルコトトナレルモノナリ。本法ヲ補充スルモノトシテ別ニ二箇ノ手續規則アリ。其ノ一ハ千九百二十年十月二十八日司法部令ヲ以テ公布セラレタル規則(處刑命令暫行章程)ニシテ被告人ヲ命令ヲ以テ處刑スルコトヲ得ヘキ旨ヲ定ム。其ノ二ハ千九百二十二年一月二十五日教令ヲ以テ制定セラレタル規則(刑事簡易程序暫行條例)ニシテ簡易ノ刑事訴訟手續ヲ定ム。

六七 是等ノ規則ニ關シテハ逮捕及保釋ニ關スル規定ヲ一層自由寬容ナルモノニ修正スルノ要アリト認ム。罰金ニ該ルヘキ微罪及一定ノ住所ヲ有スル者ニ付殊ニ然リトス。猶六十日迄ノ拘留ニ該ル事件ニ於テ法律點ニ關スル場合ヲ除キ(刑事訴訟條例第四百三條)上訴ヲ許ササルコトモ亦嚴格ニ過クル嫌アリ。五等有期懲役ニ付テモ適用アル被告人ヲ命令ヲ以テ處刑スルコトニ

關スル規則ハ又假令七日以内ニ異議ヲ申立ツルノ權利ヲ認ムルトハ謂ヘ被告人ノ利益保障ノ見地ヨリシテ満足ナルモノト認め難シ。但シ支那國委員ノ説明ニ依レハ被告人ヲ命令ニ依リテ處刑スルコトハ簡易手續ニ關スル規則(刑事簡易程序暫行條例)公布後ハ其ノ必要ナキニ至レル趣ナリ。更ニ刑事訴訟條例ハ或ル國ニ於ケル如ク證據ニ關シ特別ナル規定ヲ設ケス判事ノ裁量ヲ以テ證據ノ證明力ヲ決定スル唯一ノ要素ト爲ス。然レトモ支那國ニ於テハ裁判上ノ先例未タ發達セス例ヘハ何ヲ以テ傳聞證據ト看做スヘキヤ等ニ關スル判事ノ裁量ヲ指導スルニ足ル程度ニ至ラサルモノノ如シ。

(8) 陸軍及海軍刑事訴訟條例

六八 陸軍刑事訴訟條例ハ千九百十五年三月二十五日教令ニ依リテ實施、千九百十八年四月十六日及千九百二十一年八月十七日同様ノ方法ニ依リ再度修正セラレタルモノニシテ海軍刑事訴訟條例ハ千九百十八年五月二十一日ノ教令ニ依リ實施セラレタルモノナリ。

六九 是等ノ規則ニ關聯シテ注意スヘキハ或ル國ニ於ケル如ク陸軍及海軍服役中ノ一切ノ者ニ付

陸海軍刑事條例違反ノ場合竝非軍事的刑事法規及違警罰法違背ノ場合ニ陸海軍軍法會議ノ管轄

ニ服セサルヘカラストスルノミナラス一般人民モ亦陸海軍ノ法規ニ違背スルノ罪ヲ犯シタルト

キハ前掲條例ノ各第二條ニ依リ陸海軍軍法會議ノ管轄ニ服スルモノトスルコト即チ之ナリ。

右條例各第二條ニ依レハ陸海軍軍法會議ノ審判ハ之ヲ公開セス。又千九百十五年三月二十六日ノ教令ニ依レハ陸海軍軍法會議ハ正規ノ刑罰ニ換ヘ追放刑又ハ六百打迄ノ棍刑ヲ言渡スコトヲ得。

(9) 縣知事審理訴訟暫行章程

七〇 縣知事法廷ニ於ケル審理ニ關スル暫行的ナル規則ハ初メ千九百十四年四月五日ノ教令ニ依リテ公布セラレ千九百二十一年一月十四日、同年三月一日及千九百二十三年三月二十九日同シク教令ニ依リ修正セラレタルモノナリ。是等ノ規則ハ縣内ニ於テ新式裁判所又ハ司法公署無キ

限リ其ノ縣知事ニ於テ民事及刑事ノ裁判管轄權ヲ有スルコトヲ定ム。縣ニ依リテハ此ノ規則ニ依リ司法權ヲ行使スル縣知事ハ審理員ニ依リテ補助セラレ又ハ縣知事一人ニテ之ヲ行使スルモノアリ。司法部ニ依リ任命セラレタル審理員ヲ有スル縣ニ於テハ初級審判廳（既ニ廢止セラレ）ノ權限ニ屬シタル小事件ハ縣知事法廷ノ名ニ於テ審理員ノ責任ヲ以テ審理員自身之ヲ裁判シ地方審判廳管轄ノ事件ニ在リテハ審理員ハ縣知事ト共同ノ責任ヲ以テ事件ヲ審理スルモノトス。是等ノ規則ハ新式裁判所ノ數比較的少ナキ結果支那國ニ於ケル訴訟ノ大部分カ今尙縣知事法廷ノ手中ニ在ルノ故ヲ以テ特ニ注目ニ値ス。尙縣知事法廷カ其ノ裁量ニ依リ被告人審問以前ニ於テ三月間之ヲ拘留スルノ權限アリトセラレルコトニ付テモ亦注意スルヲ要ス（此ノ場合ニ刑事訴訟條例ノ定ムル條件ニ從フヘキコト云フ迄モナシ）。而已ナラス此ノ種法廷ニ於ケル訴訟當事者ハ千九百十三年二月十六日ノ司法部令ニ依レハ辯護士ヲ出席セシムルノ權利ヲ有セスシテ單ニ辯護士ヨリ證據書類ヲ提出セシメ得ルニ過キス。千九百十五年十一月二十四日ノ教令ニ

依レハ縣知事ハ又普通裁判所ト異リ初級審判廳管轄ノ事件ノ裁判ニ付テハ判決書ヲ交付スルノ義務ナシ。縣知事カ地方審判廳トシテ審理裁判シタル刑事事件ノ裁判ハ高等審判廳ノ職權ニ依リ之ヲ覆判スヘキモノトス（千九百十四年七月三日附教令千九百二十二年六月二十八日修正）。北京隣接ノ各縣ニ在リテハ縣知事ニ於テ事件重要ニシテ地方行政ニ重大ナル關係アリト認メタルトキハ審理員ノ承諾ヲ得テ縣知事自ラ之ヲ審理スルコトヲ得。縣知事審理訴訟暫行章程第四十二條ニ依レハ同規則ト矛盾セサル一切ノ法律、命令及規則ハ縣知事法廷ノ訴訟手續ニ準用アリ。

(10) 檢察廳調度司法警察章程

七一 檢察廳調度司法警察章程ハ千九百十年四月四日始メテ公布セラレ後千九百十四年四月四日修正セラレタルモノナリ。同法ハ檢察官ノ法院編制法第四百條ニ準據シテ爲ス司法警察ノ指導監督ニ關スルモノナリ。同法ハ司法警察ノ職務ヲ有スル官吏ノ種類ヲ舉ケ且犯罪人ノ逮捕、搜索、護送、保釋及檢死ノ如キ司法警察官ノ職務ニ付規定ス。實際ニ於テハ司法警察ハ二三ノ例

外ヲ除キ特別ノ一體系ヲ構成スルモノニ非スシテ普通ノ警察カ司法事項ニ關聯シテ特別ノ職務ヲ實行スルモノナリ。犯罪又ハ犯人ヲ發見シタルトキハ司法警察ハ直ニ之ヲ權限アル檢察官ニ報告スルヲ要シ然ル後檢察官ノ取調以前警察官自身ニ於テ或ル種ノ豫備ノ取調ヲ行フコトヲ得（刑事訴訟條例第二百二十九號）。通則トシテ司法警察ハ斯ノ如キ事項ニ關シテハ正規ノ檢察官ノ指揮監督ノ下ニ在ルモノナレトモ刑事訴訟條例第二百三十三條ニ依レハ京師（北京）警察廳長、各省警察廳長、憲兵司令官及縣知事ハ司法警察官トシテ地方檢察廳檢察官ノ權利ト並行スル犯罪取調ノ權利ヲ有スルヲ以テ是等ノ司法警察官ハ隨時地方警察廳ノ檢察官ノ指揮ヲ受クルコトナクシテ行動スルコトヲ得。司法警察官ヲシテ地方檢察廳檢察官ト並行セル取調ノ權力ヲ行使スルコトヲ得シムルハ多クノ國家ニ於テ其ノ例ヲ見サル所ナリ。而シテ斯ノ如キ制度ヲ認ムルニ拘ラス取調及訴追ノ爲事件ヲ檢察官ニ引渡ス以前ニ司法警察官ノ檢察官トシテ取調ヲ爲スコトニ關シ何等時間上ノ制限ナキ爲右手續ハ往々ニシテ遲滯ヲ來スニ至ル。

(二) 民事事件ニ關スル諸法規

七二 最近迄支那國ノ立法者ハ刑事法規ト民事法規トヲ區別スルノ必要ヲ認メス兩者ハ前清時代ニ於テハ合シテ一箇ノ法典即大清律令中ニ統一セラレタリシカ新法制創設後既ニ約十五年ヲ經過シタル今日ニ於テモ民法典トシテ議會ヲ通過シタル法規未タ制定セララルニ至ラスシテ唯二三ノ民事事件ニ付箇々ノ成文法ノ制定アリタルニ過キサル狀況ナリ。同様ノ事情ハ次章ニ於テ述フヘキ商事事件ニ付テモ存在ス。而シテ民法ノ成文法規ノ欠缺ハ次ノ方法ニ依リテ之ヲ補充シツツアリ。

- (1) 民國ノ制度ト矛盾セサル民事事件ニ關スル大清律令中ノ規定ノ適用
- (2) (1)ニ於テ述ヘタル大清律令ノ規定並慣習及條理ニ準據セル大理院ノ判決
- (3) 革命以後制定セラレタル單行ノ諸法規

斯ノ如ク民國創設以後ノ支那國ニ於テハ一部分ヲ裁判官ノ判決ヨリ、一部分ヲ大清律令中ノ有

效部分ヨリ、又他ノ一部分ヲ單行ノ諸法規ヨリ集成セル一體ノ民法存スルモノトス。

(1) 大清律令中ノ民事規定

七三 民國創設後幾何モナク千九百十二年三月十日大總統ハ次ノ命令ヲ發シタリ。

「民國ノ法律未タ公布セラレサルニ依リ以前實施セラレタル一切ノ法規及暫行新刑律ハ當分ノ内尙之ヲ適用スヘシ但シ民國政體ト牴觸スル條項ハ無効ナルヘシ。」

斯クシテ大總統令ニ依リ曩ニ實施セラレタル清朝ノ一切ノ法律ハ新政體ト牴觸スル條項ヲ除クノ外中華民國政府ニ依リテ承認セラレタルコトナレリ。此ノ承認ハ民國三年ニ於テ左ノ如キ大理院ノ判決第三百四號ニ依リテ確認セラレタリ。

「中華民國ノ民法典ノ公布セララル迄ハ刑罰ニ關スル部分及現行ノ政府組織ト牴觸スル部分ヲ除キ清朝ノ法規ハ引續キ其ノ效力ヲ有ス。右法規ハ刑律ノ名ヲ有スト雖其ノ規定中ニハ民事及商事ニ關スルモノアリ單ニ名稱ノ故ヲ以テ其ノ廢止ヲ推斷スヘカラス。」

大清律令ノ如何ナル規定カ支那國ノ法廷ニ於テ實施セラレツアルヤヲ箇々ニ付説明スルコトハ困難ナリト雖委員會ニ提供セラレタル英文及佛文ノ大理院ノ判決例ニ付研究スルトキハ其ノ相當多數ノ規定殊ニ身分ノ問題ニ關スル諸規定カ現ニ其ノ適用ヲ見ツツアルモノナルコトヲ知ルコトヲ得。

(2) 大理院判例

七四 大理院ハ其ノ設立後幾何モナクシテ其ノ判決ニ於テ民事事件ノ裁判ヲ指導スヘキ原則ヲ表示シタリ。此ノ判決ハ民國二年上告事件第六十四號ニシテ左ノ如シ。

「民事事件ハ先ツ法規ノ明文ニ依リ、明文ノ規定ナキトキハ慣習ニ依リ、慣習ナキトキハ條理ニ依リ之ヲ裁定スヘシ。」

七五 大理院ハ其ノ後ノ判決ニ依リ慣習ノ適用セララルヘキ範圍ヲ表示セリ。斯種判決ノ最初ニシテ且最明瞭ナルモノハ民國二年上告事件第三號ニシテ次ノ如シ。

「慣習カ有效ナル爲ニハ四箇ノ要件ヲ必要トス即チ左ノ如シ。

- 1 慣習ハ一般的ニ且從前ヨリ人民ニ依リテ遵守セラレタルコトヲ要ス。
- 2 慣習ハ人民ニ依リテ法トシテ遵守セラレツツアルコトヲ要ス。
- 3 慣習アル事項ニ付別ニ何等ノ明文ノ規定ナキコトヲ要ス。
- 4 慣習ハ公ノ秩序及善良ノ風俗ニ反セサルコトヲ要ス。」

尙千九百十五年九月十五日公布ノ司法部令ハ民事事件ニ付地方的慣習ヲ尊重スヘキコトヲ命ジタリ

七六 條理ニ關シテハ實際ニ於テ裁判所ハ千九百二十六年二月十九日ノ會合ノ席上支那國委員ノ述ヘタルカ如ク法典草案ノ規定ヲ條理トシテ參照スルモノノ如シ。然レトモ條理ノ淵源ハ獨リ是等ノ法典ノミニ限ラルルニ非スシテ法典草案ニテ足ラサル事項ニ關シテハ選擇ノ範圍廣キニ涉ルヲ以テ訴訟ノ提起アリタル場合如何ナル條理カ適用アルヘキモノナルヤヲ豫メ定ムルカ如

キハ一般人ノ到底能クシ難キ所ナリトス。

七七 委員會ハ大理院ノ多數ノ判決ノ英文及佛文要領ノ配布ヲ受ケタレトモ其ノ支那文ハ之カ配布ヲ受ケス。右支那文ノ政府刊行物ハ現在絶版ナルカ如シ。大理院ハ判決ノ外ニ別ニ法律ノ抽象的ナル論點ニ付其ノ意見ヲ公表スルノ權アリ。是等ノ意見ハ集リテ數冊ヲ成シ判決トシテ下級審判廳ヲ拘束スルノ效力ナシト雖大理院ヨリ出テタルノ故ヲ以テ大ニ重要視セラレ。大理院ノ判決及意見カ有益ナル民法ノ淵源ヲ成スコトニ付テハ何等疑ナキモ其ノ如何ナル程度ニ於テ民法典及其ノ他ノ成文民法ノ缺陷ヲ補充スルモノナリヤ確認スルコト難シトス。尙特定ノ場合ニ付法院編制法第四十五條中規定ヲ設クルモノアリト雖モ下級審判廳ヲシテ大理院判決ノ一切ヲ一般的ニ承認セシメムトセハ之ニ關シ更ニ一ノ確定的ナル規定ヲ設クルノ要アルヘシ。

(3) 革命以後公布セラレタル單行ノ諸法規

(イ) 民事實體法

七八 民事實體法トシテ委員會ノ注意スル所トナリタル諸法規ヲ舉クレハ次ノ如シ
 清理不動產典當辦法 千九百十五年十月六日教令ニ依テ公布セラレタルモノニシテ不動產ノ擔
 保提供ニ關スル諸規定ヲ掲ク。

登記通例及不動產登記條例 千九百二十二年五月二十一日司法部令ニ依リテ公布セラレタルモ
 ノニシテ前ノ規則ハ七種類ノ事項ニ關スル登記ノ規定ヲ爲シ其ノ登記ニ完全ナル公證力ヲ附與
 ス。但シ其ノ完全ナル施行規則ハ未タ公布ニ至ラス。後ノ規則ハ不動產ニ關スル權利ニ關スル證
 書ヲ地方審判廳附屬ノ特別ノ事務所ニ於テ登記スルコトニ關スル手續ヲ定ム。同規則ノ第五條
 ニ於テ不動產物權ニ關スル事項ハ之ヲ登記スルニ非サレハ第三者ニ對抗スルコトヲ得スト定ム。
 驗契條例 不動產登記ニ關スル規則實施ノ豫備的施設トシテ千九百十四年一月十一日教令ヲ以
 テ公布セラレタリ。不動產登記條例ノ未タ施行セラレサル場所ニハ是等ノ規定ハ尙重大ナル意
 義ヲ有スルモノナリ。

(ロ) 民事訴訟條例

七九 民事訴訟條例ハ初メ千九百二十一年一月二十二日ノ教令ヲ以テ東三省(滿洲)特別區域法
 院ニ於テ露西亞人ニ關係アル事件ニ適用セラレタルモノナルカ千九百二十二年一月六日ノ教令
 ニ依リ一切ノ民事事件ニ付支那國ノ一切ノ裁判所ニ於テ適用アルコトナレリ。此ノ規則ヲ補
 充スルモノトシテ「民事訴訟執行規則」ノ名稱ヲ有スル一規則アリ。千九百二十年八月三日司
 法部令ニ依リテ實施セラレタリ。又「民事簡易程序暫行規則」アリ。千九百二十二年一月二十
 五日教令ニ依リ公布セラレ輕微ナル民事事件ノ審理ニ關スル手續ヲ定ム。

八〇 民事訴訟手續ニ關シ第一ニ爲スヘキ批評ハ民事被告人ノ拘留ニ關ス。蓋シ斯ノ種ノ拘留ハ
 支那國ニ在リテハ今尙可能ナルヤニ見受ケラルルヲ以テナリ。民事拘留ニ關スル基礎ハ當初北
 京ニ於テ實施セラレタル千九百十四年一月十四日ノ司法部令(第百五十五號)ニ存ス。同令ハ
 千九百二十一年十月六日ノ司法部令(第九百四十二號)ニ依レハ漸次十五省ニ擴張セラレタル

モノナリ。支那國委員ハ千九百二十六年三月二十三日ノ委員會第十回會議ニ於テ是等ノ規則ハ新式裁判所ニ關スル限り千九百二十二年一月一日以後ハ民事訴訟條例ニ依リ廢止セラレタリト述ヘタリ。然レトモ是等ノ規則ハ千九百二十二年九月十八日及千九百二十三年八月三十一日ノ司法部令（第八千五百八十二號）ニ依リ當分尙北京及甘肅省ニ實施セララルコトナリ居レリ。司法部カ大總統ニ依リテ公布セラレタル民事訴訟條例ノ精神ニ違反スル補充的規則ヲ公布シタルノ一事ハ特ニ注意スルコトヲ要ス。支那國ニ於ケル民事被告人ノ拘留ハ破産法ノ欠缺及不動産登記ニ關スル規則ノ未實施ナルコトニ依リ其ノ存在ノ理由ヲ説明シ得ヘシト雖現行諸規則中ニ於テハ原告側ノ背信ニ對抗スヘキ充分ナル何等ノ保障ヲモ規定シ居ラサルカ如シ。

八一 第二ノ批評ハ敗訴債務者ノ拘留ニ關ス。高等以下各級審判廳章程第四十二條ヲ援用セル民事訴訟執行規則第七條ニ依レハ敗訴債務者ハ三年ヲ限り之ヲ拘留スルコトヲ得。然レトモ千九百二十六年二月二十六日ニ開カレタル會議ノ席上支那國委員ノ説明スル所ニ依レハ敗訴債務者

ノ拘留ハ千九百二十五年一月二十七日ノ司法部令ニ依リ（第三千七百七十號）債務者ノ財産ヲ審查スル爲三月ノ期間之ヲ爲ス場合ノ外總テ禁止セララルコトナレル由ナリ。之ニ關聯シテ注意スヘキハ即チ民事訴訟執行規則ノ下ニ於テハ債權者側ノ詐欺又ハ過失ニ依リ債務者ニ屬スト認定シタル財産ニ對スル第三者ノ權利ハ充分ナル保護ヲ受ケ居ラサルコト之ナリ。

八二 民事訴訟條例ハ支那國民事法規中ニ於テ特別ノ地位ヲ占ム。即チ上ニ述ヘタル如ク支那國ニハ未タ民法典ナク民事訴訟條例ハ民法典ニ先ンシテ制定セラレタルモノナリ。從テ民法典ニ於テ定義ヲ缺ク事項ヲ民事訴訟條例中ニ於テ發見スルカ如キコトアリ。證據ニ關スル民事訴訟條例ノ第三部第三章ノ規定モ満足トハ認メ難シ。其理由四五アリ。新式裁判所ハ其ノ事務開始以來日未タ長カラサルニ依リ證據ニ關スル裁判上ノ先例ヲ確立スルニ至ラス。判事ハ又證據書類ニ關シ其ノ執行力ヲ公證スヘキ適當ナル施設ナキ爲法廷ニ提出セラレタル書類ノ正當若ハ妥當ナルヤ否ヤヲ判定スルニ困惑シツツアリ。公證機關ノ欠缺ハ民事訴訟條例第一百一條ニ公證人ノ

規定アルニ拘ラス支那國ニ於テ哈爾濱ヲ除キ未タ公證人ノ存在セサルコトヨリ來ル。土地測量ニ關スル規則ノ未タ實施セラレサルコトモ亦證據ニ關スル規定ノ不備ノ原因タリ。登記通例施行規則ノ未タ完成セサルコト亦同シ。訴訟當事者ノ身分ヲ定ムルニ必要ナル年齢ニ關スル適當ノ證據ノ如キモ支那國ニ戶籍ニ關スル何等ノ施設ナキ爲又之ヲ得ルコト困難ナリ。訴訟當事者ノ婚姻關係ニ付又同シ。又近代科學ノ素養アル人少キ爲必要ニ應シテ事件ニ關スル専門的鑑定ヲ得ルカ如キコトモ亦容易ナラサルモノアリ。

(ハ) 縣知事審理訴訟暫行章程

八三 縣知事審理訴訟暫行章程ハ既ニ前掲第七十節ニ於テ刑事訴訟手續ニ關聯シテ論議シタリ。然レトモ同法ハ又民事事件ニ關スル縣知事法廷ノ訴訟手續ヲモ包含スルカ故ニ再ヒ本節ニ於テ説明ヲ爲スヘシ。同法第十三條及第十四條ニ依レハ縣知事法廷ハ遁匿ノ虞アル場合ニ於テ二月ヲ限リ民事被告人ヲ拘留スルノ權限アリ。敗訴債務者ニ關シ新式裁判所ニ適用セラルル民事訴訟

執行規則ハ千九百二十一年七月六日ノ司法部令(第七百六十六號)ニ依リ縣知事法廷ニモ適用アリトセラル。千九百二十五年一月二十七日附ノ司法部令(第三千七百七十號)ハ民事執行規則ノ第四十二條ヲ修正スルモノニシテ新式裁判所カ敗訴被告人ヲ三月ヲ超テ拘留スルコトヲ禁止スルモノナルカ之モ亦其ノ儘縣知事法廷ニ適用アリ。刑事事件ニ於ケル如ク辯護士ハ出廷ヲ許サレズ唯辯論書ヲ提出シ得ルニ止マル。然レトモ刑事事件ニ於ケル手續ト異ナリ民事事件ノ判決ハ高等審判廳ニ依リ覆判セラルルコトナシトス。

(ニ) 民事公斷條例

八四 民事公斷條例ハ千九百二十一年八月八日ノ司法部令ニ依リ公布セラレ民事上ノ爭議ノ仲裁及和解ニ關スル手續ヲ定ムルモノナリ。仲裁判斷ハ普通ノ裁判所ノ終局判決ト同様ノ執行力ヲ認メラル。

(ホ) 無領事裁判權國人民刑事訴訟章程

八五 無領事裁判權國人民刑事訴訟章程ハ六條ヨリ成リ千九百十九年五月三日敕令ニ依リ始メテ公布セラレ千九百二十年十月三十日修正セラレタルモノナリ。同法ハ領事裁判權ナキ國ノ人民ニ關係アル事件ノ審理手續ヲ規定スルモノニシテ之ニ依レハ領事裁判權ナキ國ノ人民ニ關係アル事件ハ新式裁判所又ハ之ニ相當スル東三省(滿洲)特別區域法院ノ管轄トシテ種事件ノ起リタル地方ニ新式裁判所ナキ場合ニハ事件ヲ最寄ノ地方審判廳ニ移送スヘク斯ノ種事件遠隔ナル内地ニ起リ之ヲ地方審判廳ニ移送スルコト能ハサル場合ニハ其ノ審理方法ハ司法部ト協議ノ上之ヲ定ムルモノトス。千九百十九年十月二十三日附ノ司法部ノ訓令ニ據レハ新式裁判所ニ於ケル領事裁判權ナキ國ノ人民ニ關係アル事件ノ審理ハ高等審判廳管轄ノ犯罪事件ヲ除キ外國ニ於テ修學セル特別ノ訓練アル推事及檢察官之ヲ行フモノトス。又裁判所ニハ通譯ヲ附置シ法律上又ハ其ノ他ノ困難ナル問題起リタルトキハ之ヲ司法部ニ請訓ス。領事裁判權ナキ國ノ人民ノ收監及拘留ハ新式監獄及看守所ニ於テ之ヲ爲シ右設備ナキ場合ニ於テハ適當ノ建物ヲ以テ此

ノ目的ニ充用スヘキモノトス。本法ハ民事及刑事ノ事件ノ兩者ニ適用アリ

(一) 法律適用條例

八六 法律適用條例ハ千九百十八年八月六日敕令ヲ以テ實施セラレタルモノニシテ外國人ニ關係アル特定ノ事件ニ付支那國裁判所カ外國法ヲ適用スヘキコトヲ規定ス。同法ハ國際私法ノ性質ヲ有スルモノニシテ總則、親族ニ關スル法、人ニ關スル法、相續ニ關スル法、物ニ關スル法、法律行為ニ關スル法ノ各章ヨリ成ル。同法ハ支那國ニ於ケル外國人ノ能力ハ本國法ニ依ルト定ムルカ故ニ本法ハ外國人ニ取リテ殊ニ結婚、離婚、私生子認知、養子縁組、親族、後見、相續ノ如キ身分ニ關係アル事項ニ付重大ナル意義ヲ有ス。斯ノ如キ事項ニ付テハ支那國ノ法規及慣習ハ多クノ場合ニ於テ根本的ニ諸外國ト相異スルモノナリ。茲ニ一言説明スヘキコトアリ即チ裁判所ハ民事訴訟條例ノ第二百二十三條及第三百三十一條ニ依リ訴訟費用ノ保障及訴訟救助ニ關スル外國法ニ付司法部ノ意見ヲ求ムルノ權限アルコト之ナリ。